

岐阜県文化財保護センター

調査報告書 第146集

堅田遺跡 美濃国分尼寺東遺跡

2020

岐阜県文化財保護センター

かた だ
堅田遺跡
み の こく ぶん に じ ひがし
美濃国分尼寺東遺跡

2020

岐阜県文化財保護センター



平成 26 年度堅田遺跡・美濃国分尼寺東遺跡発掘区遠景（北東から）



平成 27 年度堅田遺跡発掘区遠景（西から）



堅田遺跡出土遺物

序

堅田遺跡及び美濃国分尼寺東遺跡が所在する不破郡垂井町は濃尾平野の北西部に位置し、北西部の池田山塊や南西部の南宮山塊に囲まれた地形的特徴から、古来より東西交通の要衝とされてきた地域です。特に古代においては、西から不破の関（関ヶ原町）、美濃国府（垂井町）、美濃国分尼寺（垂井町）、美濃国分寺（大垣市）と連なるこの一帯は、美濃地域の政治・文化の中心地でした。

このたび、大垣土木事務所による公共社会資本整備総合交付金事業（県道赤坂垂井線拡幅工事）に伴い、不破郡垂井町東部に所在する堅田遺跡及び美濃国分尼寺東遺跡の発掘調査を実施しました。

両遺跡の発掘調査では、主に古墳時代から古代、中世、近世の遺構・遺物を確認しました。東西に長いトレンチ状の発掘区において、掘立柱建物、堅穴建物、柵、柱穴、溝状遺構、土坑を検出したことから、集落域の一部にあたると考えられます。また、土器や石器、金属製品及び木製品が出土しました。土器では須恵器、灰釉陶器、山茶碗が出土遺物の大半を占め、少量ながら土師器、瀬戸美濃産陶器も出土しました。また輪の羽口や鉄滓といった鍛冶関連遺物や、火舎香炉、転用硯、墨書土器、水瓶といった寺院に関連する遺物も出土しました。残念ながら美濃国分寺及び美濃国分尼寺と直接関連する遺構・遺物を確認することはできませんでしたが、両遺跡周辺の人々の暮らしぶりを考えるうえで重要な資料を得ることができました。本報告書が広く県民の皆様に活用され、埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史的研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土品の整理・報告書作成に当たりまして、御理解と御協力をいただきました関係機関並びに関係者各位、垂井町教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

令和2年2月

岐阜県文化財保護センター

所長 小林 法良

例言

- 1 本書は、岐阜県不破郡垂井町平尾に所在する堅田遺跡（岐阜県遺跡番号 21361-11678）及び美濃国分尼寺東遺跡（岐阜県遺跡番号 21361-11679）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、公共社会資本整備総合交付金事業（県道赤坂垂井線拡幅工事）に伴うもので、岐阜県大垣土木事務所から岐阜県が委託を受けた。発掘作業及び整理等作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 三重大学名誉教授八賀晋氏及び大垣市教育委員会高田康成氏の指導のもとに、発掘作業は平成 26（堅田遺跡・美濃国分尼寺東遺跡）・27 年度（堅田遺跡）に実施した。整理等作業は平成 30 年度に実施した。
- 4 発掘作業及び整理等作業の担当は、本書第 1 章第 2 節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆及び編集は佐竹正憲が行った。なお、第 4 章・第 5 章については、柏木賢一の所見をもとに佐竹が行った。
- 6 発掘作業における現場管理、掘削、測量、景観写真撮影などの支援業務と、出土遺物の洗浄・注記は、株式会社イビソク（平成 26 年度）、株式会社文化財サービス（平成 27 年度）に委託して行った。整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの支援業務は、株式会社フジヤマに委託して行った。金属製品保存処理は株式会社イビソクに委託して実施した。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 木製品の放射性炭素年代測定及び鉄滓成分分析は株式会社パレオ・ラボに委託して行い、第 6 章に掲載した。執筆は、株式会社パレオ・ラボによる結果をもとに佐竹が行った。
- 9 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。
林正憲、藤澤良祐、渡邊博人、垂井町教育委員会
- 10 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第Ⅶ系を使用する。
- 11 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2014『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 12 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目次

巻頭図版

序

例言

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	3
第2章 遺跡の環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	9
第3章 調査の成果	13
第1節 基本層序	13
第2節 遺構の概要	15
第3節 遺物の概要	17
第4章 美濃国分尼寺東遺跡	20
第1節 遺構と遺物	20
第2節 攪乱坑・遺物包含層出土遺物	28
第5章 堅田遺跡	36
第1節 縄文時代の遺構と遺物	36
第2節 古墳時代及び古代の遺構と遺物	41
第3節 中世の遺構と遺物	97
第4節 近世以降の遺構と遺物	129
第5節 その他の遺構と遺物	135
第6節 攪乱坑・遺物包含層出土遺物	139
第6章 自然科学分析	206
第1節 分析の概要と成果	206
第2節 放射性炭素年代測定	207
第3節 鉄滓成分分析	210
第7章 総括	212
第1節 美濃国分尼寺東遺跡の遺物について	212
第2節 堅田遺跡の遺物について	214
第3節 遺構について	220
引用・参考文献	227

写真図版

報告書抄録

插图目次

图 1 遗址位置图	1	图 40 SD17 遗址图	60
图 2 试掘调查坑、木壳掘调查範圍	2	图 41 SD18・22 遗址图	61
图 3 发掘区地区划分图	4	图 42 SD23・25 遗址图、SD25 遗址实测图	62
图 4 发掘区周边地形图	7	图 43 SD26 遗址图、遗址实测图 (1)	64
图 5 遗址周边的地质概略图	8	图 44 SD26 遗址实测图 (2)	65
图 6 周边遗址位置图	12	图 45 SD27・28 遗址图、遗址实测图	66
图 7 基本层序柱状图	14	图 46 SD30・35・36 遗址图	67
图 8 遗址属性模式图	16	图 47 SD39 遗址图	68
图 9 SP1・SD1・2 遗址图	21	图 48 SD39 遗址实测图	69
图 10 SD3・4・5・6・7 遗址图	23	图 49 SD43 遗址图	70
图 11 SK4・5・17・19 遗址图、SK4・5 遗址实 测图	25	图 50 SK31・34・43 遗址图、遗址实测图	71
图 12 SK22 遗址图、遗址实测图	26	图 51 SK55 遗址图、遗址实测图	72
图 13 SK27・32 遗址图、SK27 遗址实测图	27	图 52 SK56 遗址图、遗址实测图	73
图 14 掘乱坑・遗址包含层出土遗址实测图	28	图 53 SK72・88 遗址图、遗址实测图	75
图 15 美濃国分尼寺東遗址发掘区全城图 割付图	29	图 54 SK132・158 遗址图、SK158 遗址实测图	76
图 16 美濃国分尼寺東遗址发掘区全城图 分割图 (1)	30	图 55 SK165・207 遗址图、SK207 遗址实测图	77
图 17 美濃国分尼寺東遗址发掘区全城图 分割图 (2)	31	图 56 SK210 遗址图、遗址实测图	78
图 18 美濃国分尼寺東遗址发掘区全城图 分割图 (3)	32	图 57 SK234・263 遗址图、遗址实测图	79
图 19 美濃国分尼寺東遗址发掘区全城图 分割图 (4)	33	图 58 SK269・271 遗址图	81
图 20 SK290・291・420 遗址图、SK290・420 遗址实 测图	37	图 59 SK293・318・453・512 遗址图、SK318・453・512 遗址实测图	82
图 21 SK425・444・460 遗址图、SK460 遗址实测图	38	图 60 SK597・619 遗址图、遗址实测图	83
图 22 SK786・1069 遗址图、遗址实测图	33	图 61 SK694 遗址图、遗址实测图	85
图 23 SK1120・1121 遗址图	40	图 62 SK742 遗址图、遗址实测图	86
图 24 SI1 遗址图、遗址实测图	41	图 63 SK816・838 遗址图、遗址实测图	88
图 25 SI2 遗址图 (1)	43	图 64 SK882・891・894 遗址图、SK882 遗址实测图	89
图 26 SI2 遗址图 (2)・遗址实测图	44	图 65 SK905・928 遗址图、SK928 遗址实测图	90
图 27 SB1 遗址图	45	图 66 SK931 遗址图、遗址实测图	91
图 28 SB1 遗址实测图	46	图 67 SK950・974 遗址图、遗址实测图	92
图 29 SB2 遗址图	47	图 68 SK982・985・986 遗址图、SK982 遗址实测图	94
图 30 SB3 遗址图	48	图 69 SK997・1135 遗址图、遗址实测图	95
图 31 SA1 遗址图	49	图 70 SK1136・1139 遗址图、遗址实测图	96
图 32 SA2 遗址图	50	图 71 SA5 遗址图、遗址实测图	98
图 33 SA3 遗址图	51	图 72 SA6 遗址图、遗址实测图	99
图 34 SA4 遗址图	52	图 73 SD2・3 遗址图 (1)	101
图 35 SA8 遗址图	53	图 74 SD2・3 遗址图 (2)、SD2 遗址实测图	102
图 36 SP9・21・23・161・162 遗址图、SP161 遗址实 测图	55	图 75 SD9・12・14 遗址图	103
图 37 SD6・10 遗址图、SD10 遗址实测图	57	图 76 SD19・20 遗址图、遗址实测图	105
图 38 SD11・15 遗址图	58	图 77 SD21・24 遗址图、遗址实测图	106
图 39 SD16 遗址图	59	图 78 SD33 遗址图、遗址实测图	107
		图 79 SD34 遗址图、遗址实测图	109
		图 80 SD41 遗址图、遗址实测图	110

図 81	SD42 遺構図、遺物実測図	111
図 82	SK141・343 遺構図、遺物実測図	113
図 83	SK519 遺構図、遺物実測図	114
図 84	SK623 遺構図、遺物実測図	115
図 85	SK627 遺構図、遺物実測図	116
図 86	SK637・652 遺構図、遺物実測図	117
図 87	SK654・658 遺構図、遺物実測図	119
図 88	SK660 遺構図、遺物実測図	120
図 89	SK661・766・777・826 遺構図、SK766・777・826 遺物実測図	122
図 90	SK879・888・984 遺構図、遺物実測図	124
図 91	SK988・1119・1137 遺構図、SK1119・1137 遺物実測図	126
図 92	SK1138 遺構図、遺物実測図	127
図 93	SD1・4・5・8 遺構図	130
図 94	SD13 遺構図、遺物実測図	131
図 95	SK61・134 遺構図、SK61 遺物実測図	133
図 96	SK673 遺構図	134
図 97	SA7 遺構図、遺物実測図	136
図 98	SK148・618 遺構図、SK618 遺物実測図	137
図 99	SK1072 遺構図、遺物実測図	138
図 100	攪乱坑・遺物包含層出土遺物実測図(1)	139
図 101	攪乱坑・遺物包含層出土遺物実測図(2)	140
図 102	聖田遺跡発掘区全域図 割付図	141
図 103	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(1)	142
図 104	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(2)	143
図 105	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(3)	144
図 106	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(4)	145
図 107	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(5)	146

図 108	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(6)	147
図 109	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(7)	148
図 110	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(8)	149
図 111	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(9)	150
図 112	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(10)	151
図 113	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(11)	152
図 114	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(12)	153
図 115	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(13)	154
図 116	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(14)	155
図 117	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(15)	156
図 118	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(16)	157
図 119	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(17)	158
図 120	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(18)	159
図 121	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(19)	160
図 122	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(20)	161
図 123	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(21)	162
図 124	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(22)	163
図 125	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(23)	164
図 126	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(24)	165
図 127	聖田遺跡発掘区全域図 分割図(25)	166
図 128	暦年較正結果	208
図 129	須志器・灰軸陶器・山茶碗類の時期別破片数と美濃国分寺の変遷	217
図 130	須志器・灰軸陶器・山茶碗類の分布状況	218
図 131	古墳時代から古代の遺構	221
図 132	中世前期の遺構	222
図 133	発掘区周辺の字絵図	223
図 134	字絵図の区画と溝の位置	224
図 135	聖田古墳現況地形測量図	225

表目次

表 1	試掘・確認調査結果	2
表 2	周辺遺跡一覧表	11
表 3	検出遺構一覧表	15
表 4	出土遺物点数等一覧表	17
表 5	柱穴一覧表	34
表 6	溝状遺構一覧表	34
表 7	土坑一覧表	34
表 8	土器類観察表	35
表 9	竪穴建物一覧表	167
表 10	竪穴建物付風遺構一覧表	167
表 11	掘立柱建物一覧表	167
表 12	掘立柱建物付風遺構一覧表	167

表 13	樺一覧表	168
表 14	樺付風遺構一覧表(1)	168
表 15	樺付風遺構一覧表(2)	169
表 16	柱穴一覧表(1)	169
表 17	柱穴一覧表(2)	170
表 18	柱穴一覧表(3)	171
表 19	柱穴一覧表(4)	172
表 20	柱穴一覧表(5)	173
表 21	溝状遺構一覧表(1)	173
表 22	溝状遺構一覧表(2)	174
表 23	土坑一覧表(1)	174
表 24	土坑一覧表(2)	175

表 25	土坑一覧表 (3)	176	表 45	土坑一覧表 (23)	196
表 26	土坑一覧表 (4)	177	表 46	土坑一覧表 (24)	197
表 27	土坑一覧表 (5)	178	表 47	土坑一覧表 (25)	198
表 28	土坑一覧表 (6)	179	表 48	土器類観察表 (1)	199
表 29	土坑一覧表 (7)	180	表 49	土器類観察表 (2)	200
表 30	土坑一覧表 (8)	181	表 50	土器類観察表 (3)	201
表 31	土坑一覧表 (9)	182	表 51	土器類観察表 (4)	202
表 32	土坑一覧表 (10)	183	表 52	土器類観察表 (5)	203
表 33	土坑一覧表 (11)	184	表 53	土器類観察表 (6)	204
表 34	土坑一覧表 (12)	185	表 54	石製品観察表	205
表 35	土坑一覧表 (13)	186	表 55	金属製品観察表	205
表 36	土坑一覧表 (14)	187	表 56	測定材料及び処理	207
表 37	土坑一覧表 (15)	188	表 57	放射性炭素年代測定および暦年校正の結果	208
表 38	土坑一覧表 (16)	189	表 58	XRF 分析による半定量値	210
表 39	土坑一覧表 (17)	190	表 59	EDS 分析結果	210
表 40	土坑一覧表 (18)	191	表 60	須恵器・灰釉陶器の時期別破片数	212
表 41	土坑一覧表 (19)	192	表 61	土師器・近世陶磁器の時期別破片数	213
表 42	土坑一覧表 (20)	193	表 62	須恵器・灰釉陶器の時期別破片数	215
表 43	土坑一覧表 (21)	194	表 63	山茶碗類の時期別破片数	216
表 44	土坑一覧表 (22)	195	表 64	土師器・常滑産陶器・中国産陶磁器の時期別破片数	216

挿入写真目次

写真 1	鉄滓の断面組織	211
------	---------	-----

写真図版目次

巻頭図版

図版 1	平成 26 年度聖田遺跡・美濃国分尼寺東遺跡発掘区遠景 平成 27 年度聖田遺跡発掘区遠景
図版 2	聖田遺跡出土遺物

巻末図版

図版 1	美濃国分尼寺東遺跡発掘区
図版 2	美濃国分尼寺東遺跡の遺構
図版 3	聖田遺跡発掘区 (1)
図版 4	聖田遺跡発掘区 (2)
図版 5	聖田遺跡発掘区 (3)
図版 6	聖田遺跡発掘区 (4)
図版 7	聖田遺跡の遺構 (1)
図版 8	聖田遺跡の遺構 (2)
図版 9	聖田遺跡の遺構 (3)
図版 10	聖田遺跡の遺構 (4)
図版 11	聖田遺跡の遺構 (5)
図版 12	聖田遺跡の遺構 (6)

図版 13	聖田遺跡の遺構 (7)
図版 14	聖田遺跡の遺構 (8)
図版 15	聖田遺跡の遺構 (9)
図版 16	聖田遺跡の遺構 (10)
図版 17	聖田遺跡の遺構 (11)
図版 18	聖田遺跡の遺構 (12)
図版 19	聖田遺跡の遺構 (13)
図版 20	聖田遺跡の遺構 (14)
図版 21	美濃国分尼寺東遺跡出土遺物 聖田遺跡出土遺物 (1)
図版 22	聖田遺跡出土遺物 (2)
図版 23	聖田遺跡出土遺物 (3)
図版 24	聖田遺跡出土遺物 (4)
図版 25	聖田遺跡出土遺物 (5)
図版 26	聖田遺跡出土遺物 (6)
図版 27	聖田遺跡出土遺物 (7)
図版 28	聖田遺跡出土遺物 (8)
図版 29	聖田遺跡出土遺物 (9)

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

堅田遺跡及び美濃国分尼寺東遺跡は、不破郡垂井町大字平尾に所在する。堅田遺跡の範囲内には堅田古墳があり、遺跡の東側には国分寺遺跡が隣接し、東へ約120mの地点には国史跡美濃国分寺跡が存在する。また、美濃国分尼寺東遺跡の西側には美濃国分尼寺跡がある（図1）。

今回の発掘調査は、平成26・27年度公共社会資本整備総合交付金事業（県道垂井赤坂線拡幅工事）に伴う調査である。この事業予定地は、国分寺遺跡内を通り、美濃国分尼寺跡や堅田古墳に隣接するため、平成25年度に岐阜県大垣土木事務所の依頼により、岐阜県教育委員会が試掘・確認調査を行った。試掘調査坑は、垂井町の事業予定地内に36箇所（TR6～TR41）設定された（図2：試掘調査坑番号は試掘・確認調査時の名称を記載した）。その結果、TR10・12、TR14～TR18、TR20・21・23・24・26・28・30で遺構を検出し、TR8～TR10、TR12、TR14～TR21、TR23・24・26・27・30・37・39・41で土師器や須恵器、中近世陶器などの遺物が出土した（表1）。

試掘・確認調査の結果をもとに、岐阜県教育委員会社会教育文化課は、平成25年12月24日に平成25年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討会を開催し、本発掘調査が必要であると結論づけた。また、垂井町教育委員会は、試掘・確認調査によって事業予定地周辺が埋蔵文化財包蔵地であることを確認



図1 遺跡位置図（平成29年国土地理院発行2万5千分の1地形図「大垣」を使用）

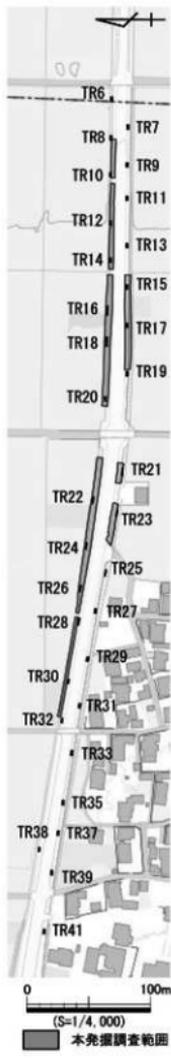


図2 試掘調査坑、本発掘調査範囲

したため、南北方向の旧道を境に東側に堅田遺跡、西側を美濃国分尼寺東遺跡として、遺跡発見の通知（平成26年1月29日付け垂教タ第103号）を提出した。これを受けて岐阜県教育委員会は、堅田遺跡を岐阜県遺跡番号21361-11678、美濃国分尼寺東遺跡を岐阜県遺跡番号21361-11679として遺跡地図に登録した（平成26年1月30日付け社文第7号の5）。

本工事は、文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、岐阜県大垣土木事務所長から岐阜県教育委員会教育長（以下「県教育長」という。）あてに埋蔵文化財発掘の通知（平成26年3月6日付け大土第601号）が提出され、同条第4項の規定に基づき、県教育長は同事務所長あて発掘調査実施勧告（平成26年3月20日付け社文第4号の233）をした。同事務所長は県教育長に発掘調査の実施を依頼し、岐阜県文化財保護センター（以下「当センター」という。）が実施した。本発掘調査は、平成26年度に堅田遺跡1,621㎡と美濃国分尼寺東遺跡388㎡、平成27年度に堅田遺跡2,058.4㎡を対象に、当センターが発掘調査を実施した。当センターは調査着手後、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく発掘調査の報告（平成26年7月8日付け文財セ第104号、平成27年7月3日付け文財セ第113号）を県教育長に提出した。

表1 試掘・確認調査結果

試掘坑 No.	検出遺構 (基数)	出土遺物 (点数)				
		縄文土器	土師器	須恵器	山茶碗	陶磁器
TR6	なし					
TR8	なし		9	3	6	2
TR9	なし					1
TR10	溝1		6	3	8	4
TR12	土坑6		11	5	5	2
TR13	なし					
TR14	溝		4			
TR15	土坑1	1				
TR16	溝1 土坑3		1	2		1
TR17	溝		5	3	2	
TR18	土坑2		2		2	
TR19	なし		1		9	
TR20	土坑3				1	
TR21	土坑2		1	1	4	2
TR22	なし					
TR23	溝1			3	1	1
TR24	土坑					1
TR25	なし					
TR26	土坑1		1			
TR27	なし			1		1
TR28	溝1					
TR29	なし					
TR30	溝1 土坑1		1			
TR31	なし					
TR32	なし					
TR33	なし					
TR35	なし					
TR37	なし					2
TR38	なし					
TR39	なし		1		2	
TR41	なし					1

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

堅田遺跡の発掘区は東西に長く、県道によって南北に分断されるため、平成26年度の発掘区について、県道の北側をA地点、県道の南側を西からB地点、D地点、平成27年度の発掘区について、県道の北側を西からDw地点、De地点、南側をE地点と呼称した。発掘作業は、平成26年度に美濃国分尼寺東遺跡(388㎡)と堅田遺跡のA～C地点(1,621㎡)を、平成27年度に堅田遺跡のDw～E地点(2,058.4㎡)を実施した。

世界測地系座標をもとに100m×100mの大グリッドを設定した。さらにその中に5m×5mの小グリッド(以下「グリッド」という。)を設定し、南北列にA～Tのアルファベット、東西列に1～20のアラビア数字を付けて併用した(図3)。そのため、美濃国分尼寺東遺跡北西端のグリッドはAB3、堅田遺跡De地点南東端のグリッドはEL18となる。

表土掘削は重機を用いて行い、遺物包含層掘削、遺構検出、遺構掘削はスコップ・草刈り鎌・移植ゴテなどを用いて人力で行った。遺構埋土は半截又は4分割して土層堆積状況などの必要な記録を作成した後に完掘した。また、遺構基盤層と遺構埋土の識別が困難な場合は、必要最低限のサブトレンチを設定し、両者の識別を明確にした上で遺構埋土を掘削した。なお、発掘区内は湧水が激しいため、排水溝を発掘区内に掘削して、排水を行いつつ作業を実施した。

遺物包含層掘削及び遺構検出時に出土した遺物は、原則として層位、グリッド単位で取り上げた。また、遺構出土遺物は半截前後で取り上げ方法を変えた。すなわち、半截前は検出面から約5cm下までをa、約5～10cm下をb、というように遺構内を概ね5cm単位の人工層位として取り上げ、半截後は分層した層位ごとに取り上げた。また、溝については土層観察用畦部分を分層した層位で、それ以外を人工層位で取り上げた。なお、遺構の性格や時期が分かるなど、遺構との関係性が検討できる出土状況のものについては、出土状況図の作成あるいは、トータルステーションを用いた3次元測量による出土位置の測定を行い取り上げた。

遺構番号は、原則として検出順に通番を付し、平成26年度は、美濃国分尼寺東遺跡の遺構はSと3桁の数字で表記し、堅田遺跡は各地点名を示すA～Eの後に、Sと4桁の数字で表記した。この番号は二次整理作業時に遺構種別ごとに振り替えた。

遺構等の実測作業は、原則として平面図はデジタル測量にて、断面図は手測り測量にて、それぞれ実施した。図面の縮尺は20分の1を基本としつつ、実測対象に応じて適切な縮尺を選択した。

写真撮影は、35mmフィルムカメラ(リバーサルフィルム、モノクロフィルム)、6×4.5cm版フィルムカメラ(リバーサルフィルム、モノクロフィルム)、デジタルカメラを使用した。また、各地点の完掘後に景観写真撮影を実施した。

自然科学分析は、SK165・SK269・SK271から出土した炭化物の放射性炭素年代測定と、SP134から出土した鉄滓の金属製品成分分析を行った。

2 調査の経過

発掘調査日誌から抜粋して、週毎の調査経過を以下に記載する。

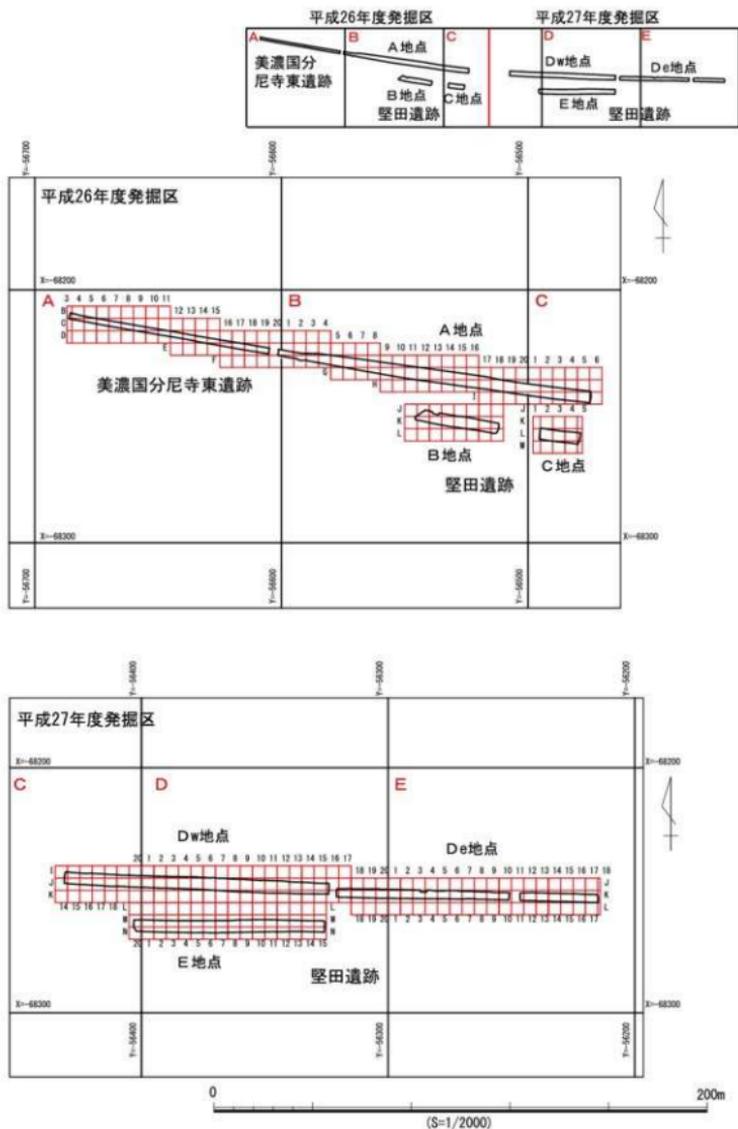


図3 発掘区地区割図

(1) 美濃国分尼寺東遺跡 (平成26年度)

- 第1週 (8/18~8/22) 重機による表土掘削開始。
 第2週 (8/25~8/29) 重機による表土掘削終了。
 第3週 (9/1~9/5) 人力掘削開始。
 第4週 (9/8~9/12) 並行する3条の溝状遺構 (SD3・SD4・SD5) を検出。
 第5週 (9/16~9/19) 大型の土坑 (SK4) を検出。
 第6週 (9/22~9/26) 調査終了、ラジコンヘリによる景観撮影実施。

(2) 壱田遺跡 (平成26年度)

- 第1週 (7/1~7/4) 重機によるB地点西半の表土掘削開始。
 第2週 (7/7~7/11) B地点西半の表土掘削終了、人力掘削開始。
 第3週 (7/14~7/17) B地点西半の調査終了、景観撮影実施。重機によるC地点の表土掘削終了、人力掘削開始。
 第4週 (7/22~7/25) B地点西半の埋戻し終了。重機によるB地点東半の重機掘削開始。
 第5週 (7/28~8/1) 土坑 (SK263) から転用硯 (灰釉陶器) 出土。C地点の調査終了、景観撮影実施。
 第6週 (8/4~8/8) B地点東半の人力掘削開始。C地点の埋戻し終了。
 第7週 (8/11~8/15) 並行する3条の溝状遺構 (SD19・SD20・SD21) を検出。
 第8週 (8/18~8/22) 溝状遺構 (SD21) から墨書土器 (山茶碗) 出土。B地点の調査終了、景観撮影実施。重機によるA地点西端部の表土掘削開始・終了。
 第9週 (8/25~9/28) A地点西端部の人力掘削開始。
 第10週 (9/1~9/5) 美濃国分尼寺東遺跡の表土掘削に伴い作業休止。
 第11週 (9/8~9/12) A地点西端部の調査継続。
 第12週 (9/16~9/19) A地点西端部の調査継続。
 第13週 (9/22~9/26) A地点西端部の調査終了。
 第14週 (9/29~10/3) 重機によるA地点東半の表土掘削開始。A地点東半の表土掘削終了、人力掘削開始。
 第15週 (10/6~10/10) A地点東半の調査継続。
 第16週 (10/14~10/17) 竪穴建物 (SI1) を検出。
 第17週 (10/20~10/24) A地点東半の調査終了。
 第18週 (10/27~10/31) 重機によるA地点西半の表土掘削開始。
 第19週 (11/4~11/7) A地点西半の人力掘削開始。八賀晋氏 (三重大学名誉教授) 現地指導。
 第20週 (11/10~11/14) 溝状遺構 (SD2・SD3) 調査終了。
 第21週 (11/17~11/21) ラジコンヘリによるA地点の景観撮影実施。
 第22週 (11/25~11/28) A地点の調査終了。発掘区埋戻し作業終了 (11/28)。

(3) 壱田遺跡 (平成27年度)

- 第1週 (7/1~7/3) 重機によるE地点の表土掘削開始。
 第2週 (7/6~7/10) E地点の表土掘削継続。

6 第1章 調査の経緯

- 第3週 (7/13～7/17) E地点の表土掘削終了。
- 第4週 (7/20～7/24) E地点の人力掘削開始。
- 第5週 (7/27～7/31) 並行する3条の溝状遺構 (SD39・SD41・SD42) を検出。
- 第6週 (8/3～8/7) 大型土坑 (SK1138) を検出。
- 第7週 (8/10～8/14) 並行する3条の溝状遺構 (SD33・SD34・SD36) を検出。
- 第8週 (8/17～8/21) 高所作業車によるE地点の景観撮影実施。
- 第9週 (8/24～8/29) E地点の調査終了。重機によるDe地点の表土掘削開始。De地点の人力掘削開始。
- 第10週 (9/1～9/4) De地点の表土掘削と人力掘削を継続。
- 第11週 (9/7～9/11) 土坑 (SK838) から完形の坏蓋2点出土。
- 第12週 (9/14～9/18) 竪穴状の土坑 (SK931) を検出。
- 第13週 (9/21～9/25) De地点の表土掘削と人力掘削を継続。
- 第14週 (9/28～10/2) 高所作業車によるDe地点の景観撮影実施。De地点の調査終了。重機によるDw地点の表土掘削開始。
- 第15週 (10/5～10/9) 掘立柱建物2軒 (SB2・SB3) を検出。
- 第16週 (10/12～10/16) 土坑 (SK420) から縄文土器出土。
- 第17週 (10/19～10/23) 大型の土坑 (SK623) を検出。
- 第18週 (10/26～10/30) Dw地点の表土掘削と人力掘削を継続。
- 第19週 (11/2～11/6) 土坑 (SK654) から転用硯 (山茶碗) 出土。
- 第20週 (11/9～11/13) 高田康成氏 (大垣市教育委員会) 現地指導。
- 第21週 (11/16～11/20) 堅田古墳の現況地形測量実施。
- 第22週 (11/23～11/27) ラジコンヘリによる発掘区全体の景観撮影実施。
- 第23週以降 Dw地点の調査終了 (11/30)。発掘区埋戻し作業終了 (12/26)。

出土遺物の洗浄や注記等の一次整理作業は平成26年度と平成27年度に、遺物実測や挿図作成等の整理等作業は平成30年度に、それぞれ当センターにおいて実施した。平成27年1月30日と平成28年2月29日と平成30年11月6日に渡邊博氏 (元各務原市教育委員会) に須恵器に関する指導を、平成27年2月17日と平成30年9月28日に藤澤良祐氏 (愛知学院大学) に灰軸陶器と中近世陶磁器に関する指導を受けた。また、平成31年1月15日に、林正憲氏 (奈良文化財研究所) に調査成果全体についての指導を受けた。なお、土坑 (SK165・SK269・SK271) から出土した炭化物の放射性炭素年代測定を平成28年度に、出土金属製品の成分分析及び保存処理を平成30年度に実施した。

3 調査体制

発掘調査及び整理等作業の体制は、以下のとおりである。

センター所長	宮田敏光 (平成26・27年度)、野村幹也 (平成30年度)
総務課長	二宮 隆 (平成26・27年度)、加藤武裕 (平成30年度)
調査課長	成瀬正勝 (平成26・27年度)、春日井恒 (平成30年度)
調査担当係長	吉田 靖 (平成26・27年度)、山本厚美 (平成30年度)
担当調査職員	柏木賢一 (平成26・27年度)、佐竹正憲 (平成30年度)

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

堅田遺跡と美濃国分寺東遺跡が所在する不破郡垂井町は、濃尾平野の北西部に位置する。町の北部・北西部には池田山塊が東西に連なり、南西部には南宮山塊が北西から南東に横たわる。こうした山に囲まれた地形的特徴から、古来より東西の交通路が集中する交通の要衝であり、東西方向にJR東海道本線、新幹線、国道21号線が貫いている。町の中央部から東部及び南東部は、相川とその支流である大谷川などの河川によって形成された堆積平野で、濃尾平野へと続き、西部は相川に沿って狭隘な平地となり、関ヶ原方面へと続く。町域には崖下泉、崖端泉、池が多く存在し、平地部の多くは水を得にくい扇状地のため、古くからそれらの水は生活用水として利用されてきた。また、岐阜県西濃地方から三重県北勢地方にかけて見られる「マンボ」と呼ばれる灌漑用の地下水路や、山麓や平地の浅い谷には溜池が造られてきた。扇状地の端部では伏流水が自然湧出し、「ガマ」と呼ばれる扇端泉が多く見られる。



図4 発掘区周辺地形図（平成29年国土地理院発行2万5千分の1地形図「大垣」を使用） 網掛け範囲：発掘区

当遺跡は、池田山塊から南側に突き出した親ヶ谷の尾根の南端にある、段丘化した扇状地上に立地する。堅田遺跡の大部分は水田として利用され、美濃国分尼寺東遺跡の大部分は平尾集落と重なっているが、二遺跡とも今回の発掘区とその周辺は、主に水田として利用されている。また、集落の南側には西南西-東北東に県道栗原青野線が通るが、これは江戸時代の中山道であり、古くは古代官道東山道と推定される。遺跡周辺の地形は北及び西から南東に向かって緩やかに傾斜しており、地表面の標高はそれぞれ、美濃国分尼寺東遺跡西端部では29.6m、堅田遺跡東端部では24.5mとなっている。

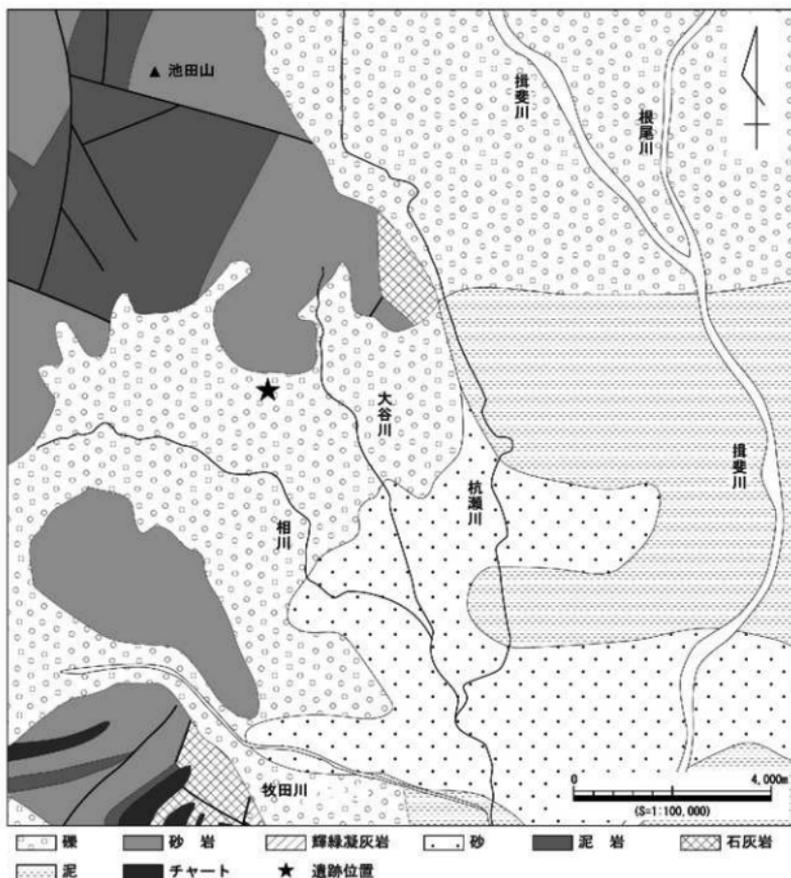


図5 遺跡周辺の地質概略図(地質調査所1999『地質図1/50,000 岐阜』を基に作成)

第2節 歴史的環境

当遺跡周辺には数多くの遺跡が分布しており、本節では各時期の主要な遺跡について、概要を時代順に記す¹⁾。なお、本文中の遺跡名に続く括弧内の番号は、表2、図6と一致する。

旧石器時代 当遺跡周辺では確認されていない。

縄文時代 垂井町域では、大滝野瀬遺跡、南森下遺跡(77)、朝倉遺跡(49)、北野遺跡(50)、日守遺跡、小黒見遺跡(80)で遺物が採集されているが、詳細は不明である。大垣市域では中期以降の遺物が断片的に確認されている。

弥生時代 垂井町域では、日守遺跡、朝倉遺跡、境野遺跡で遺物が採集されているが、詳細は不明である。大垣市域では、東町田遺跡は平成3年度以降、大垣市教育委員会(以下「市教委」という。)によって延べ約10,000㎡の調査が実施され、中期後半の方形周溝墓群や後期から古墳時代初頭の墓塚が確認されている。また、国分寺遺跡(101)からは前期の遠賀川系土器が出土し、十六遺跡からは菱環紐式銅鐸と、中期から後期の土器が出土したとされる。

古墳時代 当遺跡周辺には多くの古墳が所在し、濃尾平野の中でも早い段階から古墳の築造が始まった地域として知られるが、それに伴う集落については詳細が明らかになっていない。垂井町域では、4世紀後半に造営された親ヶ谷古墳(6)は全長85mの前方後円墳で、鍔形石や車輪石が出土している。親ヶ谷古墳が立地する池田山塊の平尾山には、5世紀初頭の前方後円墳である清塚4号古墳(10)や、5世紀前半の円墳である清塚1号古墳(13)等、古墳時代前期から中期にかけての主要な古墳が分布している。後期には、相川北岸に方墳である南大塚古墳、相川南岸には円墳である兜塚古墳(56)が立地するが、目立った群集墳は築かれていない。大垣市域では、市の北西部に大型の前期前方後円墳が集中して築造されている。昼飯大塚古墳は岐阜県下最大(墳丘長150m)の前方後円墳で、4世紀後半に築造されたものである。粉糠山古墳は、東海地方最大規模(墳丘長100m)の前方後方墳である。遊塚古墳は前方後円墳(墳丘長80m)で、前方部頂の副葬品埋納施設から、多くの滑石製模造品や鉄製農耕具・武器類が出土している。矢道長塚古墳(114)は前方後円墳(墳丘長87m)で、2つの主体部からは、三角縁神獸鏡5面、内行花文鏡1面、石剣76点、石製合子、杵形石製品、勾玉、管玉、ガラス玉、鉄刀、銅鏃、鉄斧が出土している。矢道長塚古墳の北西50mには前方後円墳(墳丘長約60m)である矢道高塚古墳(113)がある。前期古墳の他、横穴式石室をもつ後期古墳も金生山麓を中心に築造され、そのほとんどは6世紀末から7世紀前半にかけてのものと考えられる。

飛鳥時代 律令国家成立期に起こった壬申の乱では、垂井町周辺は乱の主たる舞台として登場する。これを契機として美濃地域には諸豪族により寺院が造営される。白鳳期創建寺院としては、宮代廃寺跡(76)、宮処寺跡(46)、美濃国分寺前身寺院が確認されている。宮代廃寺は、垂井町教育委員会(以下「町教委」という。)によって、昭和42年度と昭和47年度に調査が行われ、瓦積基壇と築地跡が確認されている。推定時域は約150m四方である。宮処寺跡は平成14年度に町教委が調査を実施し、推定寺域北辺から多くの瓦が出土している。

古代 西から不破の関(関ヶ原町)、美濃国府(垂井町)、美濃国分尼寺(垂井町)、美濃国分寺(大垣市)と連なるこの地域は、古代美濃の政治・文化の中心地であった。また垂井町には、美濃国一宮である南宮大社と二宮である伊富岐神社、不破郡の大領であった宮勝木実を祀る大領神社が所在する。垂井町宮代地

内には不破郡家が所在するとされるが、詳細は不明である。美濃国府跡(28)は、平成3年度から平成15年度にかけて町教委による発掘調査が行われ、政庁跡と東方官衙地区、朱雀路が確認されている。また、硯や墨書土器、緑釉陶器、巡方等が出土している。美濃国分寺跡(102)は昭和43年度から昭和45年度にかけて、町教委による発掘調査が行われ、塔跡、金堂跡、鐘樓跡、南大門跡等が確認され、大官大寺式の伽藍配置であることが明らかになった。美濃国分寺跡の周囲に広がる国分寺遺跡では、平成8年度から平成14年度にかけて町教委による調査が行われ、国分寺跡の南側隣接地で撞竿支柱や参道、井戸、掘立柱建物等、国分寺に関連する遺構が確認された。美濃国分尼寺跡(19)は、古くから古代瓦が散布することや地形・地名などから、垂井町平尾に所在すると推定されていたが、詳細は不明であった。平成16年度から平成20年度にかけて、町教委による範囲確認を目的とした発掘調査が行われ、周辺に残る土塁から、寺域が東西約150m、南北150m以上の長方形になる可能性が指摘されている。

当遺跡周辺には古窯跡が多く所在する。垂井町域では、国府の瓦を焼いたとする説がある大石古窯跡や、古代の瓦窯である市之尾古窯跡(14)、美濃国分尼寺跡表採瓦と同様の瓦が出土したとされる平尾古窯跡(16)等がある。平尾古窯跡では、平成24年度から平成28年度にかけて町教委が行った遺跡詳細分布調査で、窯体の一部と考えられる遺構が確認されている。大垣市域では、美濃国分寺跡の北東に位置する美濃国分寺附瓦窯跡(103)等がある。

日守遺跡、朝倉グランド遺跡(42)、真禅院遺跡、宮代遺跡(54)等が古代の散布地として知られるが、当遺跡周辺の古代の集落跡は不明な部分が多い。平成24年度から平成28年度にかけて町教委が実施した遺跡詳細分布調査では、野田遺跡(39)で美濃刻印須恵器や円面硯が採集されている。

中世 石越遺跡(9)では、明治時代に宋銭・明銭を含む備蓄銭が入った壺が出土している。現在の垂井町平尾集落は、室町時代まではこの付近に所在していたという伝承がある。南宮山中に所在する薬師堂遺跡(63)や観音堂跡(65)、南宮山頂経塚群(67)では、山茶碗や古瀬戸が出土している。

近世、池田輝政陣跡(43)、安国寺恵瓊陣跡(69)は、関ヶ原合戦の際に設けられた陣跡である。中山道沿いに築かれた垂井一里塚は国史跡に指定されている。青野城跡(111)は、青野藩主稲葉氏の居城である。

注

1) 各遺跡の記述は、以下の文献を参考とした。

垂井町1996『新修垂井町史 通史編』

垂井町教育委員会2017『垂井町遺跡詳細分布調査報告書(1)』

垂井町教育委員会2005『美濃国府跡調査報告書Ⅲ』

垂井町教育委員会2010『美濃国分尼寺発掘調査報告書』

大垣市2011『大垣市史 考古編』

大垣市教育委員会2004『東町田遺跡』(大垣市埋蔵文化財発掘調査報告書 第14集)

大垣市教育委員会2005『美濃国分寺跡—国分寺遺跡(伽藍南面隣接地の調査)—』(大垣市埋蔵文化財発掘調査報告書 第15集)

岐阜県教育委員会2002『岐阜県中世城館跡総合調査報告書 第1集(西濃地区・本巣郡)』

なお、表2の遺跡名、種別、時代と、図9の遺跡位置、範囲は、岐阜県教育委員会2007『改訂版 岐阜県遺跡地区』を参考とした。

また、その後の改訂については、岐阜県生活環境部県民文化局文化伝承課に確認した。

表2 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	種別	No.	遺跡名	時代	種別
1	聖田遺跡	縄文・古墳・古代・中世・近世	集落跡	59	最勝寺観音堂跡	古墳	社寺跡
2	美濃国分尼寺東遺跡	古代・古墳・中世・近世	散布地	60	政所遺跡	古墳・古代・中世	散布地
3	大滝東山1号古墳	古墳	古墳	61	中瀬遺跡	古代・中世	散布地
4	大滝東山2号古墳	古墳	古墳	62	西辻遺跡	古墳・古代	散布地
5	岡田堂古墳	古墳	古墳	63	薬師堂遺跡	中世	散布地
6	親ヶ谷古墳	古墳	古墳	64	薬師堂跡	古代・中世・近世	社寺跡
7	石仏谷遺跡	古代・中世	散布地	65	観音堂跡	近世	社寺跡
8	清塚5号古墳	古墳	古墳	66	千手堂跡	近世	社寺跡
9	石越遺跡	古代・中世・近世	散布地	67	南宮山頂経塚群	中世	その他の遺跡 (経塚)
10	清塚4号古墳	古墳	古墳	68	南宮神社神宮跡	中世・近世	社寺跡
11	清塚3号古墳	古墳	古墳	69	安国寺恵瓊碑跡	中世	その他の遺跡
12	清塚2号古墳	古墳	古墳	70	大外道遺跡	古代・中世	散布地
13	清塚1号古墳	古墳	古墳	71	天阜遺跡	古代・中世	散布地
14	市之尾古窯跡	古代	生産遺跡	72	大領神社北古墳	古墳	古墳
15	不動北古墳	古墳	古墳	73	大領神社古墳	古墳	古墳
16	平尾古窯跡	古代	生産遺跡	74	森上古墳	古墳	古墳
17	出日地山古墳	古墳	古墳	75	杉ノ木古墳群	古墳	古墳
18	美濃国分尼寺西遺跡	古代・中世	散布地	76	宮代廃寺跡	古墳・古代	社寺跡
19	美濃国分尼寺跡	古代	社寺跡	77	南森下遺跡	縄文・古墳・古代・中世	散布地
20	聖田古墳	古墳	古墳	78	茶白山古墳群	古墳	古墳
21	新井中根古墳	古墳	古墳	79	平古墳群	古墳	古墳
22	赤辺古墳	古墳	古墳	80	小黒見遺跡	縄文・古代	散布地
23	真金古墳	古墳	古墳	81	谷の舞古墳	古墳	古墳
24	忍勝寺山古墳	古代	古墳	82	鎌戸古墳	古墳	古墳
25	若宮古墳	古墳	古墳	83	一色八幡古墳	古墳	古墳
26	府中城跡	中世	城館跡	84	勝宮古墳	古墳	古墳
27	民安寺跡	古代	社寺跡	85	鬼塚古墳	古墳	古墳
28	美濃国府跡	古代	官衙跡	86	葉平川船着場跡	中世・近世	その他の遺跡
29	興山古墳	古墳	古墳	87	滝ヶ谷古墳	古墳	古墳
30	法華塚	近世	その他の墓	88	こいち谷古墳	古墳	古墳
31	高札場跡	中世・近世	その他の遺跡	89	石越古墳	古墳	古墳
32	長屋氏屋敷跡	中世	城館跡	90	元円興寺谷古墳	古墳	古墳
33	六倉市跡	近世	その他の遺跡	91	元円興寺跡	古代・中世・近世	社寺跡
34	本陣跡	中世・近世	その他の遺跡	92	地藏古墳	古墳	古墳
35	熊井の泉	古代	その他の遺跡	93	西山古墳	古墳	古墳
36	郷学酒水庵跡	近世	その他の遺跡	94	陵山古墳群	古墳	古墳
37	紙屋塚	古代	その他の遺跡	95	東中道1号古墳	古墳	古墳
38	金葉寺跡	中世	社寺跡	96	西中道遺跡	古代・中世	散布地
39	野田遺跡	古代・中世	散布地	97	東中道古墳	古墳	古墳
40	西野古墳	古墳	古墳	98	圓願寺跡推定地	中世	社寺跡
41	西野遺跡	中世	古墳	99	山田古墳	古墳	古墳
42	朝倉グラウンド遺跡	古代	散布地	100	青墓坪町遺跡	古代・中世	散布地
43	池田陣政陣跡	中世	その他の遺跡	101	国分寺遺跡	古代・中世	散布地
44	春王・安王の墓	中世	その他の墓	102	美濃国分寺跡	古代	社寺跡
45	御所野遺跡	古代・中世	散布地	103	美濃国分寺附瓦窯跡	古代	古窯跡
46	宮処寺跡	古代	社寺跡	104	美濃国分寺附1号瓦窯跡	古代	古窯跡
47	神明屋遺跡	古代	散布地	105	美濃国分寺附2号瓦窯跡	古代	古窯跡
48	朝倉古墳群	古墳	古墳	106	美濃国分寺附3号瓦窯跡	古代	古窯跡
49	朝倉遺跡	縄文・弥生	散布地	107	国分寺東遺跡	古代・中世	散布地
50	北野遺跡	縄文	散布地	108	青墓大堀遺跡	古代・中世	散布地
51	彌松寺古墳	古墳	古墳	109	青野東面遺跡	古代・中世	散布地
52	鉦塚古墳	古墳	古墳	110	青野遺跡	弥生	散布地
53	吉川広家陣跡	中世	その他の遺跡	111	青野城跡	近世	城館跡
54	宮代遺跡	古代	散布地	112	矢道A遺跡	古代・中世	散布地
55	中屋敷古墳群	古墳	古墳	113	矢道高塚古墳	古墳	古墳
56	兜塚古墳	古墳	古墳	114	矢道長塚古墳	古墳	古墳
57	中屋敷5号古墳	古墳	古墳	115	十六西遺跡	弥生	散布地
58	中屋敷6号古墳	古墳	古墳	116	山道遺跡	中世	その他の遺跡

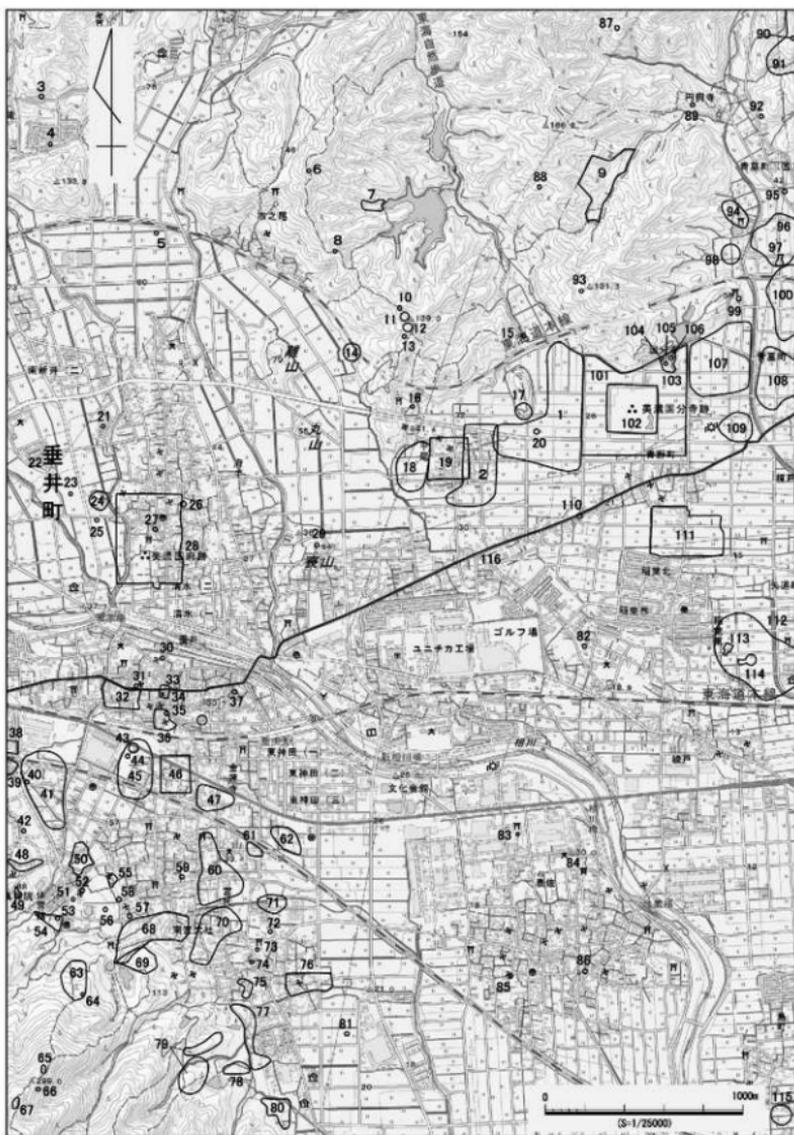


図6 周辺遺跡位置図（平成28年国土地理院発行2万5千分の1地形図「大垣」を使用）

第3章 調査の成果

第1節 基本層序

基本層序は、平成25年度に県教委が実施した試掘・確認調査で確認された層序を基に、以下のとおりⅠ層からⅣ層に分層した(図7)。美濃国分尼寺東遺跡と堅田遺跡は隣接する遺跡で、共通の基本層序をもつ。発掘区は県道垂井赤坂線に沿って整備された歩道と重なる。発掘区の大半は、近代以降の水田化や県道建設の影響を受けており、広い範囲で遺物包含層や基盤層が削平されている。

Ⅰ層 表土 2.5Y3/1黒褐色土～10YR5/4にぶい黄褐色土

県道垂井赤坂線の建設に伴う盛土や、水田に伴う水路の覆土などをまとめてⅠ層とした。発掘区全域で確認した。層厚は約0.30～1.35mである。

Ⅱ層 水田耕作土

Ⅱa層 2.5Y4/1黄灰色粘質土～10YR3/2黒褐色粘質土

昭和48年度から昭和54年度にかけて行われた圃場整備後の水田耕作土である。堅田遺跡のA地点東端部とD・E地点西半、E地点全域で確認した。層厚は約0.1～0.2mである。

Ⅱb層 10YR3/1黒褐色粘質土～10YR5/1褐灰色粘質土

圃場整備前の水田耕作土である。国分尼寺東遺跡の西端部を除く区域と、堅田遺跡のA地点東部、D・w地点東端部、D・e・E地点全域で確認した。層厚は約0.20～0.55mである。古代から現代にかけての遺物を含む。

Ⅲ層 遺物包含層 2.5Y4/3オリーブ褐色土～10YR2/2黒褐色土

国分尼寺東遺跡西端部と、堅田遺跡のA地点東端部、B・C地点全域で確認した。層厚は約0.05～0.2mである。古代から近世にかけての遺物を含む。

Ⅳ層 基盤層 2.5Y5/4黄褐色土～10YR7/6明黄褐色土

国分尼寺東遺跡と堅田遺跡の発掘区全域で確認し、本層上面で縄文時代から近世にかけての遺構を検出した。無遺物層である。A・D地点では径2～5cmの円礫を多量に含む箇所がある。なお、本層から下位の堆積物については確認していない。

遺構はⅣ層の上面で検出したが、遺物包含層(Ⅲ層)が存在しない箇所では、検出面の呼称として「Ⅰ層基底面」又は「Ⅱb層基底面」を用いた。

第2節 遺構の概要

1 概要

今回の調査では、古代から中世前期を中心とした多数の遺構を検出した。検出した遺構数は表3のとおりであり、所属時期は縄文時代、古代、中世前期、近世以降の4時期である。遺構の時期決定は、出土遺物や遺構の重複関係、埋土の類似性などから判断した。

本報告書では、これらの遺構のうち、竪穴建物や掘立柱建物、柵、井戸、土器製作遺構は遺跡の性格を反映すると考えられるものであることから、すべての遺構を報告した。溝状遺構や土坑などは検出数が多いため、区画施設のように遺跡の性格を検討する上で重要な遺構や、一括性の高い遺物が出土した遺構、出土例の少ない遺物が出土した遺構などを抽出して報告した。なお、各遺構の説明文の「遺物出土状況」に記載した出土点数は、接合前の破片数を示す。

表3 検出遺構一覧表

遺跡名	地点	SI	SI 付属	SB	SB 付属	SA	SA 付属	SP	SD	SK	合計
美濃国分尼寺東遺跡								1	8	36	45
聖田遺跡	A	2	11			3	13	28	18	173	235
	B								4	69	73
	C							3	2	24	29
	Dw			3	16	3	18	78	4	518	640
	De					2	10	78	4	178	272
	E							15	10	174	199
計	2	11	3	16	8	41	202	42	1136	1448	
合計		2	11	3	16	8	41	203	50	1172	1493

2 遺構略号

遺構の略号は以下のとおりである。

SI—竪穴建物、SB—掘立柱建物、SA—柵、SP—柱穴、SD—溝状遺構、SK—土坑、
P—竪穴建物柱穴・掘立柱建物柱穴・柵柱穴

なお、建物と柵に付属する柱穴は、「SB1-P3」のように付属する建物や柵の番号を先頭に記し、遺構の種類（P・壁際溝）と種別ごとに通し番号を付与した。

3 遺構の分類

今回の調査で確認した遺構はそれぞれ、形状と規模、構造から、竪穴建物、掘立柱建物、柵、柱穴、溝状遺構、土坑に分類した。各遺構の分類基準は以下のとおりである。

竪穴建物 地表を掘り下げて床面をつくり、その内部に柱穴・炉・カマドなど建物の付属施設やその跡を確認できる遺構を竪穴建物とした。

掘立柱建物 向かい合う辺が2組以上確認できるように、規則的に並んだ複数の柱穴によって構成され、上屋構造を有すると推定できる遺構を掘立柱建物とした。

柵 直線的に並んだ複数の柱穴・杭跡によって構成された遺構を柵とした。

柱穴 柱根や柱痕跡、柱当たりが残存しているものや、底部に礎盤石若しくは根石が確認できる遺構のうち、規則的な配列が確認できず、建物や柵として認定できなかったものを柱穴とした。

溝状遺構 人為的に掘られた、細長い平面形（短軸と長軸比=1：3以上）の遺構を溝状遺構とした。ただし、短軸と長軸比が1：3未満のものでも連続していると見なせる遺構については含めることとする。

土坑 上記以外の人為的に掘り込まれた遺構を土坑とした。

4 遺構一覧表

各遺構の位置や規模などの基礎的情報は、それぞれ種別ごとに作成した遺構一覧表に示した。遺構種別により一覧表の項目は異なるが、共通する項目の内容は次のとおりである。

検出面 基本層序の層位名を使用し、遺物包含層（Ⅲ層）掘削後Ⅳ層上面で検出した遺構は「Ⅳ上」とした。しかし、表土（Ⅰ層）と水田耕作土（Ⅱb層）下にⅢ層が存在せず、基盤層上で遺構を検出した場合は、その上に堆積した土層の基底面の遺構とし、「Ⅰ基」もしくは「Ⅱb基」と表記した。

平面形 以下のとおり、形状をアルファベットで表記した。

A-円形、B-方形、C-不定形、D-不明

埋土 以下のとおり、堆積状況をアルファベットで表記し、分層した層位数を数字で表記した。

A-埋土が単一層、B-ほぼ水平な堆積、C-中央がU字状に窪むような堆積、

D-窪みが偏った堆積、E-ブロック状に土が入る堆積、F-最上層が掘り込んだ状態となるもの、

G-柱痕跡状の土層があるもの、H-その他

断面形 以下のとおり、形状をアルファベットで表記した。

A-半円形、B-方形、C-逆三角形、D-不明

規模 ()は残存長を示す。

重複関係 「新>旧」の関係を示す。

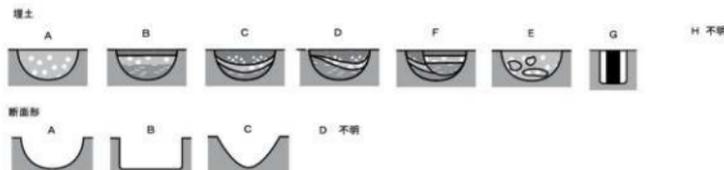


図8 遺構属性模式図

第3節 遺物の概要

1 概要

今回の調査では、縄文土器、土師器、須恵器、灰軸陶器、中近世陶磁器、中国産陶磁器などの土器類と、土製品、石器類、木製品、金属製品、炭化物等が出土した。それらの出土数は表4のとおりである⁹⁾。本報告書では、これらの遺物のうち、遺構の性格や時期などを検討する上で必要な遺物や、遺跡の性格を端的に示す遺物、分類別の代表的な遺物を中心に抽出して報告した。以下、各遺物の概要を記す。

(1) 土器類

各遺跡から出土した土器類の種別ごとの点数は表4のとおりである。

表4 出土遺物点数等一覧表

種別	美濃国分尼寺東遺跡			聖田遺跡		
	接合前破片数	接合後破片数	口縁部残存率	接合前破片数	接合後破片数	口縁部残存率
縄文	0	0	0	164	150	8.24
古墳・古代土師器	132	131	2.5	2351	2247	73.9
須恵器	20	20	2	1000	956	160
灰軸陶器	2	2	0	250	245	50.4
中世土師器	2	2	0.5	22	20	7
山茶碗類	0	0	0	691	672	191.2
古瀬戸・大甕	0	0	0	4	4	0
常滑産陶器	1	1	0.5	10	10	0
中国産陶磁器	0	0	0	26	26	6
近世陶磁器	45	22	8.2	108	106	32.6
近代陶磁器	33	32	22.1	34	34	8.4
合計	235	210	35.8	4660	4470	537.74
瓦	17	17	-	56	49	-
土製品	1	1	-	17	17	-
石器	0	0	-	17	17	-
木製品	0	0	-	2	2	-
金属製品	0	0	-	13	13	-
炭化物	0	0	-	65	65	-
合計	19	19	-	149	142	-

美濃国分尼寺東遺跡では、出土点数は土師器が最も多く、大半は甕の破片である。土師器以外では、近世陶磁器が最も多く、次いで近代陶磁器、須恵器が続く。須恵器は6世紀後半から8世紀にかけてのものが存在する。聖田遺跡では、出土点数は土師器が最も多く、大半を占める甕以外に、皿や坏、鍋などが少量出土している。土師器以外では、須恵器、中近世陶磁器、灰軸陶器、縄文土器が出土している。須恵器は6世紀後半から9世紀前半のものが存在し、長頸瓶のミニチュアや大甕、坏蓋の転用硯、水瓶、提瓶などがある。比較的出土数の多い坏類については、下記のとおり分類を行った。

- ・坏蓋A類…かえりをもたないもの。
- ・坏蓋B類…口縁部内面にかえりをもつもの。
- ・坏蓋C類…口縁部を折り返すもの。
- ・坏身A類…蓋受けを持つもの。

- ・坏身B類…受け部をもたず、無高台のもの。
- ・坏身C類…有高台のもの。

灰釉陶器は所属時期が美濃窯福年の光ヶ丘1号窯式期から西坂1号窯式期までが存在し、皿・碗以外に、深碗、輪花碗、段皿、瓶、甕がある。中近世陶磁器は山茶碗類が多く、大半は尾張型で第3型式から第7型式までのものが存在し、美濃須衛産、東濃産、渥美産は微量である。山茶碗類以外の中近世陶磁器は近世以降の陶磁器が大半で、古瀬戸や大窯は微量である。縄文土器は器種が分かるものは大半が晩期の深鉢である。縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、中近世陶磁器、中国産陶磁器の年代観や器種分類は既存の研究に従った²⁾。なお、須恵器は渡邊博人氏（元各務原市教育委員会）から、灰釉陶器と中近世陶磁器は藤澤良祐氏（愛知学院大学）から、それぞれ指導をいただいたが、本書における記載内容の責任は編集者にある。

(2) 石器類

美濃国分尼寺東遺跡では出土しなかった。堅田遺跡では、砥石が9点、敲石3点、凹石が1点、台石が1点、石鏝が1点、打斧が1点、RFが1点出土した。

(3) 木製品

美濃国分尼寺東遺跡では出土しなかった。堅田遺跡では、板状木製品が1点、棒状木製品が1点出土した。いずれも小片で加工痕はなく、性格は不明である。

(4) 金属製品

美濃国分尼寺東遺跡では出土しなかった。堅田遺跡では、釘が3点、鉄鏝が3点、刀子が1点、鏝又は刀子が2点、鉄滓が3点、鉛玉が1点出土した。このうち鉄滓1点について成分分析を行い、結果を第6章に記載した。

(5) その他の出土遺物

美濃国分尼寺東遺跡では出土しなかった。その他の遺物として、堅田遺跡では炭化物65点が出土した。このうち焼土を伴う3基の土坑（SK165・SK269・SK271）から出土した3点について、放射性炭素年代測定を行い、結果を第6章に記載した。

2 遺物観察表

本報告書に掲載した遺物の観察表は、それぞれ種別ごとに作成した。種別により一覧表の項目は異なるが、共通する項目の内容は次のとおりである。

出土位置 複数の地区（グリッド）や遺構から出土した遺物が接合した場合は、すべての出土位置を表記した。

出土層位 表土と遺物包含層から出土した場合は、基本層序名（Ⅰ・Ⅱ・Ⅱb・Ⅲ）を表記した。また、遺構出土の場合、土層分層前は埋土を深さ約5cmごとに区切り、上層から順に「a・b・c・…」の順に表記し、土層分層後はその土層番号（1・2・3・…）を表記した。なお、複数の土層から出土した遺物が接合した場合は、すべての層位を表記した。

法量 （ ）は復元長を示す。

胎土 色調は「新版標準土色帖」（小山・竹原2014）に基づき肉眼観察で判断した。

備考 器面調整については、磨滅等により不明な場合は「調整不明」と記載した。

注

- 1) 口縁部残存率の計測は以下の文献を参考とし、12分の1未満の破片は12分の1に切り上げ、12分の1以上の破片は小数点以下第1位まで計測した。また、底部残存率の計測は、4分の1未満の破片は4分の1に切り上げ、4分の1以上の破片は小数点以下第1位まで計測した。

宇野隆夫1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集、国立歴史民俗博物館

- 2) 出土遺物の年代観や器種分類は、以下の文献を参考とした。

赤塚次郎2002「総説 土器様式の偏差と古墳文化」『考古資料大観 第2巻 弥生・古墳時代 土器Ⅱ』、小学館

早野浩二2003「東海・中部地方の土器」『考古資料大観 第2巻 弥生・古墳時代 土器Ⅲ』、小学館

斎藤孝正1995「塗投、美濃、美濃須賀窯編年と他窯編年対比表」『須恵器集成図録 第3巻 東日本1』、雄山閣

愛知県史編さん委員会2007『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』、愛知県

日本貿易陶磁研究会1982『貿易陶磁研究 第2号』

第4章 美濃国分尼寺東遺跡

第1節 遺構と遺物

1 柱穴

SP1 (図9)

検出状況 AC9グリッド、II b層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭であったが、検出時に柱痕跡は確認できなかった。

規模・形状 長軸長0.28m、短軸長0.14m以上、深さ0.18mで、柱痕跡が残存する柱穴である。遺構の南側は発掘区外となるが、平面形は円形と考えられる。西側の壁面は緩やかに立ち上がるが、東側は垂直に近い。底面はやや丸味がある。土層断面で確認した柱痕跡は、柱穴の中心から東に寄る。

埋土 2層に分層したが、1層が柱痕跡で、2層が掘方埋土である。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 時期を判別できる遺物が出土しておらず、重複する遺構がないため、時期は不明である。

2 溝状遺構

SD1 (図9)

検出状況 AB3～AB4グリッド、IV層上面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 主軸方位はN-17°-Wで、遺構の東西端は発掘区外に広がる。幅0.56m、深さ0.24mである。両壁面はやや急な立ち上がりで、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差は確認できない。

埋土 単層である。IV層（基盤層）ブロックが混じる。流水を示す堆積は確認できなかった。小径の垂円礫を少量含むが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 時期を判別できる遺物が出土しておらず、重複する遺構はないが、明治20年作成の地籍図では、当遺構の位置と主軸方位に対応する地割が確認できることから、近世末から近代にかけての遺構の可能性はある。

SD2 (図9)

検出状況 AD12グリッド、II b層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK21より古い。

規模・形状 主軸方位はN-22°-Wで、遺構の南北端は発掘区外に広がる。幅0.62m、深さ0.07mである。断面形状は浅い皿状で、両端部の底面標高に大きな差は確認できない。

埋土 単層である。IV層（基盤層）ブロックが混じる。流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器16点、須恵器1点が出土した。いずれも小片で、散在して出土した。

遺物 土師器は全て甕の胴部の破片である。須恵器は甕の胴部片である。いずれも小片で分類不能で

ある。

時期 時期を判別できる遺物が出土しておらず、重複する遺構はないが、明治20年作成の地籍図では、当遺構の位置と主軸方位に対応する地割が確認できることから、近世末から近代にかけての遺構の可能性がある。

SD 3 (図10)

検出状況 AD14グリッド、II b層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 主軸方位はN-10°-Eで、遺構の南北端は発掘区外に広がる。幅0.43m、深さ0.12mである。断面形状は浅い皿状で、底部形状はほぼ平坦である。

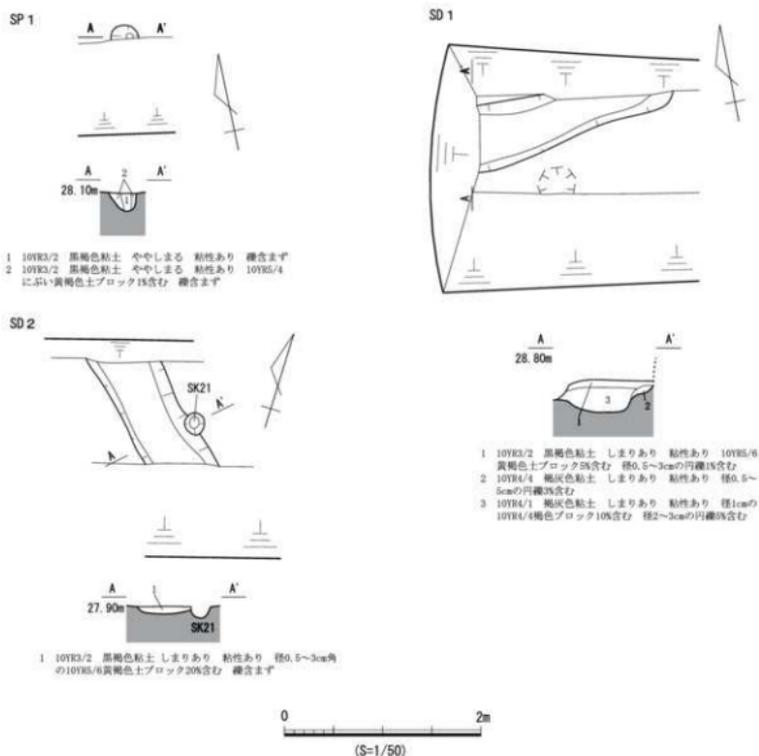


図9 SP 1、SD 1・2遺構図

埋土 単層である。流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 時期を判別できる遺物が出土しておらず、重複する遺構はないが、明治20年作成の地籍図では、当遺構の位置に対応する地割が確認できることから、近世末から近代にかけての遺構の可能性はある。

SD4 (図10)

検出状況 AD15グリッド、II b層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 主軸方位はN-14° - Eで、遺構の南端は発掘区外に広がる。幅0.55m、深さ0.27mである。断面形状は半円形で、底部形状はほぼ平坦である。

埋土 単層である。流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 時期を判別できる遺物が出土しておらず、重複する遺構はないが、明治20年作成の地籍図では、当遺構の位置に対応する地割が確認できることから、近世末から近代にかけての遺構の可能性はある。

SD5 (図10)

検出状況 AD17~AE17グリッド、II b層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK31・SK32より新しい。

規模・形状 主軸方位はN-9° - Eで、遺構の南北端は発掘区外に広がる。幅0.58m、深さ0.2mである。西側の壁面は緩やかに浅く掘り込まれ底面は平坦だが、東側は一段深く掘られ、東壁の立ち上がりは垂直に近い。

埋土 2層に分層した。埋土は礫を含まず、流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 時期を判別できる遺物が出土しておらず、重複する遺構はないが、明治20年作成の地籍図では、当遺構の位置と主軸方位に類似する地割が存在することから、近世末から近代にかけての遺構の可能性はある。

SD6 (図10)

検出状況 AE18~AE19グリッド、II b層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 主軸方位はN-85° - Eで、遺構の西端は発掘区外に広がる。幅0.4m、深さ0.04mで、底面は東に向けて緩やかに浅くなり、掘方は消滅する。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土 単層である。流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 時期を判別できる遺物が出土しておらず、重複する遺構はないが、明治20年作成の地籍図では、当遺構の位置と主軸方位に類似する地割が存在することから、近世末から近代にかけての遺構の可能性はある。

SD7 (図10)

検出状況 AE19グリッド、II b層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は

明瞭であった。

規模・形状 主軸方位はN-1°-Wで、遺構の南北端は発掘区外へ広がる。幅0.47m、深さ0.08mで、南北端で底面標高の差は見られない。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土 単層である。流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

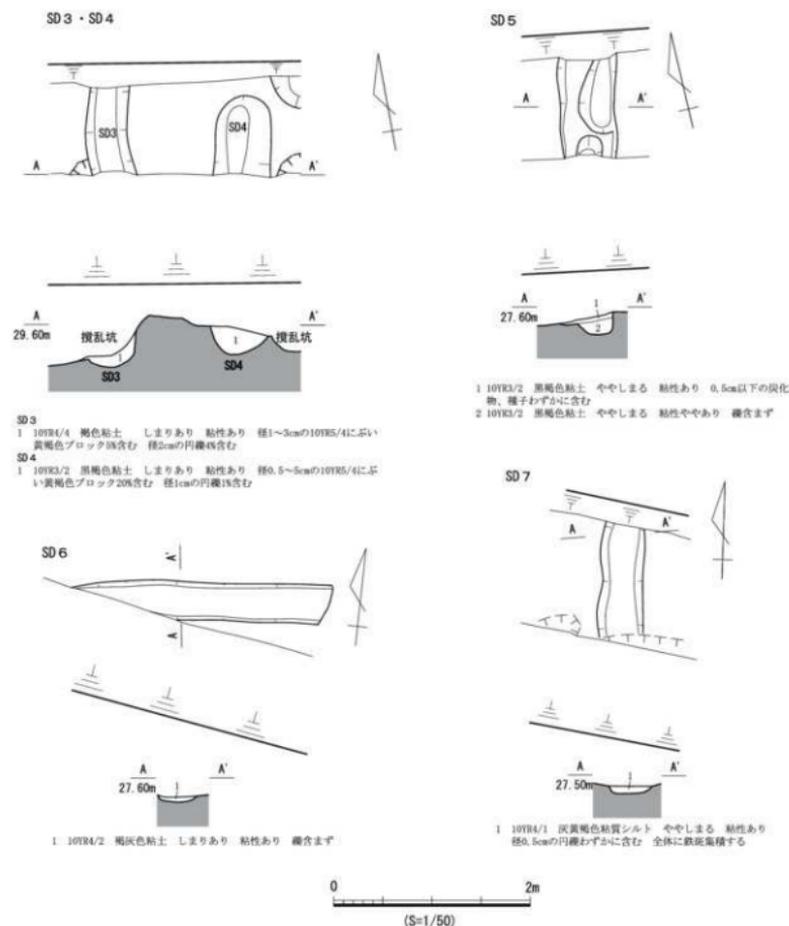


図10 SD3・4・5・6・7遺構図

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 時期を判別できる遺物が出土しておらず、重複する遺構はないが、明治20年作成の地籍図では、当遺構の位置と主軸方位に類似する地割が存在することから、近世末から近代にかけての遺構の可能性はある。

3 土坑

SK4 (図11)

検出状況 AC8グリッド、IV層上面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、埋土表面には円礫が露出し、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK5より新しく、SK38より古い。

規模・形状 長軸長2.62m以上、短軸長1.05m以上、深さ0.13mである。遺構の北部と南部は発掘区外に広がるため全形は不明だが、大型の方形土坑の可能性はある。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面は比較的平坦だが、西端部に畝状の起伏が存在する。

埋土 2層に分層した。埋土中に円礫と黒褐色土ブロックが混じり、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器1点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 1は甕の口縁部である。外面には口縁に沿って連続した指頭圧痕が見られ、内面には横方向のハケ調整後、横ナデが施される。内外面ともに被熱による変色が見られ、内面には煤が付着する。

時期 SK5との重複関係から、中世以降と考えられる。

SK5 (図11)

検出状況 AC8グリッド、SK4完掘後の底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、埋土表面には円礫が露出し、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK4より古い。

規模・形状 長軸長0.75m、短軸長0.62m、深さ0.19mである。平面形状はほぼ正円形で、断面形状は浅い皿状である。

埋土 単層である。埋土中に円礫と基盤層であるIV層ブロックが混じり、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器3点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 土師器は、皿(2)と甕の胴部の破片である。2は推定口径約15cmの大型の土師器皿である。底部内面に微小な指頭圧痕を確認できるが、摩滅が激しく調整の詳細は不明である。

時期 出土遺物から、中世以降と考えられる。

SK17 (図11)

検出状況 AC11・AD11グリッド、II b層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK15・SK16より古い。

規模・形状 遺構の北端は発掘区外に広がる。長軸長1.04m、短軸長0.92m以上、深さ0.21mである。平面形状は不整形で、断面形状は浅い皿状である。

埋土 2層に分層した。埋土中に基盤層であるIV層ブロックが混じり、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器1点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 土師器は甕の頸部の小片で、分類不能である。

時期 出土遺物から、古墳時代以降と考えられる。

SK19 (図11)

検出状況 AD11グリッド、II b層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は

明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK18より新しい。

規模・形状 遺構の北端は発掘区外に広がる。長軸長0.4m以上、短軸長0.36m、深さ0.23mである。平面形状は楕円形と考えられる。底面の東部はテラス状の平坦部が設けられ、西部は一段深く掘り込まれ、壁面はほぼ垂直である。

埋土 単層である。埋土中に基盤層であるIV層ブロックが混じり、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器7点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

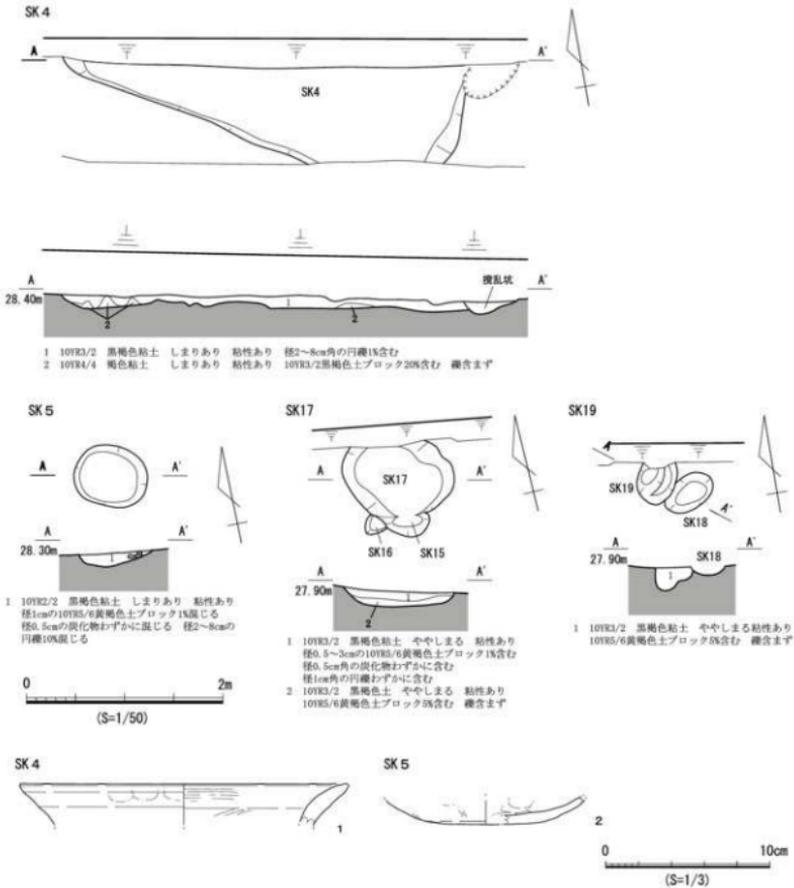


図11 SK 4・5・17・19遺構図、SK 4・5遺物実測図

遺物 土師器は全て甕の胴部の小片で、分類不能である。

時期 出土遺物から、古墳時代以降と考えられる。

SK22 (図12)

検出状況 AD12グリッド、II b層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 長軸長0.33m、短軸長0.25m以上、深さ0.10mである。遺構東部が攪乱坑と重複するが、平面形状はほぼ正円形と考えられる。断面形状は浅い皿状で、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器2点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 土師器は、甕の把手(3)と甕の胴部の小片である。3は被熱による変色や、煤等の付着物は確認できなかった。

時期 出土遺物から、古代以降と考えられる。

SK27 (図13)

検出状況 AD12グリッド、II b層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 長軸長0.25m、短軸長0.2m、深さ0.13mである。平面形状は不整形円で、西部から南部にかけての壁面の傾斜は緩やかだが、北東部が一段深く掘り込まれる。

埋土 単層である。埋土中に基盤層であるIV層ブロックが混じり、人為堆積と考えられる。

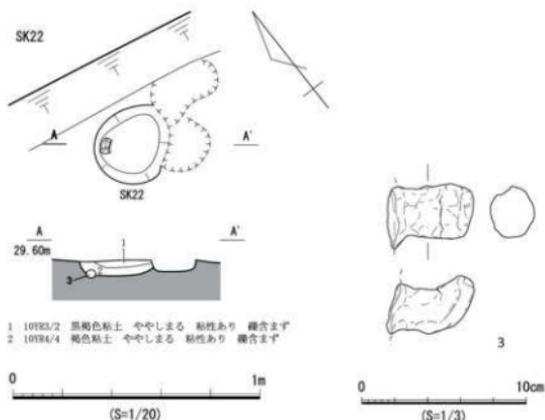


図12 SK22遺構図、遺物実測図

遺物出土状況 土師器1点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 14は甕の頸部である。摩滅が著しく調整は不明瞭で、外面上部に被熱による変色が見られる。

時期 出土遺物から、古墳時代以降と考えられる。

SK32 (図13)

検出状況 AE17グリッド、II b層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD5より古い。

規模・形状 長軸長0.56m以上、短軸長0.44m、深さ0.09mである。平面形状は楕円形、断面形状は浅い皿状で底面は平坦である。

埋土 単層である。埋土中に基盤層であるIV層ブロックが混じり、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 須恵器1点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 須恵器は甕の胴部の小片で、美濃須衛IV期第3小期からV期に比定した。

時期 出土遺物から、古代以降と考えられる。

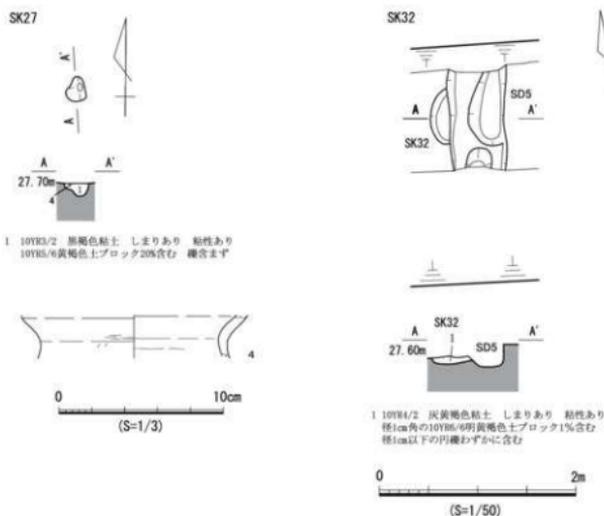


図13 SK27・32遺構図、SK27遺物実測図

第2節 攪乱坑・遺物包含層出土遺物

比較的残存状態が良い遺物を12点図示した(図14)。

5~12は須恵器である。5は産地不明の坏身で、無台で受け部を有する。胴部内面のロクロ目が顕著に残る。美濃須恵Ⅲ期後半併行に比定した。6は産地不明の坏身で、美濃須恵産のものとは比べて胎土が暗い。美濃須恵Ⅱ期からⅢ期前半併行に比定した。6世紀後半から7世紀前半にかけてのものと考えられる。7は美濃須恵産の坏蓋と考えられるが、摘みの接合痕がないため、坏身の底部の可能性もある。外面に二重沈線が施され、Ⅳ期第3小期に比定した。8は美濃須恵産で形状から盤と考えられるが、高台の接合痕は確認できない。底部外面には回転ヘラ削り痕が残り、Ⅲ期後半のものと考えられる。9は美濃須恵産の台付の盤である。口縁部を折り返さずに端部を直載するタイプで、Ⅳ期に比定した。10は美濃須恵産の壺又は瓶の底部である。高台はなく、外面底部には回転ヘラ削り痕が残る。Ⅲ期後半からⅣ期第2小期に比定した。11は産地不明の甕の胴部で、内面には同心円状の当て具痕、外面には斜め方向の叩き目が残る。時期は不明である。12は産地不明の甕の胴部で、外面には斜格子叩き目が確認できるが、内面はナデ消しが施される。

13~16は、近世陶器である。13は瀬戸美濃産の広東茶碗で、登窯第10小期のものである。山呉須による染付が施される。14は瀬戸産の箱形湯呑で、近世後期のものである。外面胴部に鉄軸による二重線が回る。15と16は瀬戸産の播鉢で、15は近世前期、16は近世後期のものと考えられる。

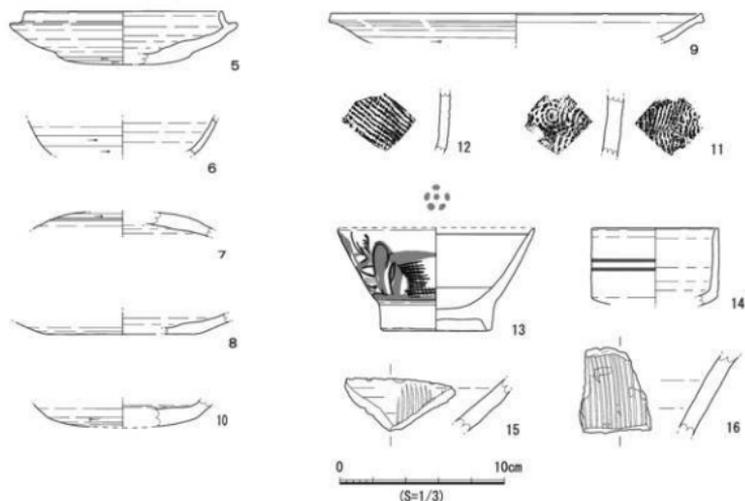


図14 攪乱坑・遺物包含層遺物実測図

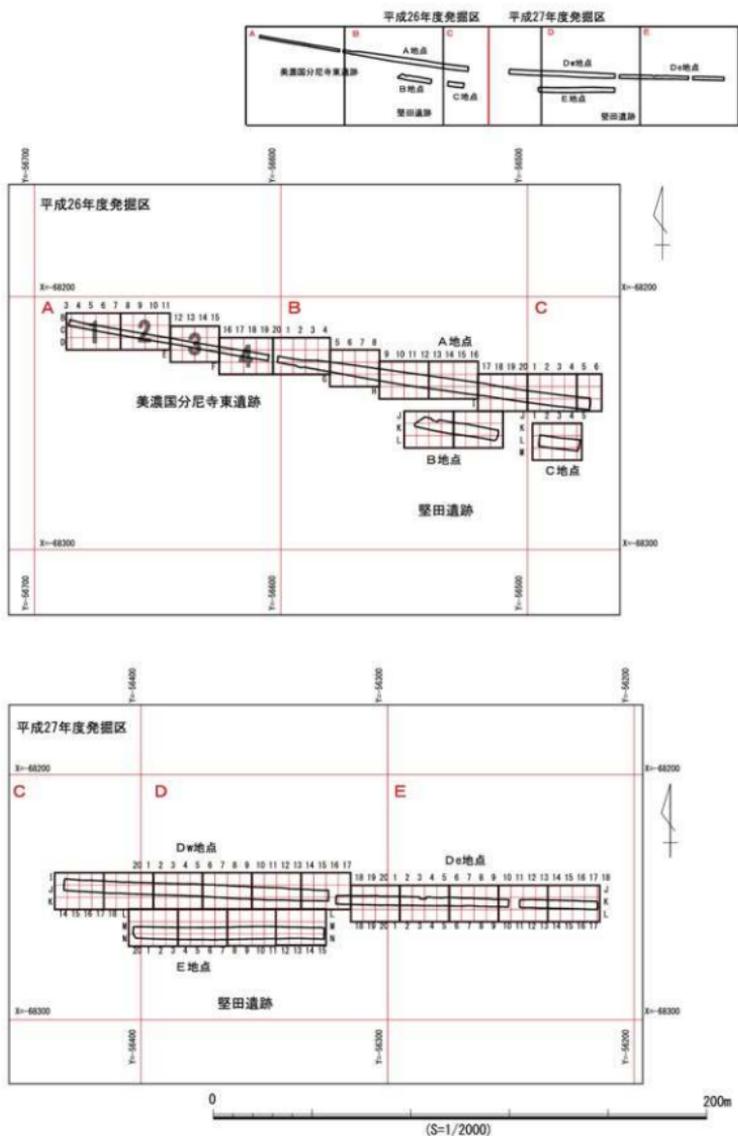


图 15 美濃国分尼寺東遺跡発掘区全域図 割付図

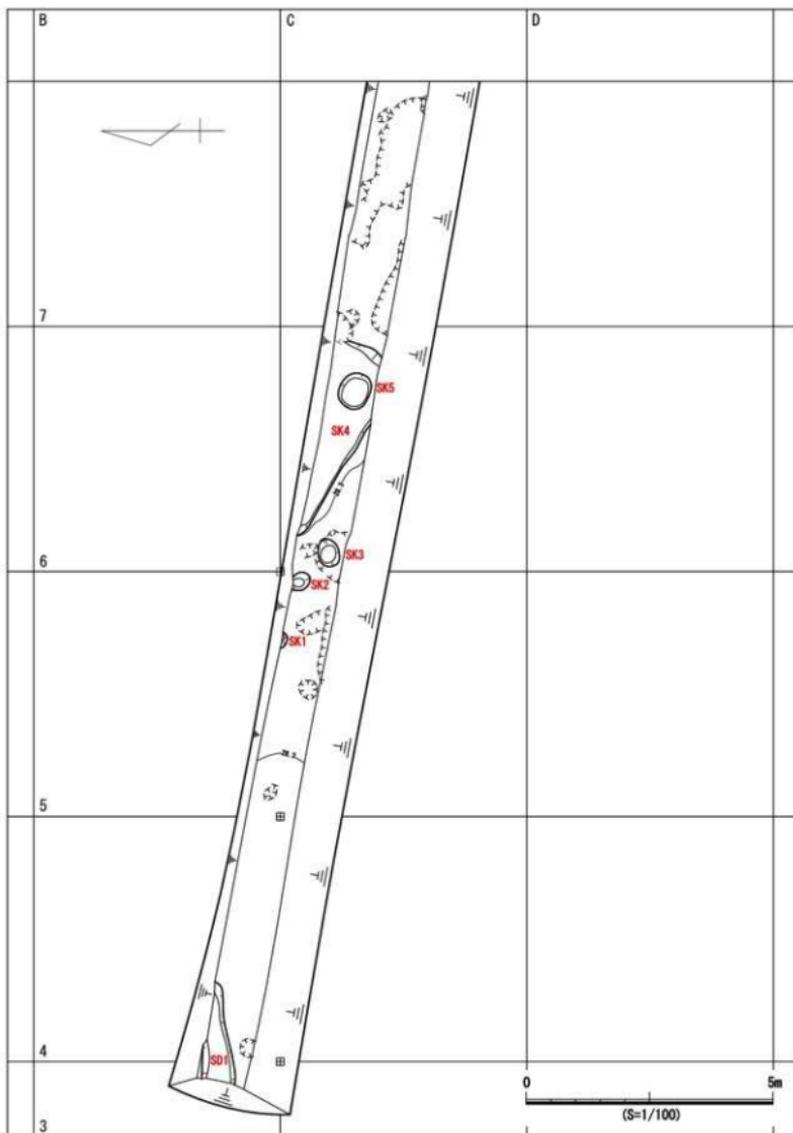


图 16 美濃国分尼寺東遺跡発掘区全域图 分割图 (1)

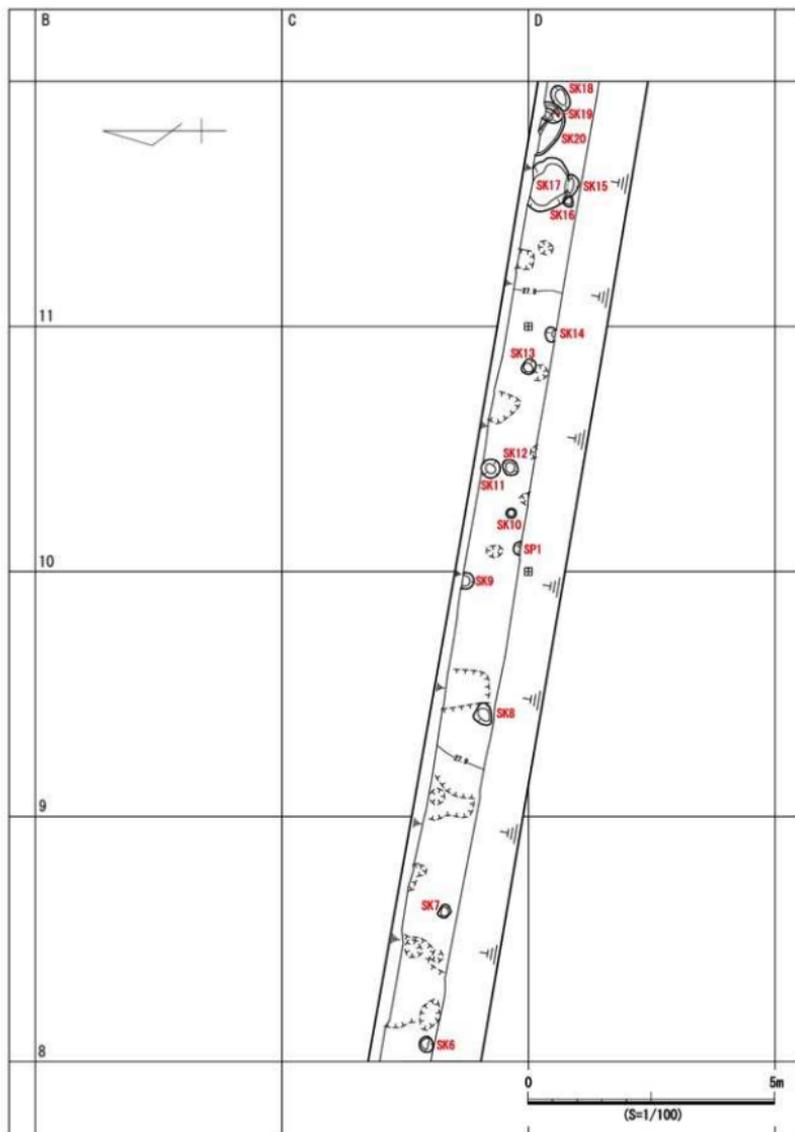


图 17 美国分尼寺东遗址发掘区全城图 剖视图 (2)

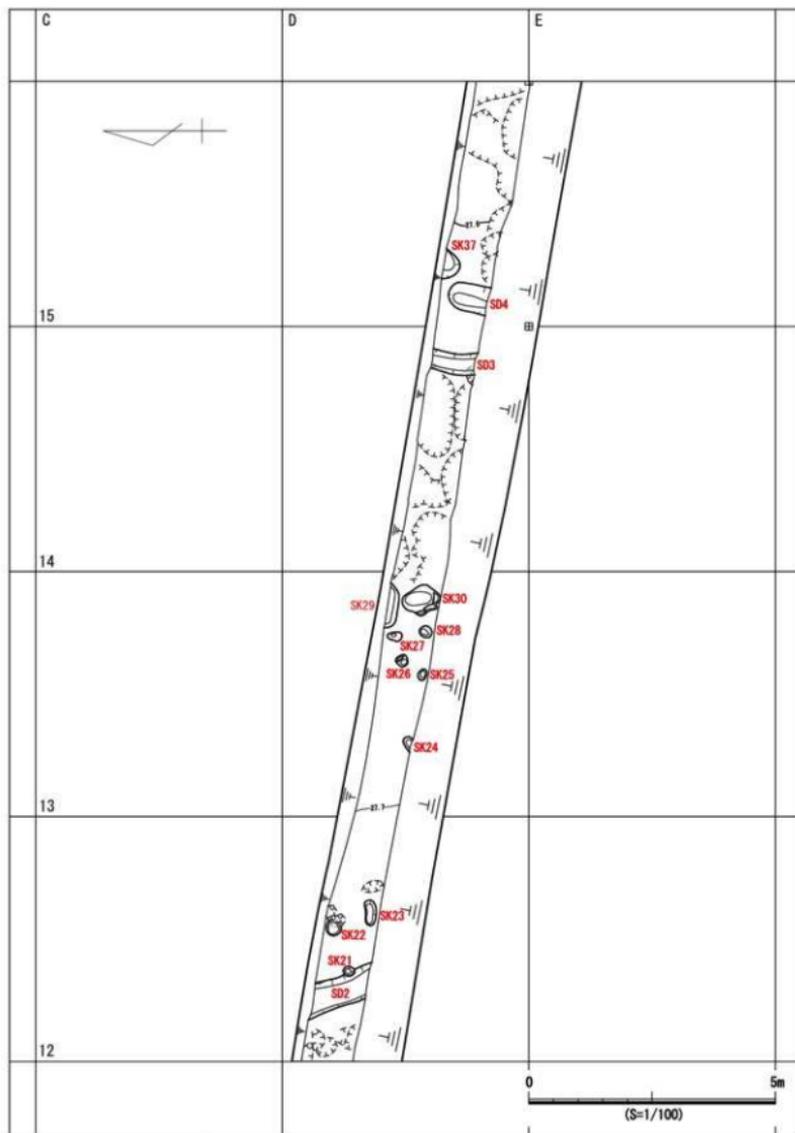


图 18 美濃国分尼寺東遺跡発掘区全域図 分割図 (3)

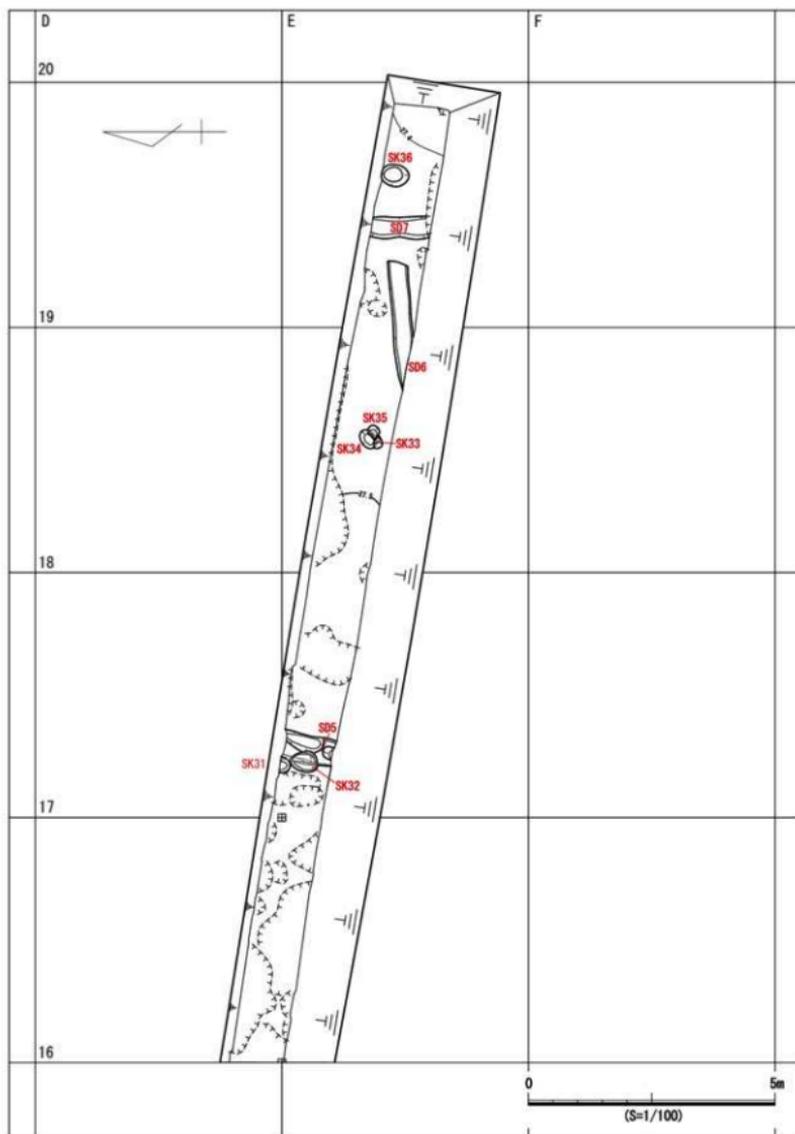


图 19 美濃国分尼寺東遺跡発掘区全域図 割付図 (4)

表5 柱穴一覽表

地点名	掲載番号	調査区画			検出面	平面形	断面形	堆積状況	規模 (m)				重複関係		排図番号	図版番号		
									上端		下端		深さ	旧			新	
									長軸	短軸	長軸	短軸						
-	SP1	A	C	10	Ⅱb層基底面	A	A	2	G	0.28	(0.14)	(0.14)	0.07	0.18			9	2

表6 溝状遺構一覽表

地点名	掲載番号	調査区画			検出面	平面形	断面形	分層	堆積状況	規模 (m)				重複関係		排図番号	図版番号	
										上端		下端		深さ	旧			新
										長軸	短軸	長軸	短軸					
-	SD1	A	B	3・4	Ⅳ層上面	B	B	1	A	(1.41)	0.56	(1.41)	0.46	0.24			9	2
-	SD2	A	D	12	Ⅱb層基底面	B	B	1	A	(1.17)	(1.17)	0.62	0.42	0.07	SK21		9	2
-	SD5	A	D	14	Ⅱb層基底面	B	B	1	A	(0.84)	0.43	(0.84)	0.22	0.12			10	2
-	SD4	A	D	15	Ⅱb層基底面	B	C	1	A	(0.80)	0.55	(0.69)	0.22	0.27			10	2
-	SD6	A	D・E	17	Ⅱb層基底面	B	B	2	B	(0.96)	(0.96)	0.58	0.20	0.20		SK31	10	2
-	SD6	A	E	18・19	Ⅱb層基底面	B	B	1	A	(2.12)	(2.12)	0.40	0.32	0.04			10	2
-	SD7	A	E	19	Ⅱb層基底面	B	B	1	A	(1.12)	(1.12)	0.47	0.30	0.08			10	2

表7 土坑一覽表

地点名	掲載番号	調査区画			検出面	平面形	断面形	分層	堆積状況	規模 (m)				重複関係		排図番号	図版番号	
										上端		下端		深さ	旧			新
										長軸	短軸	長軸	短軸					
-	SK1	A	C	5	Ⅳ層上面	A	A	3	G	0.32	(0.10)	0.10	(0.03)	0.17				
-	SK2	A	C	5・6	Ⅳ層上面	A	B	1	A	(0.36)	0.34	(0.24)	0.17	0.06				
-	SK3	A	C	6	Ⅳ層上面	A	B	1	A	0.58	0.42	0.34	0.30	0.18				
-	SK4	A	C	6	Ⅳ層上面	B	B	3	H	(2.62)	(1.03)	(2.62)	(1.00)	0.13		SK5	11	
-	SK5	A	C	6	Ⅳ層上面	A	A	1	A	0.75	0.62	0.59	0.49	0.13			11	
-	SK6	A	C	8	Ⅳ層上面	A	A	3	G	0.33	0.28	0.21	0.18	0.31				
-	SK7	A	C	8	Ⅳ層上面	A	B	3	C	0.28	0.27	0.18	0.16	0.28				
-	SK8	A	C	9	Ⅱb層基底面	A	A	1	A	0.46	0.37	0.27	0.22	0.07				
-	SK9	A	C	9	Ⅱb層基底面	A	A	2	B	0.33	0.24	0.21	0.15	0.38				
-	SK10	A	C	10	Ⅱb層基底面	A	B	1	A	0.21	0.20	0.14	0.14	0.07				
-	SK11	A	C	10	Ⅱb層基底面	A	A	1	A	0.39	0.39	0.21	0.18	0.20				
-	SK12	A	C	10	Ⅱb層基底面	A	B	1	A	0.35	0.31	0.20	0.20	0.14				
-	SK13	A	C・D	10	Ⅱb層基底面	A	B	1	A	0.32	0.26	0.20	0.17	0.28				
-	SK14	A	D	10	Ⅱb層基底面	A	B	2	D	0.36	(0.20)	0.14	(0.06)	0.28				
-	SK15	A	D	11	Ⅱb層基底面	A	A	1	A	0.48	0.27	0.31	0.11	0.16		SK16, SK17		
-	SK16	A	D	11	Ⅱb層基底面	A	B	1	A	0.26	0.20	0.19	0.16	0.06	SK15	SK17		
-	SK17	A	C・D	11	Ⅱb層基底面	A	B	2	B	1.04	0.92	0.85	0.58	0.15	SK15, SK16		11	
-	SK18	A	D	11	Ⅱb層基底面	A	A	2	F	0.54	0.34	0.32	0.20	0.08		SK19		
-	SK19	A	D	11	Ⅱb層基底面	A	A	1	A	0.40	(0.30)	(0.20)	0.13	0.23	SK18	SK20	11	
-	SK20	A	D	11	Ⅱb層基底面	C	B	1	A	1.02	0.43	0.85	0.30	0.07	SK19			
-	SK21	A	D	12	Ⅱb層基底面	A	A	1	A	0.24	0.20	0.12	0.09	0.11		SD2		
-	SK22	A	D	12	Ⅱb層基底面	A	B	2	B	0.33	0.29	0.25	0.22	0.10			12	2
-	SK23	A	D	12	Ⅱb層基底面	A	B	1	A	0.52	0.23	0.40	0.12	0.07				
-	SK24	A	D	13	Ⅱb層基底面	A	B	4	D	(0.20)	(0.21)	(0.15)	(0.14)	0.23				
-	SK25	A	D	14	Ⅱb層基底面	A	A	1	A	0.24	0.17	0.16	0.09	0.08				
-	SK26	A	D	13	Ⅱb層基底面	A	B	1	A	0.24	0.22	0.18	0.17	0.07				
-	SK27	A	D	13	Ⅱb層基底面	C	A	1	A	0.25	0.20	0.08	0.04	0.13			13	
-	SK28	A	D	13	Ⅱb層基底面	A	A	1	A	0.22	0.22	0.14	0.12	0.16				
-	SK29	A	D	13	Ⅱb層基底面	A	B	1	A	0.88	(0.21)	0.74	(0.11)	0.14				
-	SK30	A	D	13	Ⅱb層基底面	C	B	1	A	0.78	0.56	0.53	0.36	0.08				
-	SK31	A	D・E	17	Ⅱb層基底面	A	A	1	A	0.33	(0.22)	0.17	(0.15)	0.12	SD6			
-	SK32	A	E	17	Ⅱb層基底面	A	B	1	A	0.56	0.44	0.47	0.32	0.09	SD5		13	
-	SK33	A	E	18	Ⅱb層基底面	A	A	3	D	0.26	(0.26)	(0.26)	0.16	0.15				
-	SK34	A	E	18	Ⅱb層基底面	A	B	3	B	0.41	0.31	0.23	0.14	0.22		SK35, SK33		
-	SK35	A	E	18	Ⅱb層基底面	A	B	2	B	0.25	(0.16)	0.16	(0.11)	0.19	SK34	SK33		
-	SK36	A	E	19	Ⅱb層基底面	A	B	3	D	0.55	0.45	0.47	0.40	0.30				
-	SK37	A	D	15	Ⅱb層基底面	A	B	1	A	0.62	(0.22)	0.40	(0.20)	0.34				

表8 土器類観察表

掲載番号	遺物名 ブツ名	部位	種類	器種	産地	時代・形式 等	法量 (cm)			色調			備考	部 類	図 版
							口径	底径	器高	内面	外面	断面			
1	SK4	1	土師器	象(焼成形)	—	古墳時代後期	(19.6)	—	—	10YR6/4	7.5YR6/3	7.5YR5/1	内面はロコハケ後、ヨコナ デ、外面指押え痕	11	22
2	SK5	a	土師器	皿	—	中世	—	(5.5)	—	10YR7/4	10YR7/4	10YR7/4	赤ロコロ成形、内面に指押え 痕	11	22
3	SK22	a	土師器	瓶	—	7～8世紀	—	—	—	10YR6/4	10YR6/4	10YR6/4	把手部、手裡ねによる指押え 痕とナデ調整、2次の被焼痕 あり	12	22
4	SK27	1	土師器	甕	—	古墳～古代	(13.7)	—	—	10YR6/3	7.5YR6/3	10YR7/3	内外面ナデ調整、外面に2次 的被焼痕	13	22
5	AD12	II	灰志器	坏身A	畿内系 (産地不明)	前期後半	(11.9)	(7.9)	3.3	10YR6/1	10YR6/1	10YR6/1	内外面ロクロ痕、底部外面回 転へつ削り	14	22
6	覆瓦	—	灰志器	坏身A	畿内系 (産地不明)	前期～前期初 半	—	—	—	N4/0	N4/0	2.5Y2/2	内面ロクロ痕、外面下半回 転へつ削り	14	22
7	覆瓦	—	灰志器	甕	美濃国産	IV期第3小期	—	—	—	2.5Y6/1	2.5Y6/1	2.5Y7/2	天井部外面に回転へつ削りと 二重回縁、内面ロクロ痕	14	22
8	AD13	3	灰志器	甕	美濃国産	前期後半	—	(9.0)	—	10YR6/1	10YR6/1	2.5Y7/1	無底台、内面ロクロ痕顯著、 底部外面回転へつ削り	14	22
9	AD17	II	灰志器	甕	美濃国産	IV期	(22.5)	—	—	5Y7/1	5Y7/1	5Y7/1	胴部外面下半回転へつ削り、 内面底台にロクロ痕	14	22
10	—	a	灰志器	供又は瓶	美濃国産	前期後半～IV 期第2小期	—	—	—	2.5Y7/1	2.5Y7/1	2.5Y7/1	底部外面に回転へつ削り、 内面ロクロ痕	14	22
11	覆瓦	—	灰志器	甕	畿内系 (産地不明)	不明	—	—	—	N4/0	N4/0	5YR5/2	胴部外面斜方向印き目、内面 同心円文当て具痕	14	22
12	覆瓦	—	灰志器	甕	畿内系 (産地不明)	不明	—	—	—	N3/0	N3/0	2.5Y6/1	胴部外面斜線印き目、内面同 心円文当て具痕軽くナデ削し	14	22
13	覆瓦	1	海磁器	広東系陶	瀬戸美濃	豊原第10小期	11.8	6.3	(6.3)	7.5YR/1	7.5YR/1	2.5Y7/1	拓輪染付、ロクロ成形、削り 出し裏台、鉄台縁部のみ磨 除	14	22
14	AD14	2	海磁器	香州系陶	瀬戸	豊原第10小期	(7.6)	—	—	5Y7/1	5Y7/1	2.5YR/2	胴外に鉄の二重縁、内外面に 矢輪磨痕、ロクロ成形	14	22
15	覆瓦	1	海磁器	播磨	瀬戸	17世紀	—	—	—	5YR4/2	5YR4/2	10YR7/3	磨輪磨痕、内面に印目、ロク ロ成形、外面下半へつ削り	14	22
16	覆瓦	—	海磁器	播磨	瀬戸	～19世紀	—	—	—	5YR3/4	5YR3/4	2.5Y7/3	内外面磨輪磨痕、内面に印 目、ロクロ成形	14	22

第5章 堅田遺跡

第1節 縄文時代の遺構と遺物

1 土坑

SK290 (図20)

検出状況 CJ15グリッド、SK291完掘後の底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭である。他遺構との重複関係は、SP37・SK291より古い。

規模・形状 長軸長0.37m以上、短軸長0.25m、深さ0.27mである。平面形状は楕円形で、北側壁面の下部が段状に深く掘り込まれる。

埋土 3層に分層した。3層に基盤層であるIV層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 縄文土器1点(1)が、3層から出土した。

遺物 1は縄文時代晩期の深鉢で、幅1cmほどの突帯を貼り付け、その上を押圧する。

時期 出土遺物から、縄文時代晩期と考えられる。

SK291 (図20)

検出状況 CJ15グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭である。他遺構との重複関係は、SK290より新しく、SP37・SK292・SK293・SB1より古い。

規模・形状 長軸長0.91m、短軸長0.80m、深さ0.11mである。平面形状は不定形で、断面形状は浅い皿型である。

埋土 単層である。ブロック土を含むことから、人為堆積の可能性がある。

遺物出土状況 縄文土器4点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 縄文土器は、器種が分かるものに深鉢の胴部1点がある。

時期 出土遺物と重複するSK290の出土遺物から、縄文時代晩期以降と考えられる。

SK420 (図20)

検出状況 CJ19グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭で、埋土上面では土器が露出していた。

規模・形状 長軸長0.40m、短軸長0.39m、深さ0.08mである。平面形状は円形で、断面形状は浅い皿型である。

埋土 2層に分層した。遺物の出土状況から、人為堆積の可能性がある。

遺物出土状況 縄文土器38点が出土した。このうち、深鉢(2)の底部から胴部下半にかけての部分が、遺構底面から正位で出土した。

遺物 2は縄文時代晩期の深鉢で、胴部内外面に2次的被熱による煤や炭化物が付着する。3は縄文時代晩期末の深鉢で、浮線網状文を施す。

時期 出土遺物とその出土状況から、縄文時代晩期と考えられる。

SK425 (図21)

検出状況 CJ19・CJ20グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面

形は明瞭である。他遺構との重複関係は、SK426より新しい。

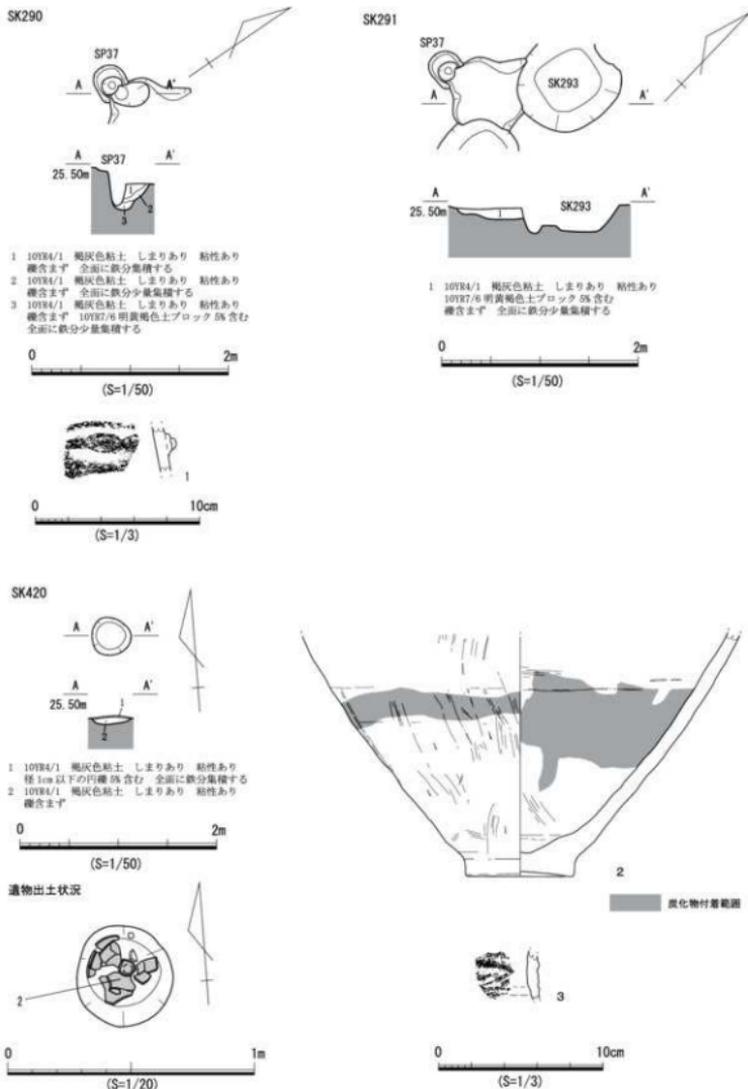


図20 SK290・291・420遺構図、SK290・420遺物実測図

規模・形状 長軸長0.46m、短軸長0.41m、深さ0.18mである。平面形状は不整形円で、断面形状は半円形である。

埋土 単層である。埋土中に基盤層であるIV層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 縄文土器1点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 縄文土器は胴部の小片である。

時期 出土遺物から、縄文時代と考えられる。

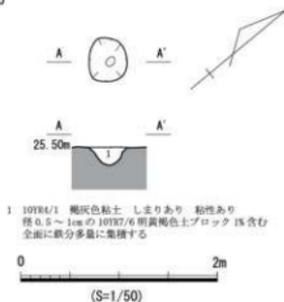
SK444 (図21)

検出状況 CJ20グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭である。SK445より古い。

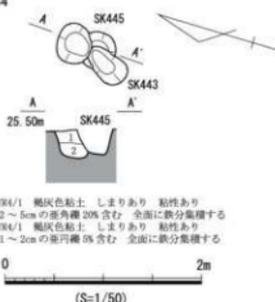
規模・形状 長軸長0.41m、短軸長0.36m以上、深さ0.29mである。平面形状は不整形円形、断面形状は逆台形で、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。埋土中に一定量の礫を含み、人為堆積と考えられる。

SK425



SK444



SK460



遺物出土状況

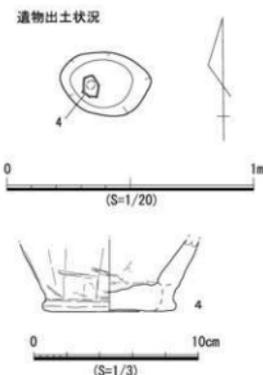


図21 SK425・444・460遺構図、SK460遺物実測図

遺物出土状況 縄文土器1点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 縄文土器は深鉢の胴部の小片である。

時期 出土遺物から、縄文時代と考えられる。

SK460 (図21)

検出状況 DJ1グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 長軸長0.37m、短軸長0.26m、深さ0.15mである。平面形状は楕円形、断面形状は逆台形で、底面は平坦である。

埋土 3層に分層した。礫と基盤層であるIV層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 縄文土器の底部1点(4)が、1層と3層の層界付近から正位で出土した。

遺物 4は縄文時代晩期の深鉢で、底部が外にやや張り出す。底部外面には網代痕が残る。

時期 出土遺物から、縄文時代晩期と考えられる。

SK786 (図22)

検出状況 CJ15グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭である。他遺構との重複関係は、SK787より古い。

規模・形状 長軸長0.50m以上、短軸長0.44m、深さ0.12mである。平面形状は楕円形、断面形状は逆台形で、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。埋土中に礫を少量含むが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 縄文土器1点(5)が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

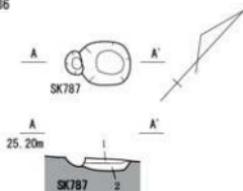
遺物 5は縄文時代晩期の深鉢で、口縁部に突帯を巡らせ、突帯に縦方向のキザミを施す。

時期 出土遺物から、縄文時代晩期と考えられる。

SK1069 (図22)

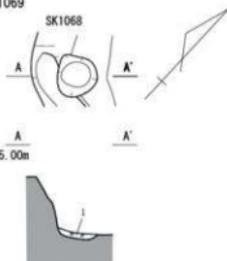
検出状況 DN8グリッド、II b層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は

SK786



- 1 10YR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり
径0.5~1cmの円礫SK含む
- 2 10YR4/3 にごい黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 礫含まず

SK1069



- 1 10YR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり
10YR7/6 明黄褐色土ブロック1K含む
径2cm以下の5YR5/6 明赤褐色土ブロック1K含む
径5cm以下の円礫わずかに含む

SK786



5

SK1069



6



図22 SK786・1069遺構図、遺物実測図

明瞭である。他遺構との重複関係は、SK1068より古い。

規模・形状 長軸長0.42m、短軸長0.40m、深さ0.06mである。平面形状は不整形円形、断面形状は浅い皿型で、底面は平坦である。

埋土 単層である。埋土中に基盤層であるIV層ブロックと礫を含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 縄文土器1点(6)が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 6は縄文時代晩期の深鉢である。口縁部は端部を外に折り返し肥厚させ、その下に幅1cmほどの突帯を貼り付ける。

時期 出土遺物から、縄文時代晩期と考えられる。

SK1120 (図23)

検出状況 DN11・DN12グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭である。

規模・形状 遺構の北部は攪乱によって消失する。長軸長0.24m、短軸長0.16m以上、深さ0.11mである。平面形状は不整形円形、断面形状は浅い皿型で、底面は平坦である。

埋土 単層である。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 縄文土器3点が散在して出土した。

遺物 縄文土器はいずれも小片である。

時期 出土遺物から、縄文時代と考えられる。

SK1121 (図23)

検出状況 DN12グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭である。

規模・形状 遺構の南部は発掘区外に広がる。長軸長0.48m、短軸長0.20m以上、深さ0.07mである。平面形状は円形と考えられ、断面形状は浅い皿型で、底面は平坦である。

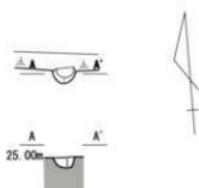
埋土 2層に分層した。埋土中に礫を少量含むが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 縄文土器1点と黒曜石の剥片1点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 縄文土器は深鉢の胴部の小片である。

時期 出土遺物から、縄文時代と考えられる。

SK1120



SK1121

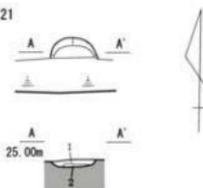


図23 SK1120・1121遺構図

第2節 古墳時代及び古代の遺構と遺物

1 竪穴建物

SI 1 (図24)

検出状況 BG 9・10グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP13・SK56より新しく、SP12、SK51、SK53等より古い。

規模・形状 主軸方位はN-4°-Eである。遺構の南部は発掘区外に広がり、西部は攪乱坑と重複するが、残存部分の形状から平面形状は隅丸方形の可能性が高い。長軸長3.87m以上、短軸長1.17m以上、深さ0.11mである。

埋土 単層である。IV層(基盤層)ブロックを含むことから人為堆積と考えられる。

床面・掘方 床面の硬化や整地土は確認できなかったが、壁際溝を検出した面を床面とした。掘方が非常に浅いため、上面が削平されたと考えられる。

SI 1

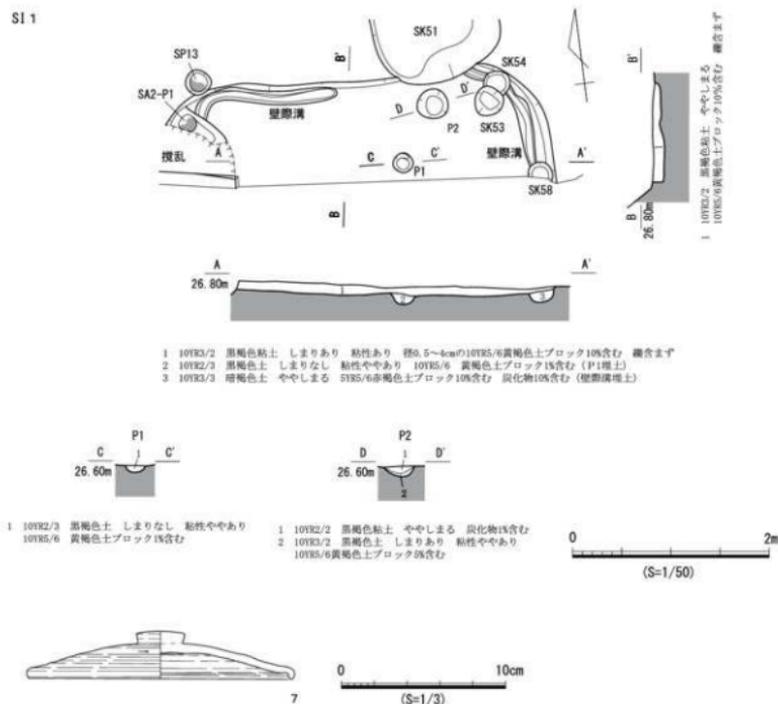


図24 SI 1遺構図、遺物実測図

付属遺構 柱穴やカマドは確認できなかったが、掘方壁面に沿う壁際溝を検出した。壁際溝は幅13cm、深さ6cmで、遺構北辺で途切れる箇所がある。床面で検出した土坑2基を付属遺構としたが、いずれも位置、形状等から柱穴とは判断できず、性格不明である。

遺物出土状況 遺構埋土から土師器18点と須恵器25点が出土した。床面直上で出土した遺物はなく、特徴的な出土状況は確認できなかった。また、付属遺構からの出土遺物はなかった。

遺物 土師器は全て甕の頸部と胴部の破片である。須恵器は、坏身と坏蓋と瓶類で、残存状況の良いものを7を図化した。7は美濃須恵産の坏蓋C類で口縁部に明瞭な内側への折り返しを確認でき、IV期第3小期に比定した。

時期 出土遺物と重複するSK56から8世紀後半の須恵器が出土することから、8世紀後半以降と考えられる。

SI2 (図25・26)

検出状況 BH20グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD14・SK134より古い。

規模・形状 主軸方位はN-10°-Eである。遺構の北部は発掘区外に広がり、東部はSD14との重複により残存しないが、残存部分の形状から、平面形状は隅丸方形の可能性が高い。長軸長2.84m以上、短軸長2.63m以上、深さ0.05mである。

埋土 単層である。IV層(基盤層)ブロックと小径の垂角礫を少量含むことから人為堆積と考えられる。

床面・掘方 床面の硬化や整地土は確認できなかったが、壁際溝を検出した面を床面とした。掘方が非常に浅いため、上面が削平されたと考えられる。

付属遺構 柱穴やカマドは確認できなかったが、掘方壁面に沿う壁際溝を検出した。壁際溝は幅14cm、深さ10cmで、遺構南辺と西辺の壁際溝底面では、径約10cmの小穴4基を検出した。床面で検出した土坑7基を付属遺構としたが、位置や形状からP5又はP6が柱穴である可能性が考えられる。P1とP2の上層には少量の炭化物と焼土が混じるが、カマドや炉との関連は不明である。

遺物出土状況 床面直上から土師器95点、須恵器4点、壁際溝から土師器1点、P1から土師器1点、P2から土師器3点、P6から土師器5点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 土師器は大半が甕の破片で、このうち残存状況のよい2点(8・9)を図化した。8はつまみ上げ状の口縁端部をもつ丸底甕で、7世紀代のものと考えられる。胴部内面には横方向、外面には斜め方向のハケ調整を施す。9は長胴甕の下半部で、胴部内面には板ナデ、外面にはハケによる調整を施す。時期と産地は不明である。須恵器は、坏身の胴部と甕の胴部、壺又は鉢の口縁部である。いずれも小片のため分類不能である。

時期 出土遺物から、7世紀代と考えられる。

2 掘立柱建物

SB1 (図27・28)

検出状況 CI15~CJ16グリッド、I層基底面でP1~P5を検出した。柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP40・SK291・SK294等より新しく、SK293より古い。

規模・形状 遺構南部は発掘区外へ広がると考えられ、桁行2間(柱間1.8m)以上、梁行2間(3.5

m、柱間1.6m-1.9m)の側柱建物である。主軸方位はN-8°-Eである。

柱穴 柱穴の平面形は方形又は楕円形で、径は0.43m~0.82m、深さは0.2m~0.45mである。P5では柱痕跡を確認した。P2完掘後の底面で長さ9cm~17cmの垂円礫5点を確認したが、礎盤石かどうかは不明である。

遺物出土状況 P1から縄文土器2点、P2から土師器3点、須恵器1点、石製品1点(10)が出土した。10は砥石で、P2底面の5点の礫のうち、最大のものである。それ以外に特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 縄文土器は深鉢の口縁部と胴部、土師器は器種不明、須恵器は甕の胴部である。いずれも小片

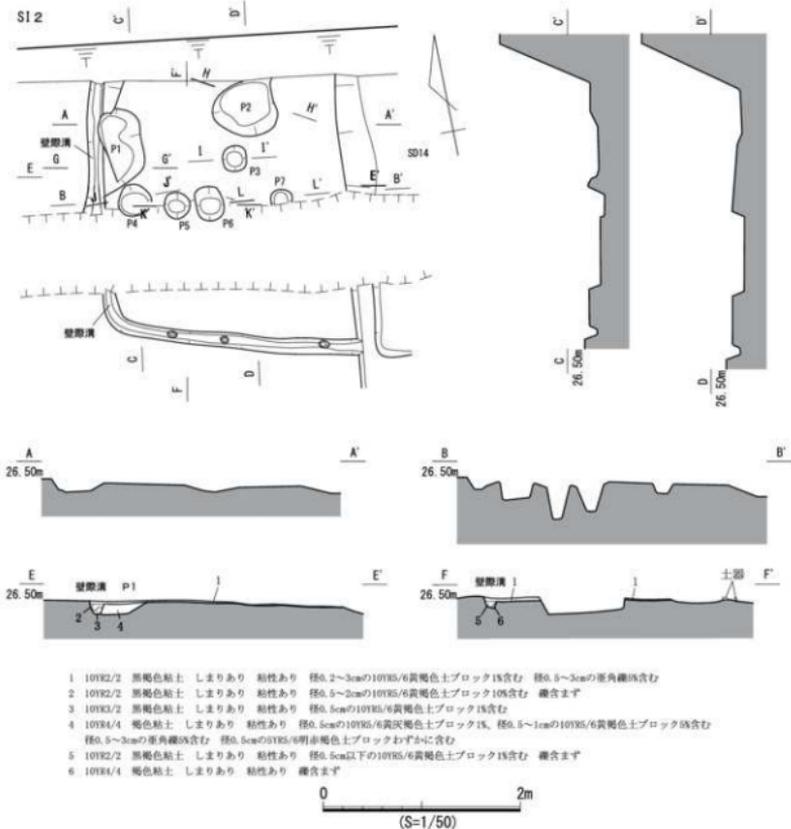
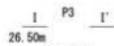


図25 SI 2 遺構図(1)

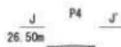
SI 2



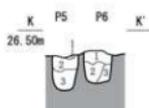
- 1 10YR4/4 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり
 径0.5cmの10YR5/6黄褐色土ブロック1%、
 径0.5~1cmの10YR5/6黄褐色土ブロック5%、
 径0.5cmの5YR5/6明赤褐色土ブロックわずかに含む
 径0.5~3cmの歪角礫5%含む



- 1 10YR4/3 に近い黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり
 径0.5~1cmの10YR7/6明黄褐色土ブロック、
 径0.5cmの5YR5/6明赤褐色土ブロック含む
 径0.5~5cmの歪角礫5%含む

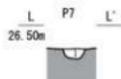


- 1 10YR2/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり
 径0.5cmの炭化物わずかに含む
 径0.5~2cmの歪角礫1%含む
 2 10YR2/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり
 径0.5~1cmの10YR5/6黄褐色土ブロック30%含む
 礫含まず

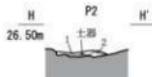
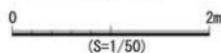


- P5
 1 10YR5/6 黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり
 径0.5cmの円礫1%含む
 2 10YR4/2 灰黄褐色粘土 ややしまる 粘性あり
 径0.5~2cmの10YR5/6黄褐色土ブロック10%含む
 径0.5~2cmの円礫5%含む
 3 10YR5/4 に近い黄褐色粘土 しまりなし 粘性あり
 径0.5~1cmの円礫5%含む

- P6
 1 10YR4/2 灰黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり
 径0.5~8cmの歪角礫5%含む
 2 10YR4/3 に近い黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり
 径4cmの円礫5%含む
 3 10YR4/3 に近い黄褐色粘土 (やや粗い) しまりあり 粘性あり
 径0.5~1cmの円礫わずかに含む



- 1 10YR2/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり
 径0.5cm以下の10YR5/6黄褐色土ブロック1%、
 5YR5/6明赤褐色土ブロック含む
 径0.5~1cmの円礫わずかに含む



- 1 10YR2/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり
 径1cm以下の5YR5/6明赤褐色土ブロック1%、
 径0.5~2cmの10YR7/6明黄褐色土ブロックわずかに含む
 径0.5~1cmの円礫1%含む
 2 10YR5/4 に近い黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 礫含まず

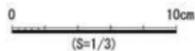
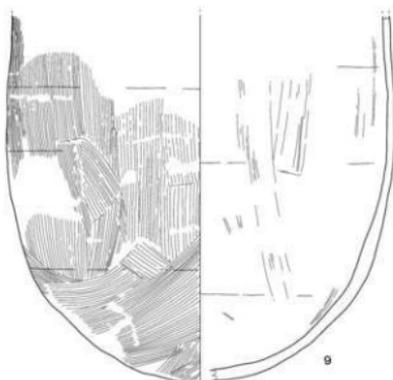
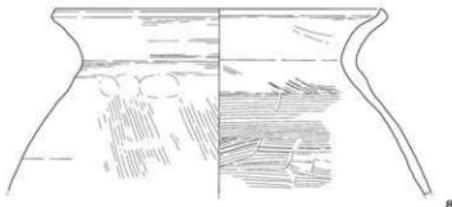


図26 SI 2 遺構図(2)、遺物実測図

SB 1

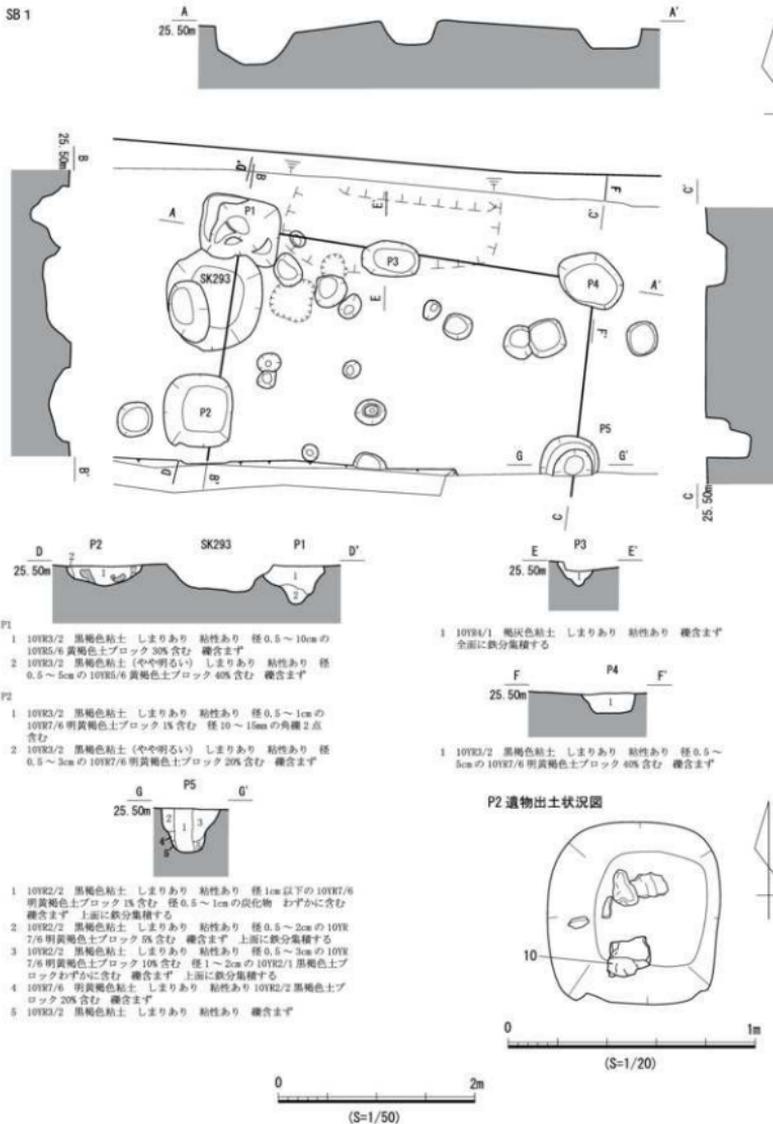


図27 SB 1遺構図

のため図示しなかった。10は砂岩製の砥石で、被熱後に割れた面を砥面に用いている。

時期 出土遺物から時期の判別はできないが、本遺構の東側に位置するSB2とSB3とは、主軸方位が本遺構と類似し、同時期の遺構の可能性があるので、古代以降と考えられる。

SB2 (図29・30)

検出状況 CI17グリッド、1層基底面でP1～P5を検出した。柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK341・SK349・SK350等より新しく、SK337・SK351より古い。

規模・形状 P3に対応する側柱が存在しないため、遺構南部は発掘区外へ広がると考えられ、桁行2間(柱間1.7m)以上、梁行2間(3.8m、柱間1.9m-1.9m)の側柱建物である。主軸方位は $N-3^{\circ}-E$ である。

柱穴 柱穴の平面形は不整形円形又は楕円形で、径は0.42m～0.83m、深さは0.16m～0.50mである。P1・P2・P3では柱痕跡を確認した。

遺物出土状況 P3から土師器1点、P5から土師器2点が出土した。

遺物 土師器は甕の胴部である。小片のため図示しなかった。

時期 出土遺物から時期の判別はできないが、本遺構の西側に位置するSB1と東側に位置するSB3は、主軸方位が本遺構と類似し、同時期の遺構の可能性があるので、古代以降と考えられる。

SB3 (図30・31)

検出状況 CJ18・19グリッド、1層基底面でP1～P6を検出した。柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK409・SK411・SK412等より新しく、SK368・SK410より古い。

規模・形状 P3とP4に対応する側柱が存在しないため、建物の南部は発掘区外へ広がると考えられ、桁行3間(5.4m、柱間1.8m-1.7m-1.9m)、梁行2間(柱間2m)以上の側柱建物である。主軸方位は $N-2^{\circ}-E$ である。

柱穴 柱穴の平面形は円形又は楕円形で、径は0.38m～0.61m、深さは0.17m～0.41mである。P2、P3、P5、P6では柱痕跡を確認した。

遺物出土状況 P1から土師器1点、P3から土師器3点、P4から土師器2点、須恵器1点、P5から土師器4点、P6から土師器1点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

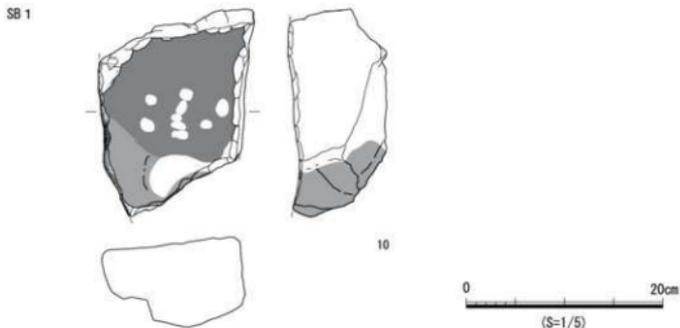


図28 SB1遺物実測図

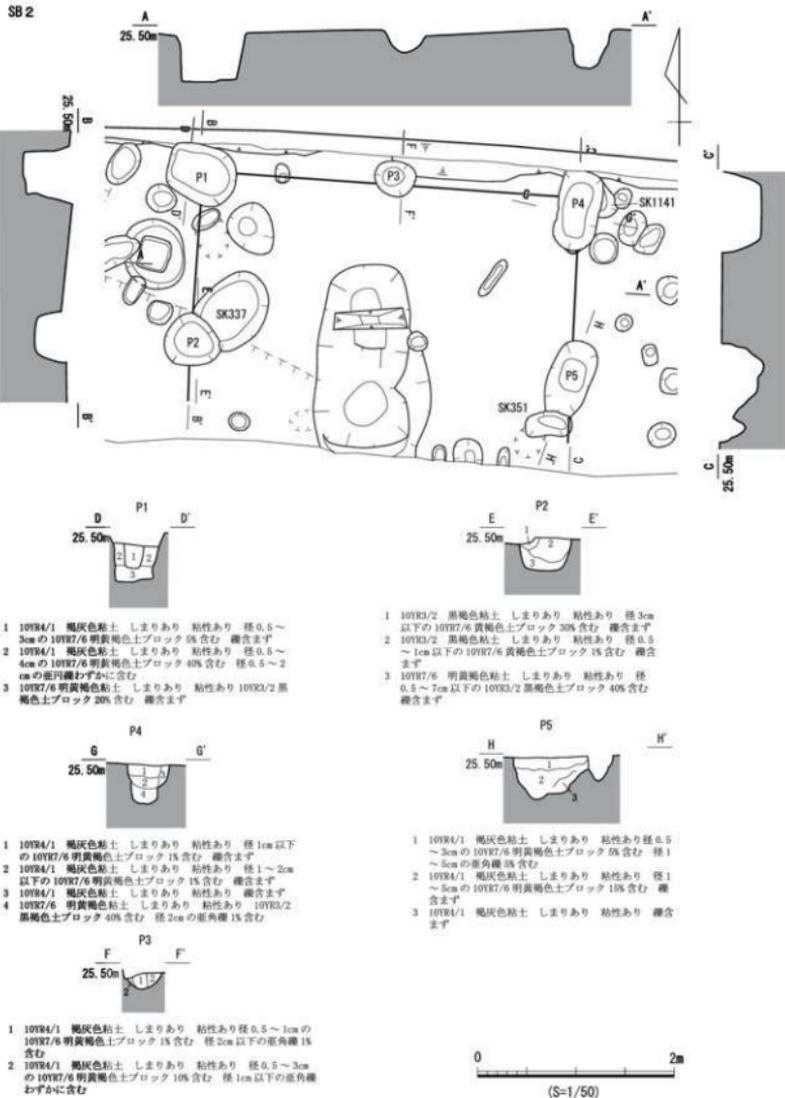


図29 SB 2遺構図

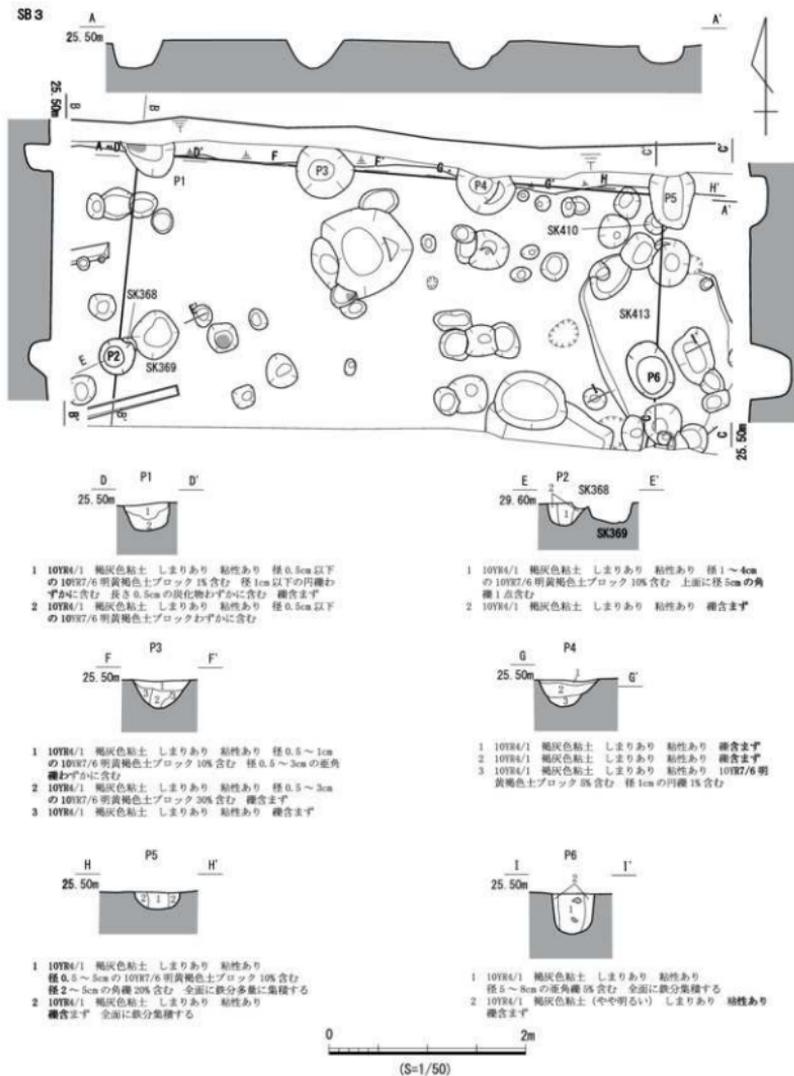


図30 SB3遺構図

遺物 土師器はいずれも甕の胴部である。小片のため図示しなかった。須恵器の分類可能なものとして、美濃須衛産IV期に比定した坯身B類がある。

時期 出土遺物から、古代以降と考えられる。本遺構の西側に位置するSB1とSB2は、主軸方位が本遺構と類似するため、同時期の遺構の可能性はある。

3 柵

SA1 (図31)

検出状況 BF3・BF4グリッド、I層基底面でP1～P5を検出した。いずれも平面形は明瞭であった。

SA1

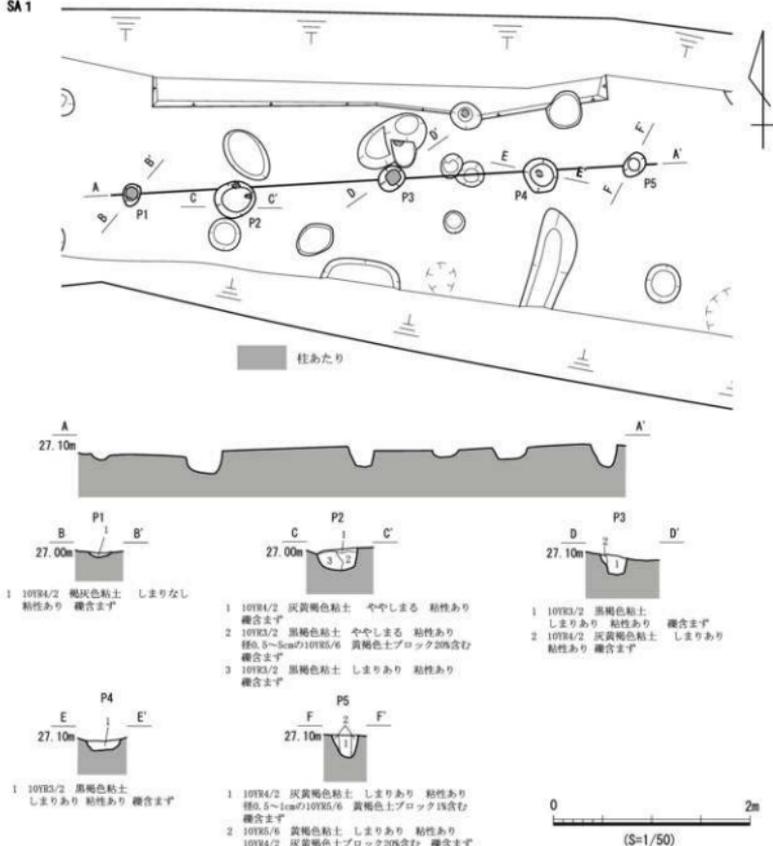


図31 SA1遺構図

規模・形状 東西方向に5基の柱穴が直線上に並ぶことから柵とした。主軸方位が $N-3^{\circ}-W$ 、柱間は1.0m~1.6m、東西長5.1mである。

柱穴 柱穴の平面形は円形及び楕円形で、径は0.24m~0.42m、深さは0.04m~0.22mである。P5では柱痕跡を確認し、P1~P4では柱あたりを確認した。

遺物出土状況 P2から土師器1点、P5の柱痕跡埋土から須恵器1点が出土した。いずれも特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 土師器、須恵器ともに甕の胴部の小片である。

時期 出土遺物から、古代以降と考えられる。

SA2 (図32)

検出状況 BG9・BG10グリッド、I層基底面でP1~P3を検出した。いずれも平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SI1より新しく、SK47・SK51・SK55より古い。

SA2

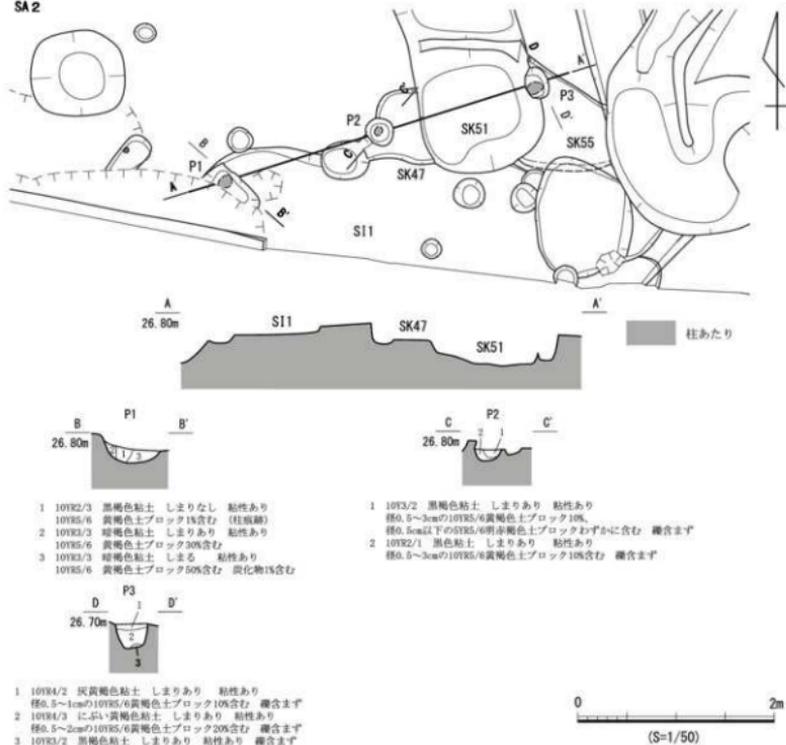


図32 SA2遺構図

規模・形状 東西方向に3基の柱穴が、ほぼ等間隔で直線上に並ぶことから櫛とした。主軸方位がN-18°-W、柱間は1.6m、東西長3.2mである。西側は発掘区外へ広がる可能性がある。

柱穴 柱穴の平面形は円形及び不定形で、径は0.30m~0.61m、深さは0.12m~0.25mである。P1、P2、P3では柱あたりを確認した。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 重複するSI1の出土遺物から、古代以降と考えられる。

SA3 (図33)

検出状況 CH4・CI4グリッド、IIb層基底面でP1~P5を検出した。いずれも平面形は明瞭であった。

SA3

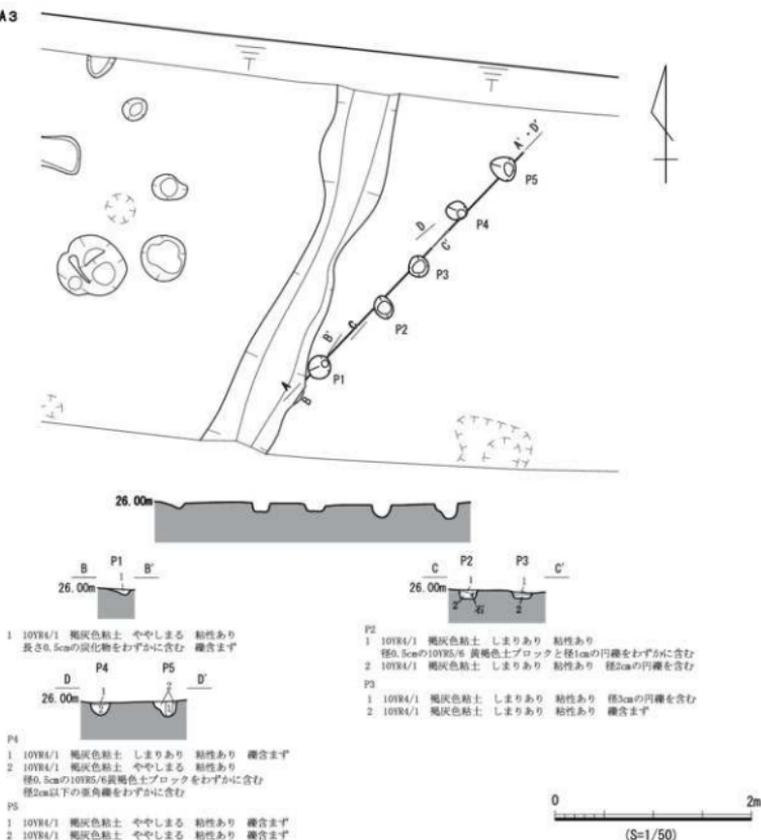


図33 SA3遺構図

規模・形状 南北方向に5基の柱穴が直線上に並ぶことから柵とした。主軸方位がN-43°-E、柱間は0.6~0.9m、東西長2.8mである。北側は発掘区外へ広がる可能性がある。

柱穴 柱穴の平面形は円形及び不整形円形で、径は0.22m~0.27m、深さは0.06m~0.15mである。P5では柱痕跡を確認した。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 当遺構の約3m東に位置する古代の溝状遺構SD18と主軸方位が類似するため、同時期と考えられる。

SA4 (図34)

検出状況 CJ15・CJ16グリッド、I層基底面でP1~P5を検出した。いずれも平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SB1・SK39より新しい。

SA4

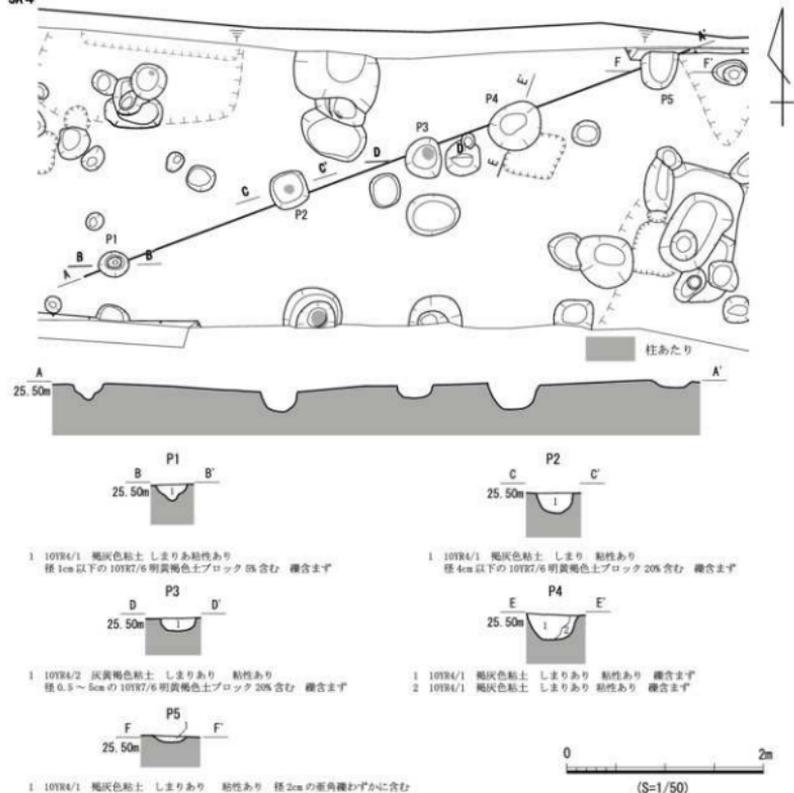


図34 SA4遺構図

規模・形状 東西方向に5基の柱穴が直線上に並ぶことから櫛とした。主軸方位がN-19°-W、柱間は1.0m~1.9m、東西長5.9mである。東側、西側ともに、発掘区外へ広がる可能性がある。

柱穴 柱穴の平面形は不整形円形及び方形で、径は0.3m~0.56m、深さは0.06m~0.26mである。P2・P3・P5では柱あたりを確認した。

遺物出土状況 P4から須恵器1点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 小片のため図示していないが、須恵器は美濃須恵産の坏蓋で、IV期の第2小期又は第3小期に比定した。

時期 出土遺物から、古代以降と考えられる。

SA8 (図35)

検出状況 EK4・EK5グリッド、I層基底面でP1~P5を検出した。いずれも平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK138より新しく、SK156より古い。

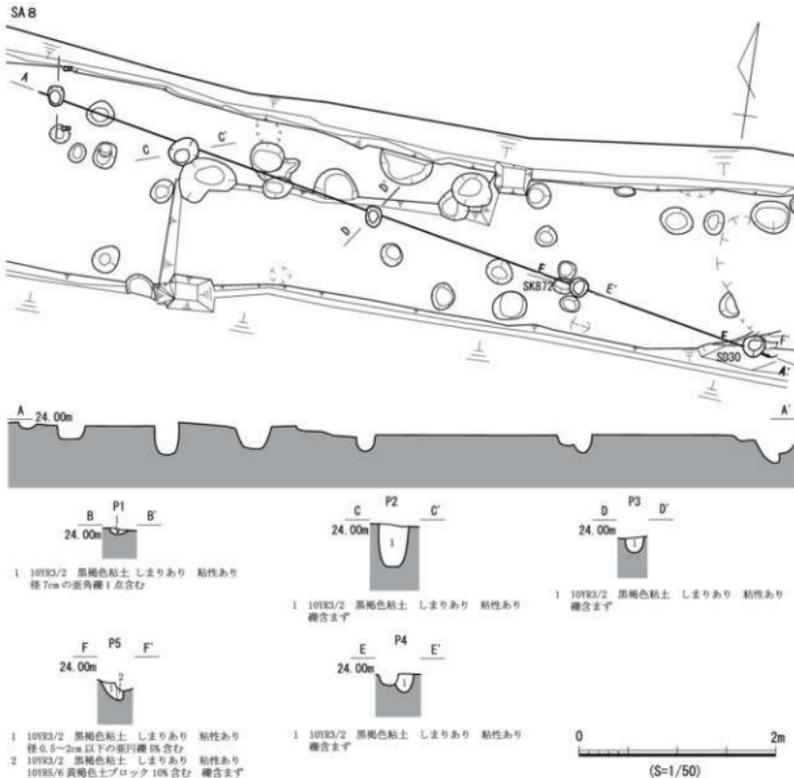


図35 SA8遺構図

規模・形状 東西方向に5基の柱穴が直線上に並ぶことから槽とした。主軸方位がN-78°-W、柱穴間は1.0m~1.5m、東西長7.5mである。東側、西側ともに、発掘区外へ広がる可能性がある。

柱穴 柱穴の平面形は円形及び不整形円で、径は0.20m~0.31m、深さは0.06m~0.44mである。全ての柱穴で柱痕跡や柱あたりは確認できなかった。

遺物出土状況 P3から土師器1点、P4から須恵器1点と灰軸陶器1点が出土した。いずれも特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 須恵器は甕の胴部、灰軸陶器は碗の胴部で、いずれも小片である。

時期 出土遺物から、古代以降と考えられる。

4 柱穴

SP9 (図36)

検出状況 CL2グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。検出時に柱痕跡は確認できなかった。

規模・形状 長軸長0.52m、短軸長0.44m、深さ0.37mで、平面形は不整形円形である。断面形は、南東側にテラス状の段を有し、北西側が大きく掘り込まれる。最深部の底面は丸くなり、柱あたりは確認できなかった。

埋土 6層に分層した。

遺物出土状況 土師器2点が1層から、須恵器1点が3層から出土した。

遺物 土師器と須恵器はともに甕の胴部である。いずれも小片のため図示しなかった。

時期 出土遺物から、古代以降と考えられる。

SP21 (図36)

検出状況 BG11~BG12グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。検出時に柱痕跡は確認できなかった。他遺構との重複関係は、SK72より古い。

規模・形状 長軸長0.40m、短軸長0.38m、深さ0.23mで、平面形は不整形円形である。断面形は概ね半円形だが、東側の壁面にはやや凹凸がみられ、底面は中央部がやや深くなる。底面で柱あたりを確認した。

埋土 2層に分層した。1層は柱当たりとの位置関係から、柱痕跡と考えられる。2層が柱掘方埋土である。

遺物出土状況 土師器1点と山茶碗類1点が1層から出土した。

遺物 土師器は小片のため器種不明である。山茶碗類は美濃須術産山茶碗の壺又は瓶の胴部で、12世紀代のものである。

時期 出土遺物から12世紀以降と考えられる。

SP23 (図36)

検出状況 BG12グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であったが、検出時に柱痕跡は確認できなかった。

規模・形状 長軸長0.60m、短軸長0.27m、深さ0.25mで、平面形は楕円形である。断面形は概ね逆台形状だが、壁面にはやや凹凸がみられ、底面は平坦である。柱あたりは確認できなかった。

埋土 2層に分層した。検出時に明瞭な柱痕跡を確認できなかったが、遺構半截時に1層が柱痕跡で

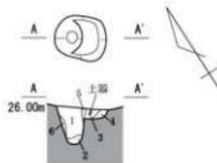
あることを確認した。2層が柱掘方埋土である。

遺物出土状況 須恵器1点が1層から出土した。

遺物 須恵器は坏身の胴部である。小片のため図示しなかった。

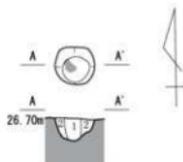
時期 出土遺物から古代以降と考えられる。

SP 9



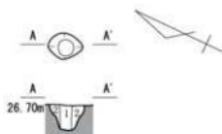
- 1 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりあり 粘性あり 径2cmの円礫わずかに含む
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりあり 粘性あり 礫含まず
- 3 10YR4/2 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性あり 径2cmの円礫含む
- 4 10YR4/4 褐色土 しまりあり 粘性ややあり 礫含まず
- 5 10YR4/1 褐色土 しまりあり 粘性あり 10YR7/6 明黄褐色土ブロックわずかに含む 礫含まず
- 6 10YR4/6 褐色土 しまりあり 粘性あり 礫含まず

SP 21



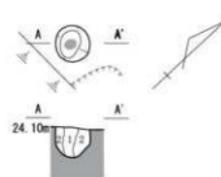
- 1 10YR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径0.5~3cmの10YR5/4にぶい黄褐色土ブロック40%含む 礫含まず
- 2 10YR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径0.5~4cmの10YR5/4にぶい黄褐色土ブロック10%含む 径1~2cmの円礫1%含む

SP 23



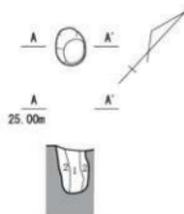
- 1 10YR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 礫含まず
- 2 10YR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径0.5~2cmの10YR5/4にぶい黄褐色土ブロック20%含む 礫含まず

SP 161



- 1 10YR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR5/4にぶい黄褐色土ブロックわずかに含む 礫含まず
- 2 10YR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径1~2cmの10YR5/4にぶい黄褐色土ブロック3%含む 礫含まず

SP 162



- 1 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 礫含まず 全面に数分集積する
- 2 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR7/6 明黄褐色土ブロック3%含む 礫含まず 全面に数分集積する

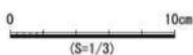
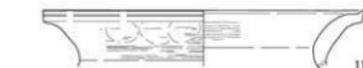


図36 SP 9・21・23・161・162遺構図、SP161遺物実測図

SP161 (図36)

検出状況 EK 2グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であったが、検出時に柱痕跡は確認できなかった。

規模・形状 長軸長0.37m、短軸長0.37m、深さ0.31mで、平面形は円形である。断面形はやや深い半円形で壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は丸くなる。柱当たりを確認した。

埋土 2層に分層した。1層は柱当たりとの位置関係から、柱痕跡と考えられる。2層が柱掘方埋土である。柱痕跡に歪みがみられる。

遺物出土状況 土師器32点、須恵器6点が1層・2層から散在して出土した。

遺物 土師器は全て甕の破片で、分類可能なものとして、6世紀後半から7世紀前半と考えられる伊勢型長胴甕A類(11)と、6世紀後半から7世紀代と考えられる伊勢型長胴甕B類(12)がある。須恵器の分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅲ期に比定した坏蓋C類、猿投産の高蔵寺2号窯式から折戸10号窯式に比定した坏蓋C類、産地不明の美濃須衛産Ⅲ期後半併行に比定した坏身A類がある。

時期 出土遺物から8世紀代と考えられる。

SP162 (図36)

検出状況 DM 9グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似し、平面形はやや不明瞭であった。

規模・形状 長軸長0.38m、短軸長0.31m、深さ0.44mで、平面形は不整形円形である。西側壁面の立ち上がりは急で、東側壁面は若干袋状となる。底面は丸くなり、最深部が東側に寄る。柱当たりは確認できなかった。

埋土 2層に分層した。柱当たりが存在しないが、底部の形状から1層は柱痕跡と考えられる。2層が柱掘方埋土である。

遺物出土状況 土師器1点が1層から出土した。

遺物 土師器は小片である。いずれも小片のため図示しなかった。

時期 出土遺物から古代以降と考えられる。

5 溝状遺構

SD 6 (図37)

検出状況 BG10・BG11グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP17より新しく、SK64より古い。

規模・形状 主軸方位はN-48°-Eで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅1.12m、深さ0.07mである。断面形状は浅い皿状で、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土 単層である。礫を少量含むが、流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 須恵器1点、灰軸陶器2点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 須恵器は器種不明の小片である。灰軸陶器は碗の胴部の小片である。

時期 出土遺物から、古代以降と考えられる。

SD10 (図37)

検出状況 BH17グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD11・SK113より新しく、SD13より古い。当遺構の北側に隣接するSD

9は、同一遺構の可能性はあるが、遺構埋土と掘方の形状が異なるため、別遺構と判断した。

規模・形状 主軸方位はN-4°-Wで、遺構の南端は発掘区外に延びる。幅0.43m、深さ0.20mである。断面形状は、両端壁面の傾斜は緩やかだが、中央部分が一段深く掘り込まれる。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土 2層に分層した。IV層（基盤層）ブロックが混じる。流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 山茶碗類1点が出土した。

遺物 13は尾張型第4型式の山茶碗の小碗である。

時期 出土遺物と、本遺構より古いSD11から尾張型第3型式の山茶碗が出土していることから、12世紀前半以降と考えられる。

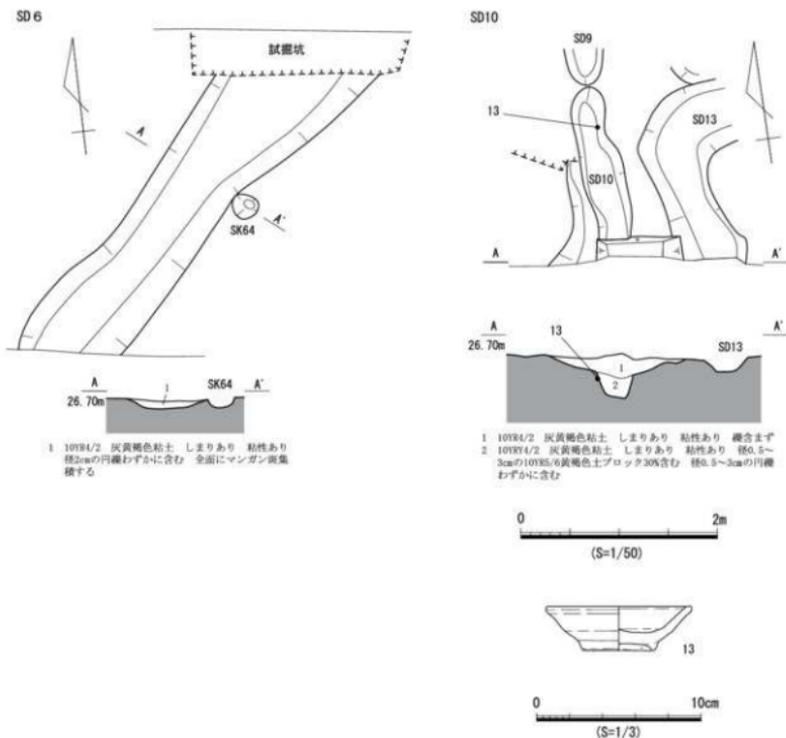


図37 SD6・10遺構図、SD10遺物実測図

SD11 (図38)

検出状況 BH17グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD10・SD13より古い。

規模・形状 主軸方位はN-2°-Wで、遺構の南端は発掘区外に延びる。幅0.41m、深さ0.35mである。東側の壁面がオーバーハング気味に立ち上がる。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土 2層に分層した。IV層（基盤層）ブロックが混じる。流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 須恵器1点、山茶碗1点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 須恵器は壺又は瓶の胴部である。山茶碗類は尾張型第3型式の碗である。

時期 出土遺物から、12世紀前半以降と考えられる。

SD15 (図38)

検出状況 CH1・CH2グリッド、SD16完掘後の底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD16より古い。

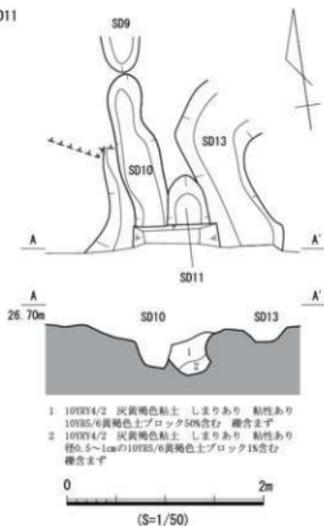
規模・形状 主軸方位はN-20°-Eで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅0.62m、深さ0.18mで、断面形状は浅い皿状で、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。当遺構と重複するSD16と主軸方位が類似する。

埋土 単層である。堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 6世紀から7世紀の溝SD16より古いことから、6世紀以前と考えられる。

SD11



SD15

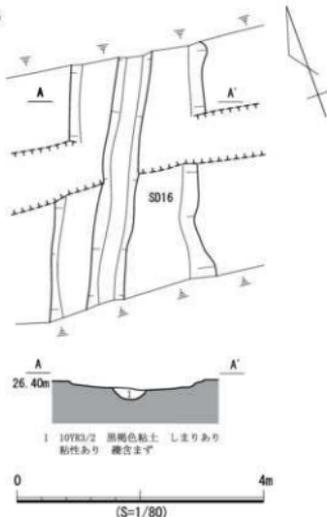


図38 SD11・15遺構図

SD16 (図39)

検出状況 CI1グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD9・SK114より古い。SD9と主軸方位が類似する。

規模・形状 主軸方位はN-20°-Eで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅2.68m、深さ0.16mである。断面形状は浅い皿状で、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土 単層である。少量の礫を含むが、流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器3点、須恵器2点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 土師器は甕の胴部の小片である。須恵器は、美濃須衛産Ⅱ期に比定した脚付壺と、7世紀のものと考えられる畿内系の甕である。

時期 出土遺物から、6世紀から7世紀と考えられる。

SD17 (図40)

検出状況 CI4グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 主軸方位はN-24°-Eで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅0.70m、深さ0.12mである。断面形状は浅い皿型で、底面は丸みを帯びる。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土 2層に分層した。遺構の北部では、2層埋土内に0.5cm~20cmの礫を多量に含む箇所を確認した。流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器1点、須恵器1点、灰軸陶器1点、山茶碗類2点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 土師器は甕の胴部、須恵器は坏蓋で、いずれも小片である。灰軸陶器は明和27号窯式に比定した碗である。山茶碗類は碗の口縁部と胴部の小片である。

時期 出土遺物から、11世紀初頭から12世紀前半と考えられる。

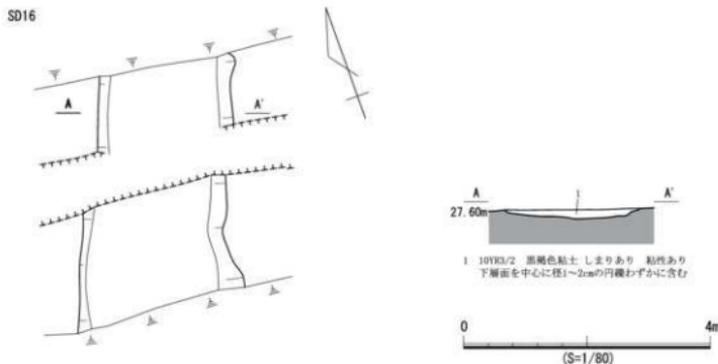


図39 SD16遺構図

SD18 (図41)

検出状況 CH5・CI5グリッド、II b層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。遺構上部が削平されているため掘方は浅く、南北に途切れる。

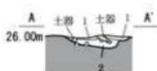
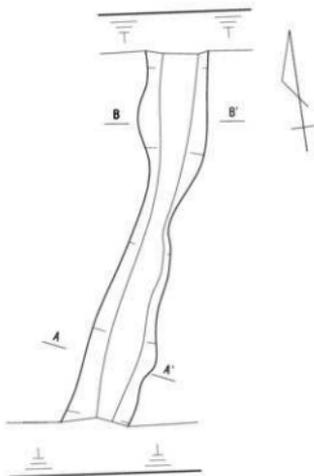
規模・形状 主軸方位はN-33°-Eで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅0.53m、深さ0.04mである。断面形状は浅い皿状で、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。当遺構の約3m西に位置するSA3と主軸方位が類似する。

埋土 単層である。基盤層であるIV層ブロックと少量の亜角礫を含み、人為堆積と考えられる。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 当遺構を境にして東側は遺構が多く、西側は空閑地となっており、当遺構東側の遺構に関する区画溝と判断した。このため、当遺構東側の遺構の所属時期から、古代以降と考えられる。

SD17

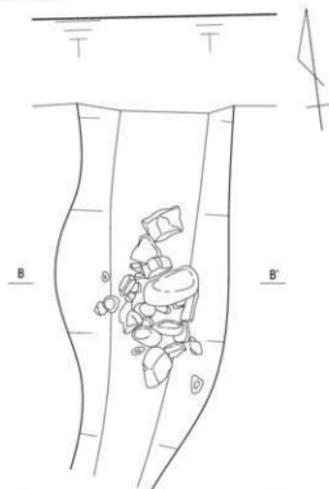


- 1 10TR4/1 褐灰色粘土 しまりあり 粘性あり
径0.5~1cmの円礫1%含む 全体にマンガン皮
集積する
- 2 10TR4/1 褐灰色粘土 しまりあり 粘性あり
径0.5~20cmの亜角礫20%含む 全面にマンガン
皮集積する



(S=1/50)

裸出土状況



- 1 10TR4/1 褐灰色粘土 しまりあり 粘性あり
径2~3cmの円礫20%含む 全面に鉄分集積する



(S=1/20)

図40 SD17遺構図

SD22 (図41)

検出状況 BK16～BL17グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK213・SK219・SK220より古い。

規模・形状 クランク状に屈曲し、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅0.43m、深さ0.08mである。断面形状は半円形で、底面は丸みを帯びる。両端部の底面標高に大きな差はない。

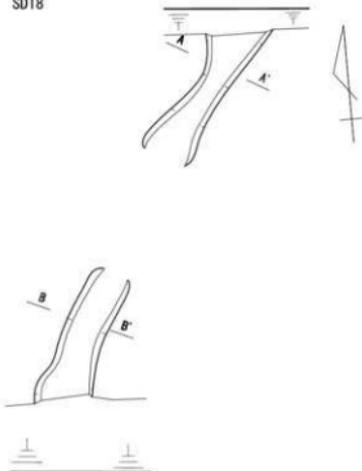
埋土 単層である。基盤層であるIV層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 土師器2点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 土師器は甕の胸部の小片である。

時期 出土遺物と、当遺構より新しいSK219・SK220から土師器の甕の小片が出土していることから、古代以降と考えられる。

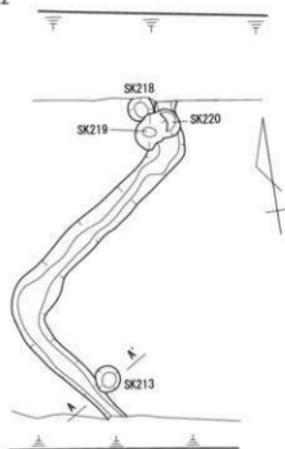
SD18



1 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり
径0.5cmの10YR5/6 黄褐色土ブロックをわずかに含む。10YR5/8の褐色粘土をわずかに含む。
径0.5cmの垂角礫をわずかに含む。

1 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり
径0.5cmの10YR5/6 黄褐色土ブロックをわずかに含む。炭化物をわずかに含む。径2cmの垂角礫を含む。

SD22



1 10YR3/2 赤褐色粘土 しまりあり 粘性あり
10YR5/6 黄褐色土ブロック20%含む 礫含まず



図41 SD18・22遺構図

SD23 (図42)

検出状況 CL3・CM3グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層のIV層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK261より新しく、SP32より古い。当遺構の東側に隣接するSD24とは主軸方位が異なり、発掘区北側で重複する可能性がある。

規模・形状 主軸方位はN-10°-Eで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅1.21m、深さ0.19mである。壁面の傾斜が急であるが、遺構の南東部にテラス状の平坦部がある。底面は平坦である。底面標高は、北から南へ緩やかに傾斜する。

埋土 3層に分層した。3層埋土に基盤層であるIV層ブロックを含むが、堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 土師器7点と須恵器1点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

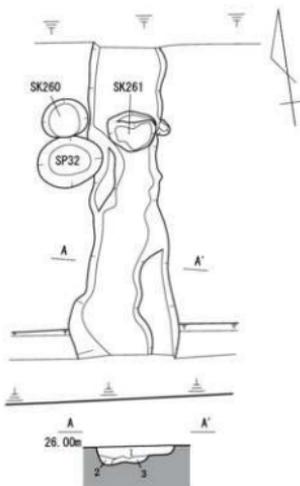
遺物 土師器は甕の胴部の小片である。須恵器は小片のため、器種不明である。

時期 出土遺物から、古代以降と考えられる。

SD25 (図42)

検出状況 C114・CJ14グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK273・SK274・SK275等より新しい。当遺構の東側に隣接するSD24とは主軸方位が異なり、発掘区北側で重複する可能性がある。

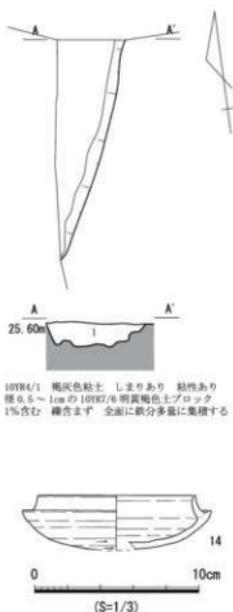
SD23



- 1 10TR4/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性あり 径1cm以下の円礫1%含む
- 2 10TR4/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性あり 礫含まず
- 3 10TR4/4 褐色土 しまりあり 粘性あり 10TR5/6黄褐色土ブロック20%含む 径1cm以下の円礫わずかに含む



SD25



- 1 10TR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径0.5~1cmの10TR7/8黄褐色土ブロック1%含む 礫含まず 全面に鉄分多量に集積する



図42 SD23・25遺構図、SD25遺物実測図

規模・形状 主軸方位はN-21°-Eで、遺構の西端と南北端は発掘区外に延びる。幅0.59m以上、深さ0.25mである。断面形状は、東側壁面の一部に階段状の立ち上がりが見られるが、大部分は緩やかに傾斜する。底面は不規則に起伏する。両端部の底面標高に大きな差は確認できない。

埋土 単層である。基盤層であるIV層ブロックを含むが、堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 須恵器1点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 14は須恵器の坏身A類で、美濃須衛産のⅢ期に比定した。焼成不良のため、色調が赤褐色である。

時期 出土遺物から、7世紀代と考えられる。

SD26 (図43・44)

検出状況 DJ2グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似しており、平面形は不明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP72より古い。

規模・形状 主軸方位はN-32°-Wで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅1.47m以上、深さ0.35mである。壁面には部分的にテラス状の平坦部分が存在する。遺構南端では西側壁面の傾斜が急であるが、北部では西側壁面の傾斜が緩やかになる。底面標高は北から南に向かって緩やかに傾斜する。

埋土 4層に分層した。ほぼ水平堆積で、4層は砂礫を含むシルトで、流水による堆積と考えられるが、埋土全体の堆積状況は不明である。

遺物出土状況 縄文土器7点、土師器140点、須恵器36点、山茶碗類3点、常滑産陶器1点、瓦8点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 縄文土器は深鉢の胴部の小片である。土師器は大半が甕の胴部の小片で、分類可能なものとしては、7世紀又は8世紀の濃型長胴甕、11世紀又は12世紀代の伊勢型鋺がある。美濃須衛産の須恵器では、Ⅲ期後半又はⅣ期第1小期に比定した坏蓋C類、Ⅳ期第3小期に比定した盤、Ⅳ期に比定した坏身C類(15)、Ⅱ期又はⅢ期に比定した甕(16)とⅣ期に比定した甕(17)、猿投産の須恵器では、岩崎17号窯式期に比定した坏身B類(18)と壺(19)がある。山茶碗類は尾張型第3型式併行に比定した東濃型の碗(20)である。常滑産陶器は甕の胴部の小片である。瓦は全て平瓦で、布目痕の残存状況が良好な1点(21)を図示した。石製品は砂岩製の台石(22)である。扁平な円礫で、一面に堅果類を設置できるような凹みを有する。

時期 出土遺物から、12世紀以降と考えられる。

SD27 (図45)

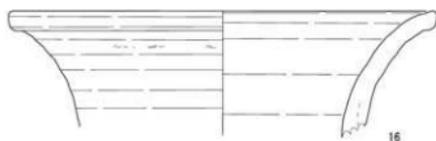
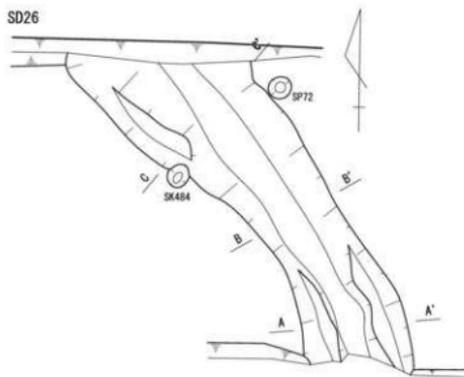
検出状況 DJ9・DJ10グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は不明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK731より古い。

規模・形状 主軸方位はN-19°-Eで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅1.84m以上、深さ0.63mである。遺構北部の底面は、方形の土坑状に一段深く掘り込まれ、東西の壁面は緩やかに立ち上がる。

埋土 5層に分層した。ほぼ水平堆積で、5層ともに礫を含むが、堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 土師器1点、須恵器5点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

SD26



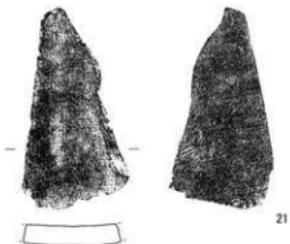
16



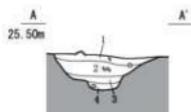
17



19



21



25.50m

- 1 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径0.5～1cmの歪角礫わずかに含む
- 2 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径0.5～2cmの歪角礫1%含む
- 3 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径1～3cmの歪角礫10%含む わずかに細砂含む
- 4 10YR3/2 黒褐色粘質シルト しまりあり 粘性あり 径0.5～6cmの歪角礫10%と中砂多量に含む

25.50m



- 1 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径0.5～2cmの円礫5%含む
- 2 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径1～5cmの歪角礫10%含む
- 3 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径1～3cmの歪角礫20%含む わずかに細砂含む
- 4 10YR4/1 褐色粘質シルト しまりあり 粘性あり 径0.5～11cmの歪角礫40%と中砂多量に含む

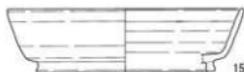
25.50m



- 1 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径1～4cmの歪角礫5%含む
- 2 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径1～3cmの歪角礫5%含む
- 3 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径3cmの円礫10%含む わずかに細砂含む
- 4 10YR4/1 褐色粘質シルト しまりあり 粘性あり 径0.5～10cmの歪角礫10%と中砂多量に含む

0 2m

(S=1/50)



15



18



20

0 10cm

(S=1/3)

図43 SD26遺構図、遺物実測図(1)

遺物 土師器は甕の胴部の小片である。須恵器の分類可能なものとして、美濃須衛産のⅢ期に比定した坏身A類(23)、産地不明の6世紀初頭の坏蓋A類(24)がある。

時期 出土遺物から、7世紀以降と考えられる。

SD28 (図45)

検出状況 DJ11グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似しており、平面形は不明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP121・SK742・SK743より新しい。

規模・形状 主軸方位はN-17°-Eで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅0.91m以上、深さ0.16mである。断面形状は概ね逆台形で、遺構南部の東側壁面にテラス状の平坦部分が存在する。底面標高は南から北に向かって緩やかに深くなる。

埋土 単層である。少量の礫を含むが、堆積状況は不明である。流水による堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 土師器18点、須恵器2点、灰釉陶器3点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 土師器は大半が甕の胴部の小片である。須恵器は甕の胴部と底部の小片である。灰釉陶器の分類可能なものとして、黒笹90号窯式に比定した猿投産の皿(25)がある。25は内外面とも器面全体が刷毛塗りによって施釉される。

時期 出土遺物から、9世紀後半以降と考えられる。

SD30 (図46)

検出状況 EK5・EK6グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 主軸方位はN-48°-Eで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅0.70m以上、深さ0.08mである。断面形状は逆台形で、底面は平坦である。底面標高は北から南に向かって緩やかに傾斜する。

埋土 2層に分層した。堆積状況は不明である。

流水による堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 土師器2点出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 土師器は甕の胴部の小片である。

時期 出土遺物から、古代以降と考えられる。

SD35 (図46)

検出状況 DM2・DM3グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK976・SK977・SK980より新しく、SK973より古い。

規模・形状 主軸方位はN-10°-Eで、遺構の西端は発掘区外に延びる。幅1.21m以上、深さ0.19mである。断面形状は浅い皿状で、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差は

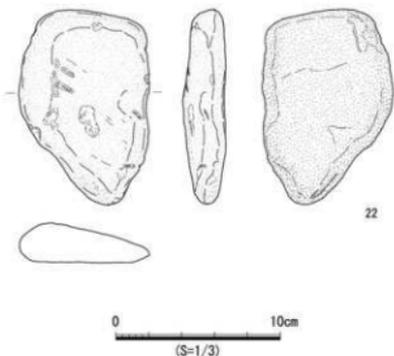


図44 SD26遺物実測図(2)

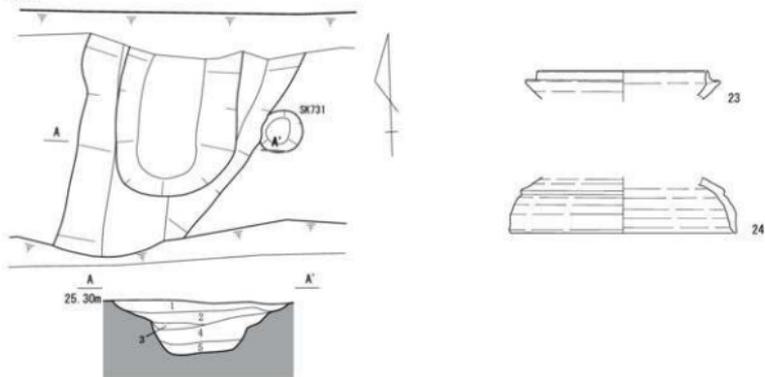
ない。

埋土 単層である。堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 須恵器4点、灰釉陶器3点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

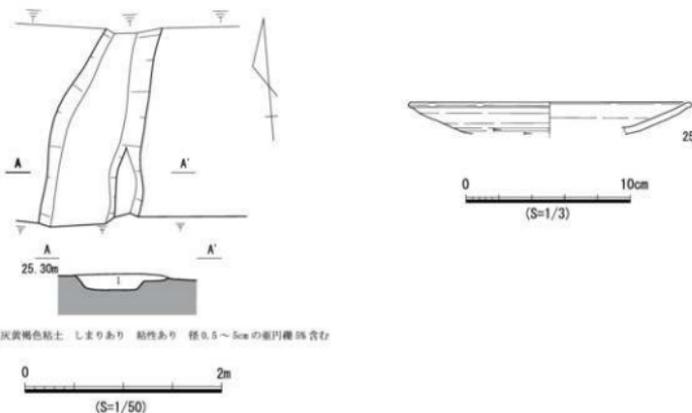
遺物 須恵器の分類可能なものとして、美濃須恵産のⅢ期又はⅣ期に比定した坏蓋C類がある。灰釉陶器は碗の小片である。

SD27



- 1 10YR4/2 灰黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径0.5~5cmの磁円礫5%含む
- 2 10YR4/1 褐灰色粘土 しまりあり 粘性あり 径0.5~2cmの磁円礫10%含む
- 3 10YR4/1 褐灰色粘土 しまりあり 粘性あり 細礫(亜角礫)40%含む
- 4 10YR3/2 黒褐色粘質土 しまりあり 粘性あり 径0.5~3cmの円礫10% 極細砂20%含む
- 5 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 しまりあり 粘性あり 径0.5~3cmの円礫10% 極細砂10%含む

SD28



- 1 10YR4/2 灰黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径0.5~5cmの磁円礫5%含む

図45 SD27・28遺構図、遺物実測図

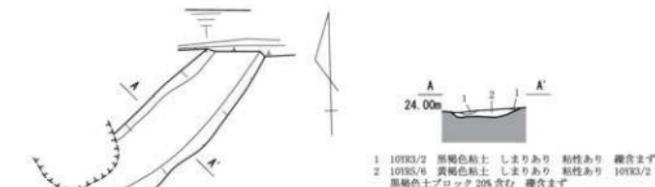
時期 当遺構の北側に並行する中世の溝SD34と同時期の可能性があるが、出土遺物から、古代以降と判断した。

SD36 (図46)

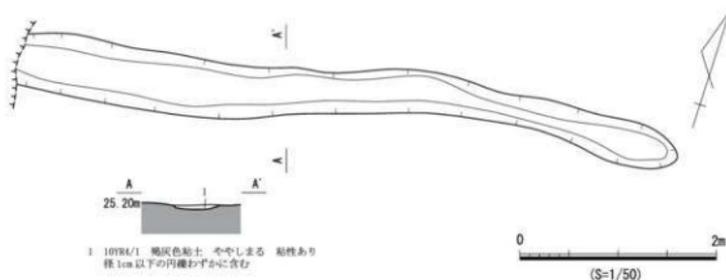
検出状況 DN1～DM2グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD34より古い。

規模・形状 主軸方位はN-71°-Eである。幅0.16m、深さ0.05mで、全体的に掘方が浅く、遺構中央部で東西に分断する。断面形状は逆台形形で、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。当遺構の周辺に位置するSD33・SD34・SD35と主軸方位が類似する。

SD30



SD35



SD36

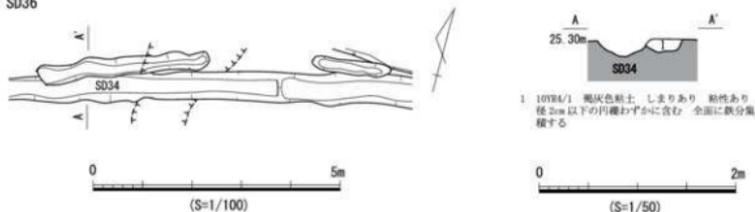


図46 SD30・35・36遺構図

埋土 単層である。堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 土師器1点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 土師器は甕の胴部の小片である。

時期 出土遺物と中世の溝SD34より古いことから、古代と考えられる。

SD39 (図47・48)

検出状況 DM7・DN7グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP219・SK1011・SK1012等より新しい。

SD39

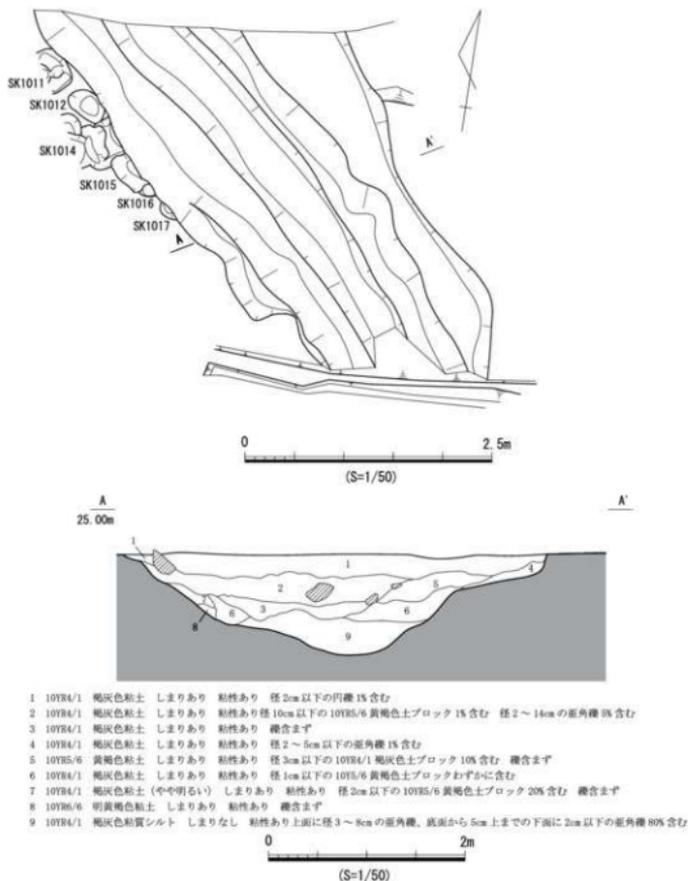


図47 SD39遺構図

規模・形状 主軸方位はN-43°-Wで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅2.38m以上、深さ0.52mである。東側壁面にテラス状の平坦面が広がり、底面は丸みを帯びる。底面標高は北から南に向かって緩やかに深くなる。

埋土 9層に分層した。6層～8層は基盤層であるIV層ブロックを含み、崩落土と考えられる。9層は多量の垂角礫を含み、人為的な堆積と考えられる。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 縄文土器2点、土師器17点、須恵器32点、灰釉陶器3点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 縄文土器は深鉢の胴部の小片である。土師器は甕の胴部と坏(26)で、23は口縁部が大きく外反する。須恵器の分類可能なものとして、美濃須恵産のIV期第3小期に比定した台付皿(27)、IV期第3小期又はV期第1小期に比定した台付盤(28)、V期第1小期に比定した坏身C類(29・30)、IV期に比定した壺(31)がある。29の底部外面には「吉野」の墨書がある。灰釉陶器は猿投産の黒笹14号窯式に比定した碗(32)と皿(33・34)である。33は無高台の大型の皿で、内面に陰刻花紋が施される。石製品はチャート製のRF(35)である。側辺に連続した調整がみられるが、刃部は確認できない。

時期 出土遺物から、9世紀代と考えられる。

SD39

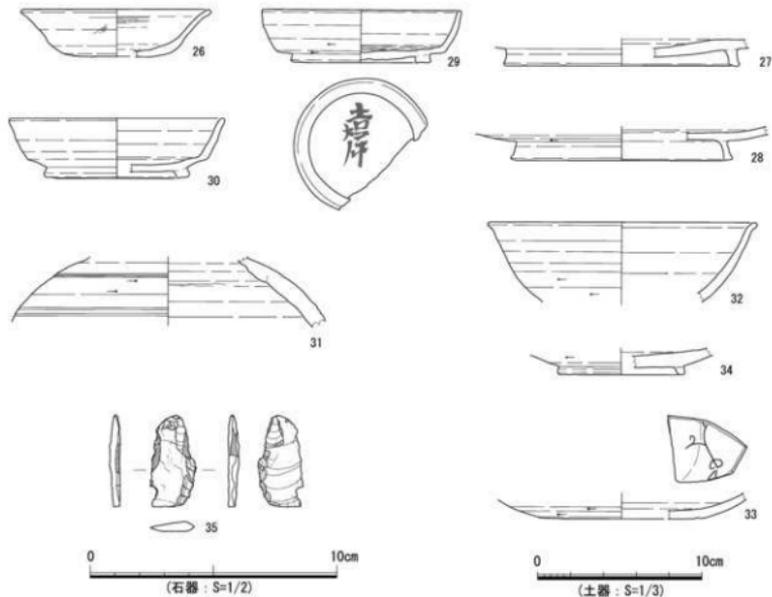


図48 SD39遺物実測図

SD43 (図49)

検出状況 DN11・DN12グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 主軸方位はN-56°-Wで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅0.26m以上、深さ0.05mである。断面形状は浅い皿状で、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土 単層である。堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 土師器2点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 土師器は甕の胴部の小片である。

時期 出土遺物から、古代以降と考えられる。

6 土坑

SK31 (図50)

検出状況 BF4・BF5グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 長軸長1.19m、短軸長1.20m、深さ0.51mであり、平面形は不定形である。北部から東部にかけてテラス状の段を有し、中央部が深くなる。最深部の底部は丸くなる。

埋土 5層に分層した。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器1点、須恵器3点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物 土師器は甕の小片である。須恵器は分類可能なものとして、美濃須恵産IV期第1小期又は第2小期に比定した甕(36)がある。

時期 出土遺物から、8世紀前半以降と考えられる。

SK34 (図50)

検出状況 BF5グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似し、平面形はやや不明瞭であった。

規模・形状 長軸長0.22m、短軸長0.20m、深さ0.10mであり、平面形は不整形である。断面形は半円形で、底面は丸くなる。

埋土 単層である。少量の礫が混じるが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 須恵器1点が底面から出土した。

SD43

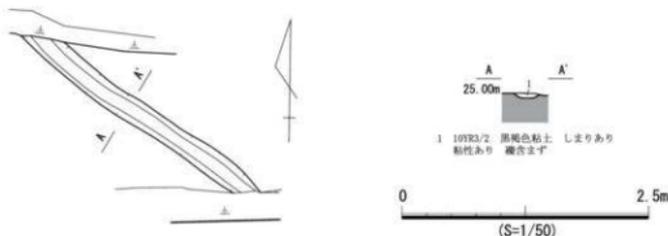


図49 SD43遺構図

出土遺物 37は美濃須衛産Ⅲ期又はⅣ期に比定した甕である。

時期 出土遺物から、8世紀前半以降と考えられる。

SK43 (図50)

検出状況 BG 9 グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 長軸長0.96m、短軸長0.86m、深さ0.51mであり、平面形は隅丸方形である。断面形は概ね逆台形だが、西側壁面は丸立ち上がる。底面は平坦になる。

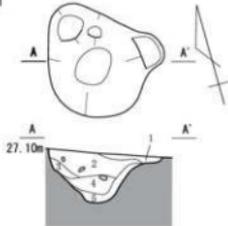
埋土 2層に分層した。層界に凹凸がみられ、埋土中に基盤層ブロックが混じることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器3点、須恵器6点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物 土師器は甕である。小片のため図示しなかった。須恵器は分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅱ期に比定した坏身A類(38)がある。38は口径が推定約9cmと小型である。

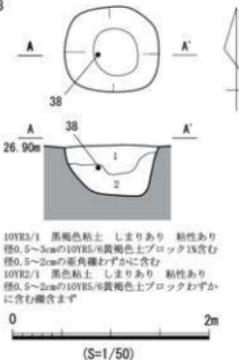
時期 出土遺物から、7世紀前半以降と考えられる。

SK31



- 1 10YR4/2 焼灰色粘土 しまりあり 粘性あり 礫含まず
- 2 10YR2/1 黒色粘土 しまりあり 粘性あり 径1~5cmの円礫を含む
- 3 10YR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 礫含まず
- 4 10YR2/1 黒色粘土 しまりあり 粘性あり 礫含まず
- 5 10YR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 礫含まず

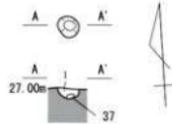
SK43



- 1 10YR3/1 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径0.5~3cmの10YR5/6黄褐色土ブロックを含む
- 2 10YR2/1 黒色粘土 しまりあり 粘性あり 径0.5~2cmの稜角礫わずかに含む

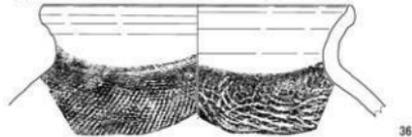
(S=1/50)

SK34



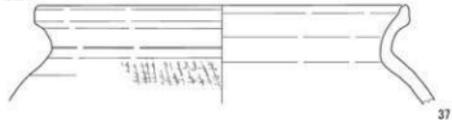
- 1 10YR1/3 に近い黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径0.5~1cm稜角礫を含む

SK31



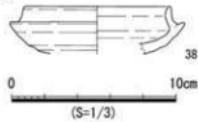
36

SK34



37

SK43



38

(S=1/3)

図50 SK31・34・43遺構図、遺物実測図

SK55 (図51)

検出状況 BG10グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似し、平面形はやや不明瞭であった。他遺構との重複関係は、SA2より新しく、SD4・SK51・SK56等より古い。

規模・形状 長軸長0.97m、短軸長0.64m以上、深さ0.08mであるが、他遺構と重複するため全形は不明である。断面形は浅い皿状で、北側の壁面は直立気味に立ち上がる。底面は広く平坦になる。

埋土 2層に分層した。埋土中に基盤層ブロック土が混じることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 須恵器2点が1層埋土から出土した。

出土遺物 須恵器は分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅲ期に比定した坏身A類(39)がある。39は外面胴部に直線状のヘラ描沈線が施される。

時期 出土遺物から、7世紀前半以降と考えられる。

SK56 (図52)

検出状況 BG10グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、S11・SD4・SK55等より新しく、SK58より古い。

規模・形状 長軸長1.25m以上、短軸長0.92m以上、深さ0.13mである。他遺構と一部重複するが、平面形は概ね不整形と考えられる。断面形は浅い皿状で、底面は広く平坦になる。

埋土 4層に分層した。1層・2層は複雑な堆積状況を示し、焼土ブロックや炭化物が混じる。また、1層・2層と3層との層界には凹凸がみられ、3層にも焼土ブロックや炭化物が混じるため、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器23点、須恵器8点、金属製品1点が、2層・3層から散在して出土した。

出土遺物 土師器は分類可能なものとして、7世紀代から8世紀代の濃尾型長胴甕(40)がある。須恵器は分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅳ期に比定した坏蓋C類(41)、美濃須衛産Ⅳ期第2小期又は第3小期に比定した水瓶(42)、猿投産東山61号窯式又は蝮ヶ池窯式に比定した甕(43)がある。41は内面の摩滅が著しく、墨痕が沈着することから、転用碗として用いられたと考えられる。43は大型の甕で、外面にはヘラ描波状文と3条の平行沈線が施され、内面には回転台を用いた細密なハケ目痕が残る。金属製品は鉄製の角釘(44)である。

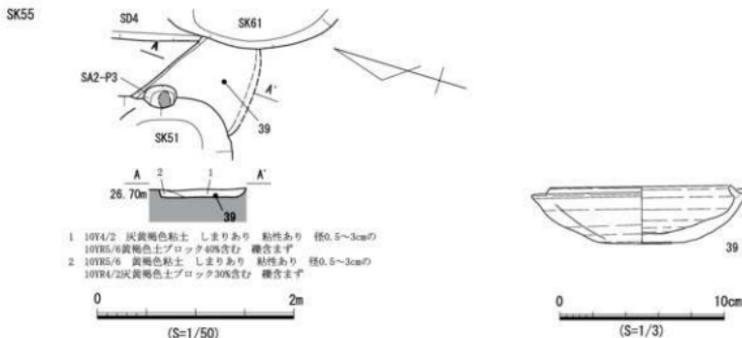


図51 SK55遺構図、遺物実測図

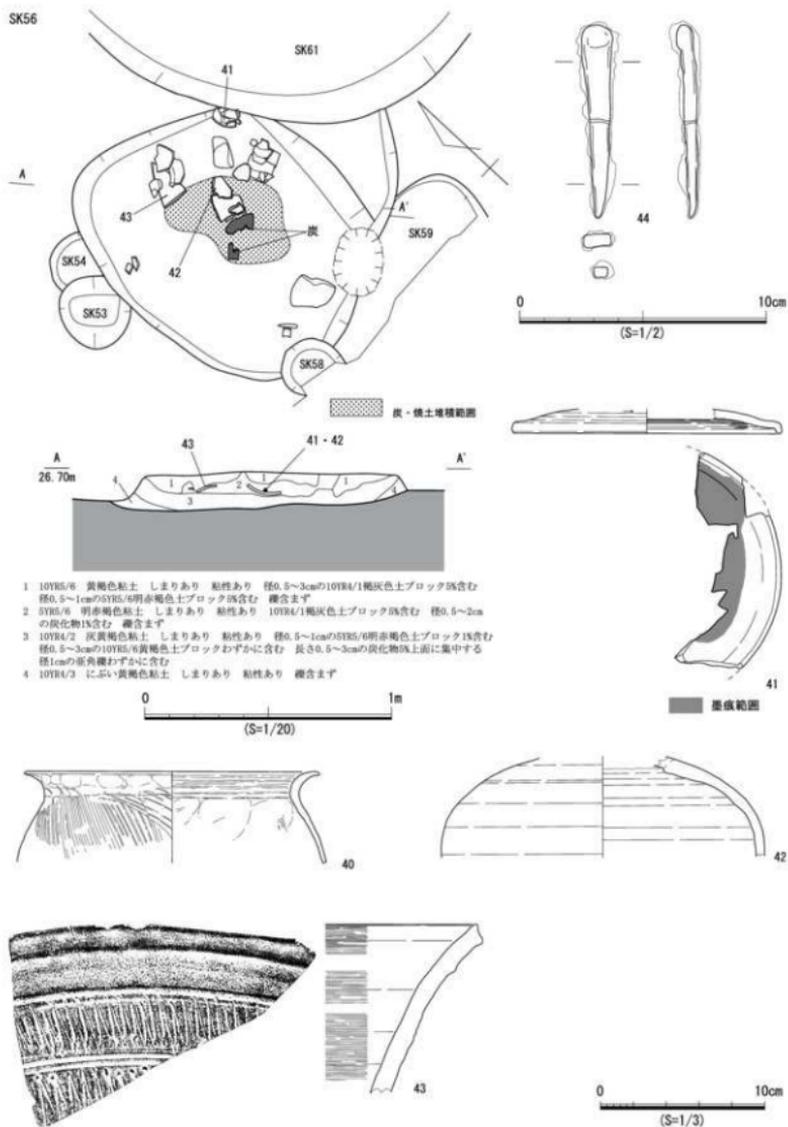


図52 SK56遺構図、遺物実測図

時期 出土遺物から、8世紀以降と考えられる。

SK72 (図53)

検出状況 BG12グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似し、平面形はやや不明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP21より古い。

規模・形状 長軸長0.37m以上、短軸長0.32m、深さ0.08mである。SP21と一部重複するが、平面形は概ね楕円形と思われる。断面形は浅い皿状で、底面は平坦になる。

埋土 単層である。

遺物出土状況 縄文土器2点、土師器2点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物 縄文土器は浅鉢(45)の口縁部である。45は口縁端部上面に工具による刺突列が、口縁部外面には凹線による文様が施され、後期後葉のものと考えられる。土師器は甕の胴部の小片である。

時期 出土遺物から、古代以降と考えられる。

SK88 (図53)

検出状況 BG・BH14グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK87・SK93・SK100等より古い。

規模・形状 長軸長3.52m、短軸長3.20m、深さ0.11mである。攪乱坑によって遺構北部が消失し、南側は発掘区外となるため、全形は不明である。底面は概ね平坦になるが、一部に凹凸がみられる。

埋土 単層である。埋土中に基盤層ブロックと礫を含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器22点、須恵器34点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物 土師器は大半が甕の胴部小片で、分類可能なものとして濃尾型長胴甕の底部(46)がある。46の外部底面には木炭痕が残る。須恵器は分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅲ期に比定した高坏の脚部、Ⅳ期に比定した坏蓋C類、Ⅳ期第2小期に比定した無台盤(47)、Ⅳ期第2小期又は第3小期に比定した有台盤(48)がある。

時期 出土遺物から、8世紀以降と考えられる。

SK132 (図54)

検出状況 BF7グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 長軸長0.81m以上、短軸長0.80m、深さ0.20mであり、平面形は概ね隅丸方形である。断面形は逆台形だが、壁面はやや丸く立ち上がる。底面は平坦になる。

埋土 単層である。埋土中に基盤層ブロックが混じり、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器8点、須恵器2点が出土した。

出土遺物 須恵器は分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅴ期に比定した盤がある。

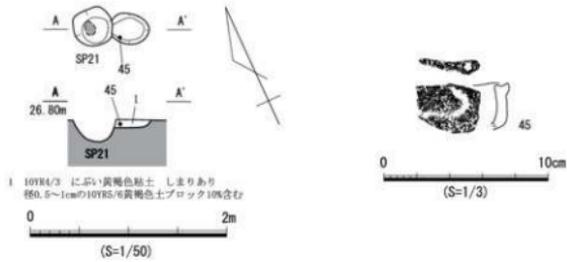
時期 出土遺物から、9世紀以降と考えられる。

SK158 (図54)

検出状況 C12グリッド、1層基底面で検出した。遺構埋土上面に炭化物や焼土ブロックが散布していたが、埋土が基盤層と類似するため平面形は不明瞭であった。特に遺構北部の輪郭が漸移的で不明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK144より新しく、SK142より古い。

規模・形状 長軸長1.42m以上、短軸長1.16m、深さ0.15mである。南北方向に長い楕円形状と思わ

SK72



SK88

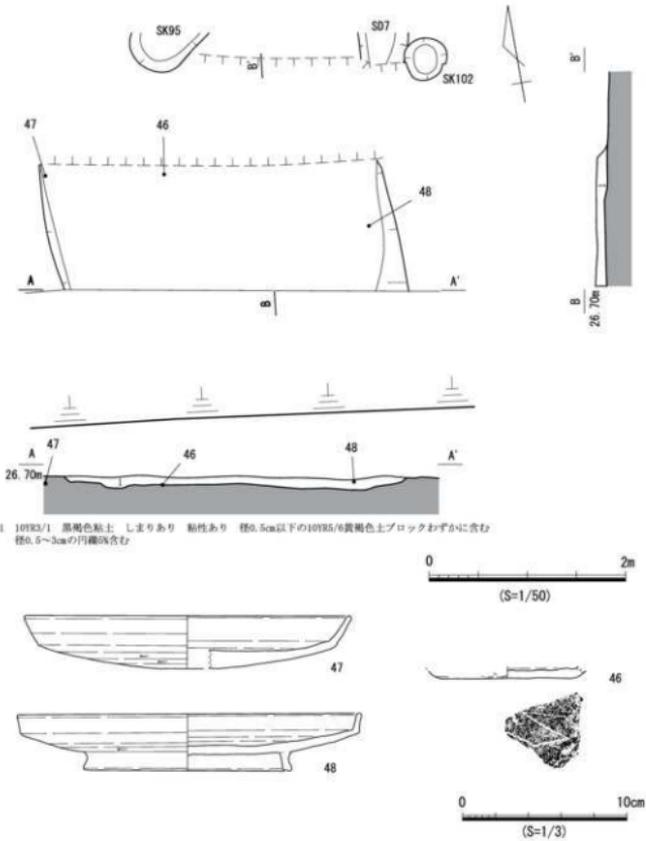
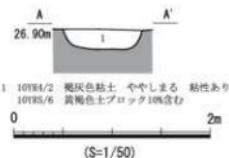
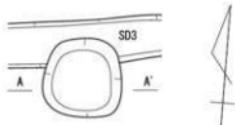
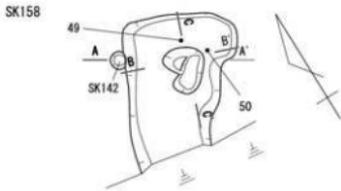


図53 SK72・88遺構図、遺物実測図

SK132



SK158



遺物出土状況図

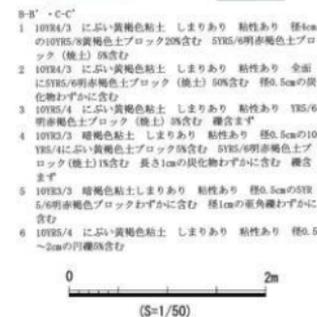
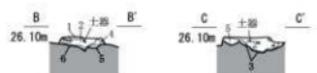
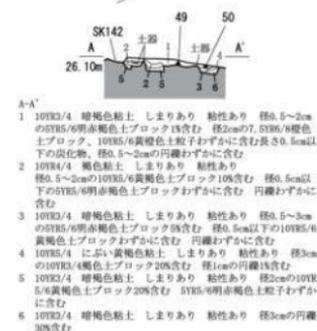
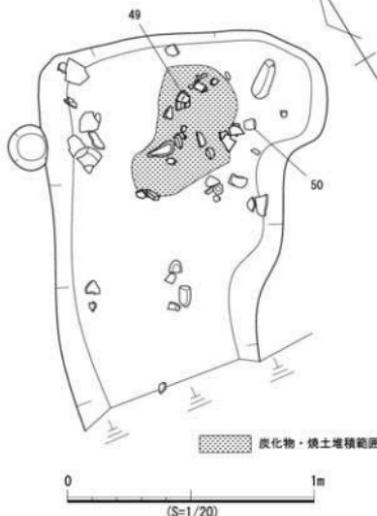


図54 SK132・158遺構図、SK158遺物実測図

れるが、南側が発掘区外に広がるため全形は不明である。底面は概ね平坦になるものの、やや凹凸がみられる。遺構中央部には掘り込みが確認でき、掘り込みの北西部にはテラス状の段がみられる。

埋土 検出面から約0.15m掘り下げた時点で、遺構中央部付近において、炭化物と焼土を多量に含む堆積を確認し、カマドや炉等の存在を想定した。このため、炭化物・焼土堆積範囲をB-B'断面・C-C'断面で四分分割して掘り下げたが、カマドや炉と考えられる焼土堆積や構造物、埋土が面的に被熱・変色している状況は確認できなかった。

遺物出土状況 土師器89点、須恵器3点、灰釉陶器1点が、埋土中から散在して出土した。

出土遺物 土師器は大半が甕の胴部の小片で、分類可能なものとして、7世紀代の丸底甕(49・50)がある。須恵器はいずれも甕の胴部の小片である。灰釉陶器は碗の胴部の小片である。

時期 出土遺物から、9世紀以降と考えられる。

SK165 (図55)

検出状況 CI5グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。検出時に遺構埋土上面で焼土ブロックと炭化物を確認した。

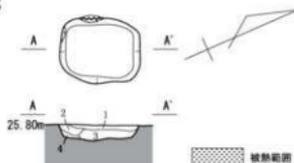
規模・形状 長軸長0.82m、短軸長0.65m、深さ0.16mであり、平面形は隅丸方形である。断面形は浅い皿状で、壁面は直線的に開く。底面は概ね平坦である。完掘後の南壁と西壁で、被熱の痕跡を確認した。

埋土 4層に分層した。埋土中に基盤層ブロックが混じり、人為堆積と考えられる。また、埋土全体に焼土ブロックと炭化物を少量含むが、遺構壁面の被熱の痕跡との関係は不明である。

遺物出土状況 遺物は出土しなかったが、2層から出土した炭化物について、放射性炭素年代測定を行った。

時期 放射性炭素年代測定によって、炭化物の伐採年は679年から771年という結果が出た。このこと

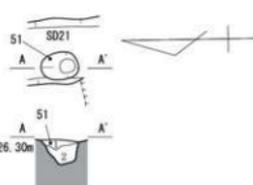
SK165



- 10TR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径0.5~3cmの10TR4/1黒灰色粘土ブロック5%含む 径0.5~2cmの3TR2/6明赤褐色粘土ブロック1%含む 長さ1cmの炭化物1%含む 径0.5~3cmの円礫0%含む
- 10TR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径0.5~2cmの5TR5/6明赤褐色土ブロック1%含む 微細な炭化物わずかに含む 礫含まず
- 10TR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径0.5~2cm以下の炭化物わずかに含む 礫含まず
- 10TR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径0.5cm以下の5TR5/6明赤褐色土ブロックわずかに含む 10TR5/6黄褐色土ブロックわずかに含む 微細な炭化物わずかに含む 礫含まず



SK207



- 10TR4/2 灰褐色粘土 しまりあり 粘性ややあり 径1~2cmの円礫10%含む
- 10TR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10TR5/6黄褐色土ブロック5%含む 径1~5cmの円礫10%含む

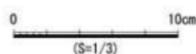


図55 SK165・207遺構図、SK207遺物実測図

から、7世紀後半から8世紀後半以降と考えられる。

SK207 (図55)

検出状況 BK16グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD21より新しい。

規模・形状 長軸長0.38m、短軸長0.28m、深さ0.25mであり、平面形は楕円形である。最深部が南側に寄り、南側の壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。層界に凹凸がみられ、埋土に基盤層ブロックを含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器2点、須恵器3点が出土した。

出土遺物 土師器は甕の胴部である。小片のため図示しなかった。須恵器は分類可能なものとして、美濃須恵産IV期第2小期又は第3小期に比定した無台盤(51)がある。

時期 出土遺物から、8世紀後半以降と考えられる。

SK210 (図56)

検出状況 BK16グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD21より古い。

規模・形状 長軸長0.22m以上、短軸長0.21m以上、深さ0.07mであり、遺構南部が発掘区外に広がるため、平面形の全容は不明である。断面形は半円形で、底面は丸みを帯びる。

埋土 2層に分層した。概ね水平な堆積で、1層に少量の礫が混じるが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 瓦1点が1層と2層の層界付近から出土した。

出土遺物 52は平瓦で表面が摩滅しているが、凹面には布目痕、凸面には縄目痕が確認でき、古代のものと考えられる。

時期 出土遺物から、古代以降と考えられる。

SK234 (図57)

検出状況 BK18グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。検出時に須恵器片が表出していた。他遺構との重複関係は、SK233・SK235より新しい。

SK210

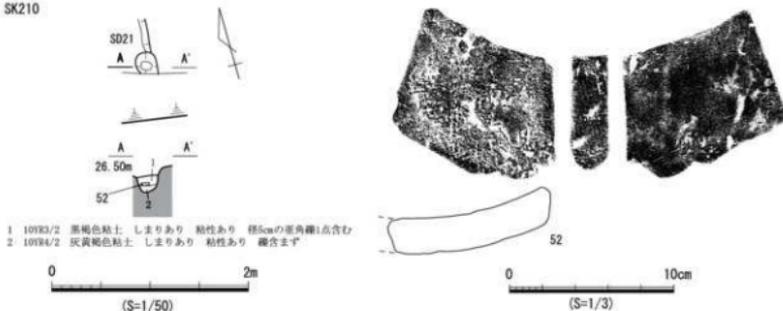


図56 SK210遺構図、遺物実測図

規模・形状 長軸長0.52m、短軸長0.30m、深さ0.21mである。東側が攪乱坑によって消失するが、平面形は概ね楕円形と思われる。断面形は半円形で、底面は丸くなる。

埋土 4層に分層した。中央が窪み堆積でブロック土が含まれないことから、自然堆積と考えられる。

時期 出土遺物から、8世紀後半以降と考えられる。

SK263 (図57)

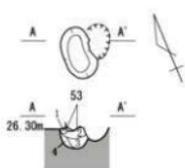
出土遺物 土師器は分類不能な小片である。須恵器は美濃須恵産IV期第2小期又は第3小期に比定した長頭瓶(53)である。

検出状況 CJ17グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似し、平面形はやや不明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK266より古い。

規模・形状 長軸長0.49m、短軸長0.46m、深さ0.89mで、平面形は不整形である。断面形は下層に向かって徐々に細くなる円筒状で、底面が一段深く掘り込まれる。

埋土 5層に分層した。概ね水平な堆積で、基盤層ブロックと礫が少量混じり、人為堆積と考えられる。

SK234

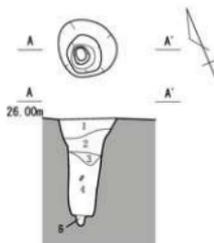


- 1 10YR2/2 暗褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径2cmの円礫少量含む
- 2 10YR2/2 暗褐色粘土 しまりあり 粘性あり 礫含まず
- 3 10YR2/2 暗褐色粘土 しまりあり 粘性あり 礫含まず
- 4 10YR4/1 灰黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 礫含まず



0 10cm
(S=1/3)

SK263



- 1 10YR2/3 暗褐色粘質シルト しまりあり 粘性ややあり 径0.5~2cmの円礫を含む
- 2 10YR4/3 にぶい・黄褐色粘質シルト しまりあり 粘性ややあり 礫含まず
- 3 10YR2/3 暗褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径1cm以下の10YR5/6黄褐色土ブロックわずかに含む
- 4 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト しまりあり 粘性あり 礫含まず
- 5 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト しまりあり 粘性あり 径0.5cm以下の円礫10%含む

0 2m
(S=1/50)

遺物出土状況図



0 1m
(S=1/20)



0 10cm
(S=1/3)

図57 SK234・263遺構図、遺物実測図

遺物出土状況 土師器8点、灰軸陶器2点、山茶碗類1点が出土した。土師器は埋土全体から散在して出土したが、灰軸陶器は5層から出土した。山茶碗(54)は2層から、内面を遺構中央に向けた立位で出土した。

出土遺物 土師器は甕と皿、灰軸陶器は碗で、いずれも小片であった。山茶碗は谷迫間2号窯式に比定した東濃型山茶碗の碗の底部(204)で、内面の摩滅が著しく、内面全体に墨痕があることから転用硯と考えられる。

時期 出土遺物から、12世紀中葉以降と考えられる。

SK269 (図58)

検出状況 CL4グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。検出時に遺構の東辺・南辺では、遺構の輪郭に沿って基盤層上で被熱の痕跡を確認した。当遺構から約1m西に位置するSK271とは、形状や埋土、被熱痕跡などの特徴が類似する。

規模・形状 長軸長1.18m、短軸長0.82m、深さ0.30mで、平面形は隅丸方形である。断面形は逆台形で、南側・北側壁面は急角度で立ち上がりつつ、南面のみ上面がやや外側に開く。底面は広く平坦になる。完掘時に、壁面と底面の全方位で被熱の痕跡を確認した。

埋土 5層に分層した。1層から4層はほぼ水平な堆積で、2層に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。5層は崩落土と考えられる。全層に炭化物、1層・5層に焼土ブロックを含む。

遺物出土状況 土師器1点が1層から出土した。4層から出土した炭化物について、放射性炭素年代測定を行った。

出土遺物 土師器は甕の胴部の小片である。炭化物の放射性炭素年代測定は、577年から647年という結果を得た(第6章2節)。

時期 炭化物の放射性炭素年代測定の結果から、6世紀後半から7世紀後半以降と考えられる。

SK271 (図58)

検出状況 CL4・CM4グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。検出時に遺構の東・南・北辺では、遺構の輪郭に沿って基盤層上で被熱の痕跡を確認した。当遺構から約1m東に位置するSK269とは、形状や埋土、被熱痕跡などの特徴が類似する。

規模・形状 長軸長0.98m、短軸長0.62m、深さ0.28mで、平面形は不整形である。断面形は逆台形で、北側壁面へは垂直に立ち上がり、南側壁面は急角度で立ち上がりつつ上面はやや外側に開く。底面は広く平坦になる。完掘時に、壁面と底面の全方位で被熱の痕跡を確認した。

埋土 5層に分層した。5層に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。4層は崩落土と考えられる。1～3層・5層に炭化物、1層・4層に焼土ブロックを含む。

遺物出土状況 土師器3点、須恵器1点が1層から出土した。4層から出土した炭化物について、放射性炭素年代測定を行った。

出土遺物 土師器はいずれも小片で分類不能である。須恵器は甕の胴部の小片である。炭化物の放射性炭素年代測定は、602年から659年という結果を得た(第6章2節)。

時期 炭化物の放射性炭素年代測定の結果から、7世紀以降と考えられる。

SK293 (図59)

検出状況 C115・CJ15グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、いずれも平

面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SB1・SK292・SK294より新しい。

規模・形状 長軸長1.10m、短軸長0.99m、深さ0.27mで、平面形は円形である。断面形は概ね逆台形だが、北側壁面では段差がみられ、上部は緩やかに立ち上がる。底面は、南側がやや浅くなる。

埋土 2層に分層した。層界に凹凸がみられ、埋土に基盤層ブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 須恵器3点が出土した。

出土遺物 須恵器は皿と甕の小片であるため、図示しなかった。

時期 出土遺物と、本遺構より古いSB1と同時期と考えられるSB3からは、美濃須衛産IV期の須恵器が出土していることから、8世紀以降と考えられる。

SK318 (図59)

検出状況 CJ16グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似し、平面形はやや不明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP45より古い。

規模・形状 長軸長0.35m、短軸長0.30m以上、深さ0.05mである。SP45と一部が重複するが、平面形は概ね円形である。断面形は浅い皿状で、底面は緩やかに丸くなる。

埋土 単層である。埋土中に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 須恵器1点が出土した。

出土遺物 55は美濃須衛産IV期に比定した坏身B類である。口縁端部が欠損する。

時期 出土遺物から、8世紀以降と考えられる。

SK453 (図59)

検出状況 DJ1グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 長軸長0.29m、短軸長0.24m、深さ0.05mであり、平面形は不整円形である。断面形は

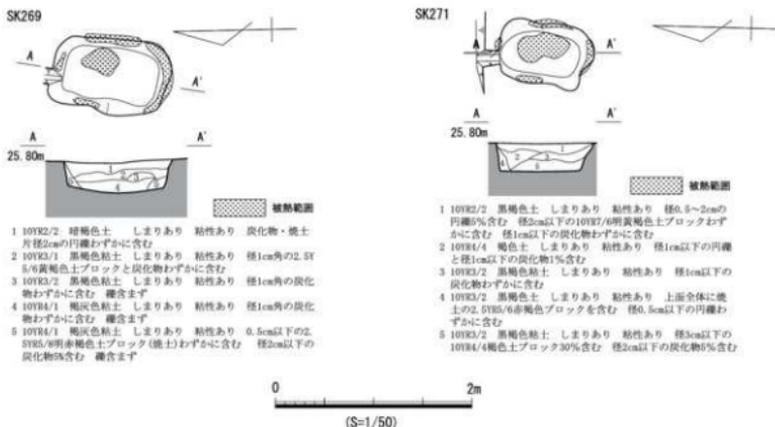


図58 SK269・271遺構図

浅い皿状だが、底面にやや起伏がみられる。

埋土 単層である。少量の礫を含むが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 中国産陶磁器1点が出土した。

出土遺物 56は白磁碗IV-1 a類又はIV-1 b類で、厚めの玉縁状の口縁を有する。

時期 出土遺物から、11世紀後半から12世紀初頭以降と考えられる。

SK512 (図59)

検出状況 DJ3グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似し、平面形はやや不明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK511・SK513・SK515より古い。

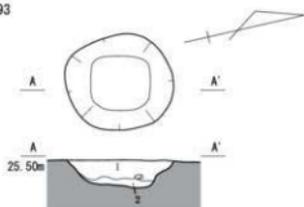
規模・形状 長軸長0.80m以上、短軸長0.65m、深さ0.12mであり、平面形は概ね円形である。断面形は浅い皿状で、底面は平坦になる。

埋土 単層である。炭化物が少量混じる。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 縄文土器1点、瓦1点が埋土中から出土した。

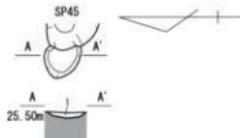
出土遺物 57は縄文時代晩期の深鉢で、幅1cmほどの突帯を貼り付け、その上を押圧する。瓦は平瓦

SK293



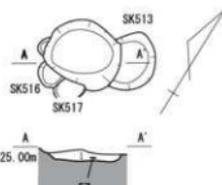
- 1 10YR4/1 褐灰色粘土 しまりあり 粘性あり
径5cmの直角鋸わずかに含む
- 2 10YR4/1 褐灰色粘土 しまりあり 粘性あり
10YR7/6 明黄褐色土ブロック 20%含む

SK318



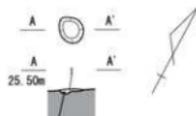
- 1 10YR4/2 灰黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり
10YR7/6 明黄褐色土ブロック 5%含む 径3cmの
円鋸わずかに含む

SK512



- 1 10Y14/1 灰黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり
長さ0.5～2cmの炭化物わずかに含む

SK453



- 1 10YR4/1 褐灰色粘土 しまりあり 粘性あり
径2cm以下の直角鋸 5%含む



SK318



SK453



SK512

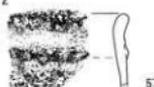


図59 SK293・318・453・512遺構図、SK318・453・512遺物実測図

の小片で、表面の摩滅が著しいが、微かに布目痕が確認できる。

時期 出土遺物から、古代以降と考えられる。

SK597 (図60)

検出状況 DJ3グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK598より古い。

規模・形状 長軸長0.34m、短軸長0.25m以上、深さ0.17mである。SK598と一部が重複するが、概ね楕円形である。壁面は開き気味に傾斜し、底面は丸くなる。

埋土 2層に分層した。2層に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。また、1層・2層ともに炭化物を含む。

遺物出土状況 中国産陶磁器1点が出土した。

出土遺物 58は白磁碗IV-1a類又はIV-1b類で、玉縁状の口縁を有する。

時期 出土遺物から、11世紀後半から12世紀初頭以降と考えられる。

SK619 (図60)

検出状況 DJ4グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

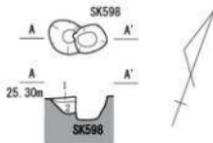
規模・形状 長軸長0.36m、短軸長0.25m、深さ0.11mであり、平面形は楕円形である。断面形は半円形で、底面は丸くなる。

埋土 2層に分層した。埋土に基盤層ブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 山茶碗類1点が1層から出土した。

出土遺物 59は東濃型山茶碗の碗で、尾張型第3型式併行に比定した。

SK597

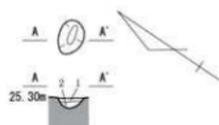


- 10TR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 長さ1cmの炭化物わずかに含む 礫含まず 全面に砂分多量に集積する
- 10TR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10TR7/6 明黄褐色土ブロック 5%含む 長さ1~3cmの炭化物 5%含む 礫含まず



58

SK619



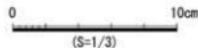
- 10TR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径1~2cmの10TR2/1 黒色土ブロック 1%と径1cmの10TR7/6 明黄褐色土ブロック 5%含む 径0.5~2cmの亜角礫 5%含む
- 10TR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径1cm以下の5TR3/6 明赤褐色土ブロック 5%含む 礫含まず



(S=1/50)



59



(S=1/3)

図60 SK597・619遺構図、遺物実測図

時期 出土遺物から、11世紀末以降と考えられる。

SK694 (図61)

検出状況 DJ6・DJ7グリッド、I層基底面で検出した。堅田古墳の南西に位置する大型の土坑である。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK685・SK686・SK687等より新しく、SK688・SK693より古い。

規模・形状 長軸長5.04m、短軸長3.02m以上、深さ0.57mである。南側が大きく発掘区外に広がるため全形は不明であるが、検出した北側の範囲から、平面形は不整形と考えられる。発掘区内で最深部が確認でき、東西及び北側の壁面にはやや凹凸がみられるものの、概ねなだらかに立ち上がる。

埋土 6層に分層した。1層～4層がほぼ水平に堆積し、層界には凹凸は確認できる。5層・6層は崩落土の可能性がある。埋土全体に亜角礫や基盤層ブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。1層は崩落土と考えられる5層と6層の上に堆積することから、2層以下の埋土と堆積の時期が異なる可能性がある。

遺物出土状況 縄文土器5点、土師器72点、須恵器87点、山茶碗類1点、瓦1点、石製品1点が、埋土中から出土した。山茶碗類は1層から出土したが、それ以外の遺物は1層～3層から散在して出土しており、層位による遺物の時期的な偏りはみられなかった。

出土遺物 縄文土器は深鉢の胴部の小片である。土師器は大半が甕の胴部の小片である。須恵器は大半が甕の胴部の小片で、分類可能なものとして、美濃須衛産IV期第2小期又は第3小期併行に比定した産地不明の坏身C類(60)がある。山茶碗類は胴部の小片で分類不能である。瓦は小片で表面の摩滅が激しく、詳細は不明である。石製品は泥岩製の砥石(61)で、4面に平滑な砥面が確認できる。

時期 図示した遺物以外には山茶碗類が1点のみ出土している。これは1層上部からの出土遺物であり、他の遺物との時期差が大きいため、1層から混入した可能性も考えられるが、埋土の堆積状況から1層の堆積時に入ったものと判断した。このため、2層から出土した60の時期から8世紀後半から機能しており、中世以降に完全に埋没したと考えられる。

SK742 (図62)

検出状況 DJ10グリッド、II層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP121・SK743・SK750等より新しく、SD28・SK748・SK749等より古い。

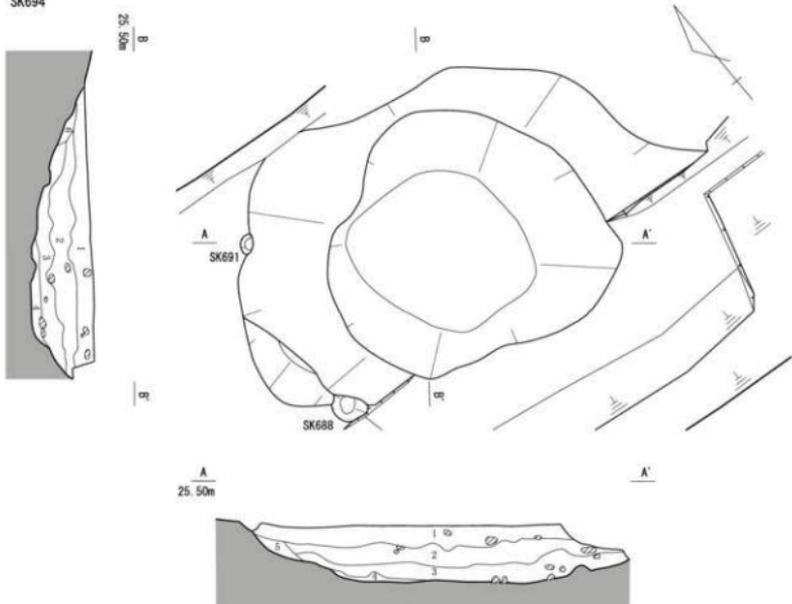
規模・形状 長軸長6.69m、短軸長1.73m以上、深さ0.52mである。南北両側ともに発掘区外に広がるため平面形の全形は不明であるが、検出可能な範囲では北側の東西幅が広くなり、南側は狭くなる。遺構の西側にはテラス状の段を2段有し、東側はテラス状の段を1段有する。遺構の最深部はやや東側に偏り、北側が幅広で南側に向かって狭くなる。底面は概ね平坦になるが、一部に凹凸がみられる。

埋土 6層に分層した。層界には凹凸はみられるが、概ね中央が窪む堆積である。埋土全体に亜角礫を含み、上層にはブロック土が混入するが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器34点、須恵器77点、灰釉陶器7点、山茶碗類2点、瓦1点、鉄製品2点、鉄滓1点が、埋土中から散在して出土した。

出土遺物 土師器の大半は甕の胴部の小片で、分類不能である。須恵器は大半が甕の小片で、分類可能なものとして、美濃須衛産III期に比定した広口壺(62)と高坏(63)、美濃須衛産III期又はIV期に比定した大型の無台盤(64)と提瓶(65)がある。灰釉陶器は碗と皿と瓶類で、分類可能なものとし

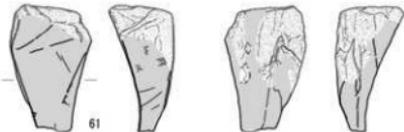
SK694



- 1 10YR/1 黄灰色粘土 しまりあり 粘性あり 種1～5cmの2.5Y5/1 黄灰色土ブロックわずかに含む 種0.5～13cmの亜角礫 25含む 全面に鉄分多量に集積する
- 2 2.5Y/1 黄灰色粘土 しまりあり 粘性あり 種0.5～1cmの10YR5/6 黄褐色土粒わずかに含む 種0.5～10cm 亜角礫 30%含む 全面に鉄分多量に集積する
- 3 2.5Y5/1 黄灰色粘土 しまりあり 粘性あり 種0.5～5cmの10YR5/6 黄褐色土粒 10%含む 種0.5～4cmの亜角礫 1%含む 全面に鉄分少量集積する
- 4 10YR5/6 黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 種0.5～5cmの2.5Y5/1 黄灰色土ブロック 5%含む 種0.5～4cmの炭化物微量を含む 礫含まず 全面に鉄分少量集積する
- 5 2.5YR5/1 黄灰色粘土 しまりあり 粘性あり 種0.5～4cmの10YR5/6 黄褐色土ブロック 20%含む 種2cmの亜角礫わずかに含む 全面に鉄分少量集積する
- 6 2.5YR5/1 黄灰色粘土 しまりあり 粘性あり 種0.5～5cmの10YR5/6 黄褐色土粒ブロック 5%含む 種1cmの亜角礫わずかに含む 全面に鉄分少量集積する



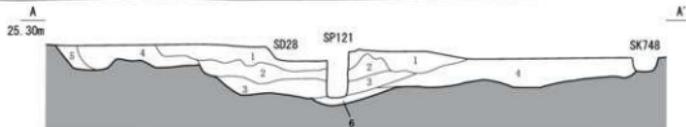
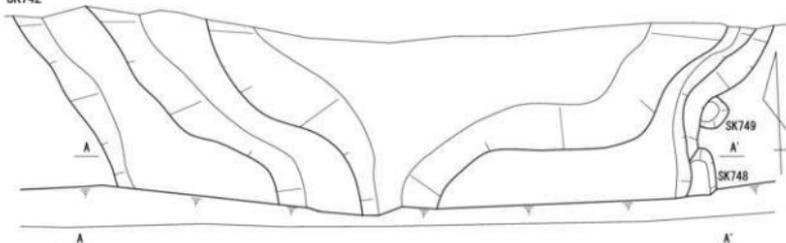
(S=1/50)



(S=1/3)

図61 SK694遺構図、遺物実測図

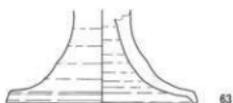
SK742



- 1 10TR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径1～5cmの2.5V4/3オリープ褐色土ブロック1%、径1～17cmの亜角礫5%含む 全面に鉄分多量に集積する
 2 10TR4/2 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径1～5cmの2.5V4/3オリープ褐色土ブロックわずかに含む 径1～5cmの亜円礫5%含む 全面に鉄分集積する
 3 10TR2/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径1～3cmの亜円礫1%含む
 4 10TR4/2 褐色粘土 (やや細かい) しまりあり 粘性あり 径1～5cmの角礫3%含む
 5 10TR4/2 灰黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径0.5～4cmの亜角礫20%含む 全面に鉄分集積する
 6 10TR2/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径1～2cmの亜円礫20%含む



(S=1/50)



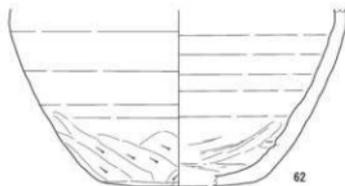
63



65



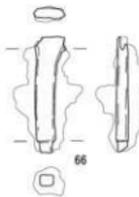
64



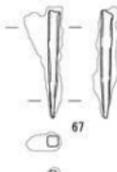
62



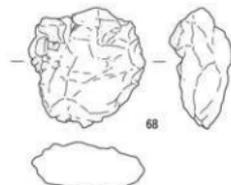
(S=1/3)



66



67



68



(S=1/2)

図62 SK742遺構図、遺物実測図

て、光ヶ丘1号窯式に比定した皿がある。山茶碗類は碗の小片で、分類不能である。鉄製品は短頸鍔(66)と角釘(67)である。68は椀型鉄滓の一部と考えられる。

時期 出土遺物の大半は古代に属するが、山茶碗が3層から出土している。このことから、7世紀代から中世にかけて、長い期間にわたって機能していたと考えられる。

SK816 (図63)

検出状況 EJ1グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK815より新しい。

規模・形状 長軸長0.24m、短軸長0.10m以上、深さ0.09mである。遺構北部が発掘区外となるため、全形は不明である。断面形は半円形で、底面は丸くなる。

埋土 単層である。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土製品1点が埋土中から出土した。

出土遺物 69は瓶の把手である。

時期 出土遺物から、古代と考えられる。

SK838 (図63)

検出状況 EK2・EK3グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK839・SK568より新しい。

規模・形状 長軸長0.71m、短軸長0.65m、深さ0.43mであり、平面形は隅丸方形である。南側の壁面上部は垂直気味に立ち上がるが、北側の壁面は傾斜して開く。最深部は遺構の中央で、底面は丸くなる。

埋土 3層に分層した。概ね水平な堆積で基盤層ブロックを含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器23点、須恵器2点が出土した。土師器は全層から出土しているが、遺構底部付近から、須恵器の蓋2点が出土した。70は西側壁面付近で、角礫を背に立てかけるように横位で置かれていた。また、蓋内面には別の礫が置かれていた。71はほぼ完形で、逆位で出土した。

出土遺物 出土した土師器の大半は同一の甕(72)の破片であった。72はつまみ上げ状の口縁端部をもつ丸底甕で、6世紀後半から7世紀前半のものと考えられる。胴部内面には横方向、外面には斜め方向のハケ調整を施す。70は美濃須衛産Ⅲ期前半に比定した坏蓋A類、71は産地不明の畿内系の坏蓋A類で、美濃須衛産Ⅲ期前半併行に比定した。

時期 出土遺物とその出土状況から、7世紀中葉と考えられる。

SK882 (図64)

検出状況 EK6グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 長軸長0.25m、短軸長0.20m、深さ0.07mであり、平面形は楕円形である。断面形は浅い皿状で、底面は平坦になる。

埋土 2層に分層した。概ね水平な堆積で、基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 須恵器1点が出土した。

出土遺物 須恵器は美濃須衛産Ⅲ期に比定した坏蓋A類(73)である。

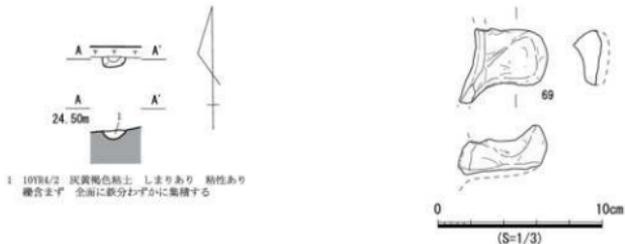
時期 出土遺物から、7世紀以降と考えられる。

SK891 (図64)

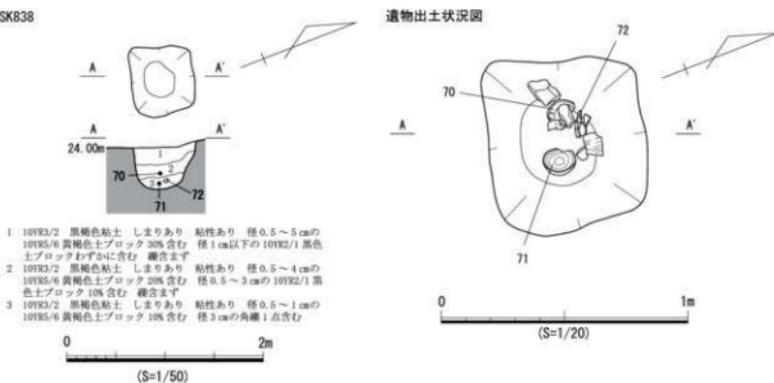
検出状況 EK 6 グリッド、I 層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 長軸長0.43m、短軸長0.32m、深さ0.27mであり、平面形は楕円形である。東側にテラス状の段を有し、最深部は西側に寄る。底面は丸くなる。

SK816



SK838



遺物出土状況図

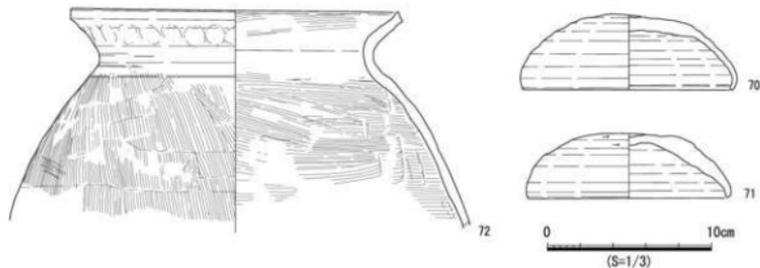
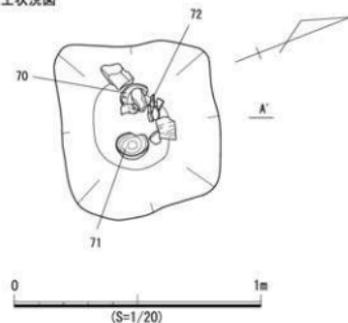


図63 SK816・838遺構図、遺物実測図

埋土 4層に分層した。2層・3層に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器2点、須恵器2点が出土した。

出土遺物 土師器は皿と甕、須恵器は皿と坏身である。いずれも小片のため図示しなかった。

時期 出土遺物から、古代以降と考えられる。

SK894 (図64)

検出状況 EK 6グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 長軸長0.42m、短軸長0.22m、深さ0.23mであり、平面形は楕円形である。底面には西側と東側の2か所に掘り込みが確認でき、西側の掘り込み底面が最深部となる。底面はいずれも丸くなり壁面は垂直気味に立ち上がる。

埋土 3層に分層した。全ての層に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 須恵器1点、中国産陶磁器1点が埋土中から出土した。

出土遺物 須恵器は器種不明の胴部、中国産陶磁器は白磁碗の胴部である。いずれも小片のため図示しなかった。

時期 出土遺物から、古代以降と考えられる。

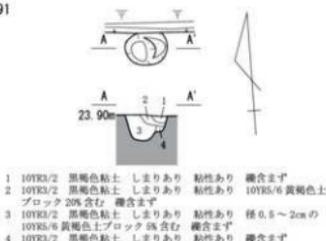
SK905 (図65)

検出状況 EK 7グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似し、平面形はやや不明瞭であ

SK882



SK891



SK894

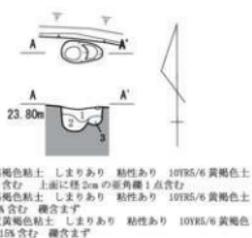


図64 SK882・891・894遺構図、SK882遺物実測図

った。他遺構との重複関係は、SK903・SK904・SK906より古い。

規模・形状 長軸長0.35m、短軸長0.33m以上、深さ0.21mであり、平面形は不整形である。断面形は逆台形で、壁面は傾斜して開く。底面は平坦になる。

埋土 2層に分層した。

遺物出土状況 土師器3点、須恵器1点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物 土師器は甕の胴部、須恵器は美濃須衛産IV期に比定した甕の底部である。いずれも小片のため図示しなかった。

時期 出土遺物から、8世紀以降と考えられる。

SK928 (図65)

検出状況 EK 8グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP190より新しい。

規模・形状 長軸長0.47m、短軸長0.15m、深さ0.28mである。遺構北部が発掘外に広がるため、平面形は不明である。東部壁面の傾斜は緩やかだが西部はほぼ垂直に立ち上がり、底面は丸みがある。

埋土 単層である。基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器4点、山茶碗類1点が埋土中から出土した。山茶碗類はほぼ完型の小碗(74)で、底部付近から逆位で出土した。

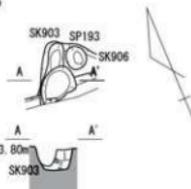
出土遺物 土師器は甕の胴部である。小片のため図示しなかった。山茶碗類は尾張型第4型式に比定した小碗(74)である。

時期 出土遺物から、12世紀中葉以降と考えられる。

SK931 (図66)

検出状況 EK 8グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP15・SP39・SP41等より新しい。

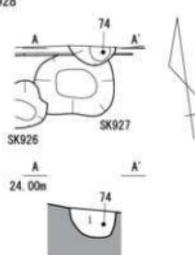
SK905



- 1 10YR5/6 黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり
10YR4/2 灰黄褐色土ブロック 20% 含む
礫含まず
- 2 10YR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり
上面に径 6cm の硬角礫 1点含む



SK928



- 1 10YR4/1 暗灰色粘土 しまりあり 粘性あり
10YR5/6 黄褐色土ブロック 既含む 礫含まず

遺物出土状況

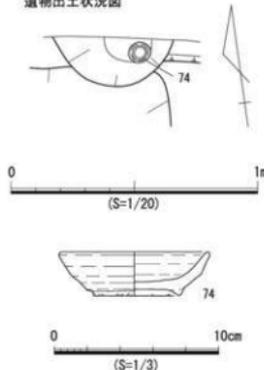


図65 SK905・928遺構図、SK928遺物実測図

規模・形状 長軸長1.74m、短軸長0.83m以上、深さ0.15mである。北側が発掘区外となるため、全形は不明だが、検出した範囲では隅丸方形である。断面形は浅い皿状で、底面は広く平坦になる。東側の壁面は緩やかに立ち上がるが、西側壁面の立ち上がりは急である。

埋土 2層に分層した。概ね水平な堆積で、基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器23点、須恵器3点、灰軸陶器2点が埋土中から出土した。土師器と須恵器は散在して出土したが、灰軸陶器2点は1層と2層の層界付近から出土した。

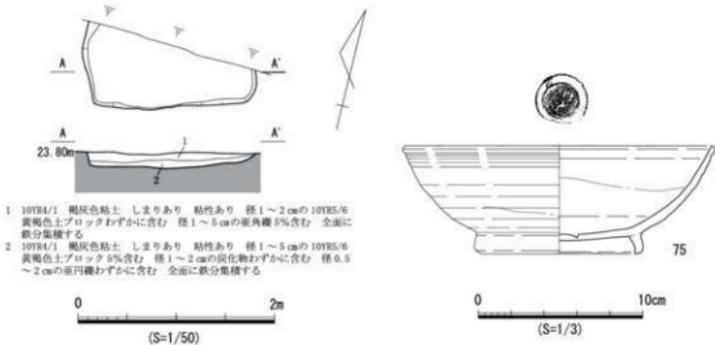
出土遺物 土師器は大半が甕の胴部、須恵器は甕と壺の胴部である。いずれも小片のため図示しなかった。灰軸陶器は光ヶ丘1号窯式に比定した碗(75)である。75は玉縁状の口縁をもち、内面底部に径約3cmの円形沈線が施される。

時期 出土遺物とその出土状況から、9世紀中葉から後葉と考えられる。

SK950 (図67)

検出状況 EK12グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であ

SK931



遺物出土状況図

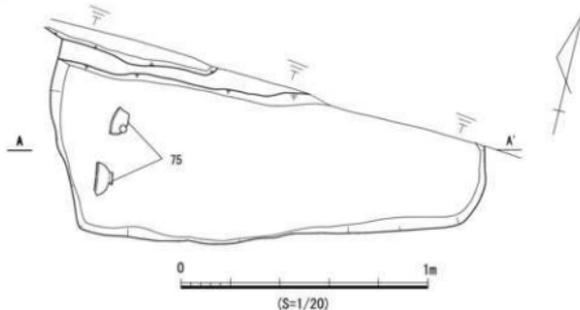


図66 SK931遺構図、遺物実測図

った。他遺構との重複関係は、SP44・SK951より新しい。

規模・形状 長軸長0.47m、短軸長0.47m、深さ0.07mであり、平面形は円形である。断面形は浅い皿状で、底面は平坦になる。

埋土 2層に分層した。基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器3点、須恵器1点が全て1層から出土した。須恵器(76)は正位で遺構の西縁から出土した。また、この須恵器の南側と東側に角礫が1点ずつ、須恵器に重ならない程度の距離で出土した。

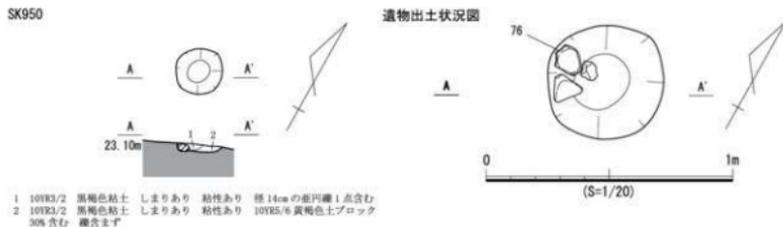
出土遺物 土師器は甕の胴部である。小片のため図示しなかった。須恵器は美濃須衛産IV期第2小期又は第3小期に比定した碗(76)である。

時期 出土遺物とその出土状況から、8世紀中葉から後葉と考えられる。

SK974 (図67)

検出状況 DM2グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であ

SK950



SK974

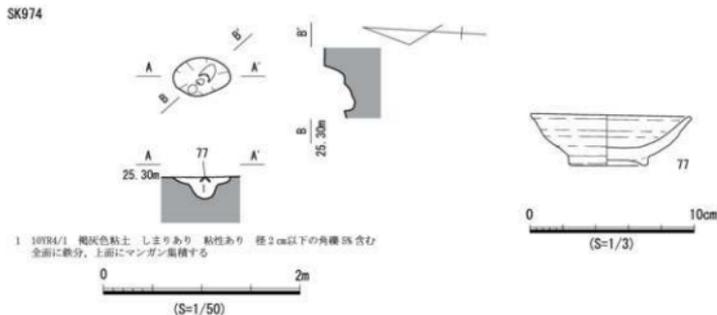


図67 SK950・974遺構図、遺物実測図

った。

規模・形状 長軸長0.47m、短軸長0.43m、深さ0.22mであり、平面形は楕円形である。南東部にテラス状の段を有し、最深部は北西側に偏る。

埋土 単層である。埋土中に角礫を含むが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器2点、須恵器1点が埋土中から散在して出土し、山茶碗類1点が1層上部から出土した。

出土遺物 土師器は器種不明の胴部、須恵器は甕の胴部である。いずれも小片のため図示しなかった。山茶碗類は尾張型第4型式の小碗(77)である。

時期 出土遺物から、12世紀中葉以降と考えられる。

SK982 (図68)

検出状況 DN3グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 長軸長0.28m、短軸長0.28m、深さ0.16mであり、平面形は円形である。断面形は半円形だが、北側の壁面は垂直気味に立ち上がる。

埋土 2層に分層した。2層に多量の基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器2点、須恵器1点、中国産陶磁器1点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物 土師器は甕の胴部の、須恵器は壺の頸部である。いずれも小片のため図示しなかった。中国産陶磁器はIV類の白磁皿(78)である。

時期 出土遺物から、11世紀後半以降と考えられる。

SK985 (図68)

検出状況 DN3グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK986より古い。

規模・形状 長軸長0.67m、短軸長0.55m以上、深さ0.12mであり、平面形は楕円形である。断面形は半円形で、底面は丸くなる。

埋土 7層に分層した。4層～7層に炭化物を含み、4層の含有率はやや多い。3～7層に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器2点が埋土中から出土した。

出土遺物 土師器は器種不明である。小片のため図示しなかった。

時期 出土遺物から、古代以降と考えられる。

SK986 (図68)

検出状況 DN3・DN4グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、焼土が遺構の輪郭を囲っているため、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK985より新しい。

規模・形状 長軸長0.75m、短軸長0.69m以上、深さ0.24mであり、平面形は隅丸方形である。底面は平坦だが南側にわずかに窪み、北側壁面へは垂直に立ち上がる。南側壁面は、発掘区南側壁面に遮られ明確ではないが、底面の少し窪んだ部分から急角度で立ち上がる。遺構の完掘時に、南西角付近と北～東面の壁面で被熱の痕跡を確認した。

埋土 6層に分層した。3層・6層に炭化物を含み、6層の含有率は顕著である。1層・3層に基盤層

ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器1点が埋土中から出土した。

出土遺物 土師器は器種不明である。小片のため図示しなかった。

時期 出土遺物から、古代以降と考えられる。

SK997 (図69)

検出状況 DN 4・DN 5 グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

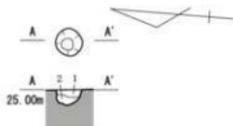
規模・形状 長軸長0.56m、短軸長0.38m以上、深さ0.16mである。南側が発掘区外となるため全形は不明だが、検出可能な範囲では、平面形は概ね円形である。断面形は半円形で、底面は緩やかに丸くなる。

埋土 3層に分層した。埋土全体に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 縄文土器1点、土師器2点、須恵器7点が埋土中から散在して出土した。

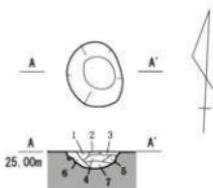
出土遺物 79は縄文時代晩期の深鉢の底部である。土師器は器種不明、須恵器は甕と坏身の胴部である。小片のため図示しなかった。

SK982



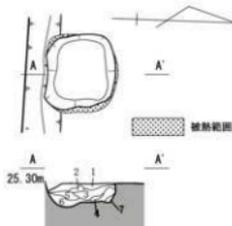
- 1 10YR4/1 焼灰色粘土 しまりあり 粘性あり 礫含まず 全面に鉄分集積する
- 2 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト しまりあり 粘性あり 10YR5/6 明黄褐色土ブロック 40%含む 礫含まず

SK985



- 1 10YR4/1 焼灰色粘質シルト しまりあり 粘性あり 礫含まず
- 2 10YR6/6 明黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 礫含まず
- 3 10YR4/1 焼灰色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR5/6 明黄褐色土ブロック 10%含む 礫含まず
- 4 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト しまりあり 粘性あり 10YR5/6 明黄褐色土ブロック 10%含む 径0.5cmの炭化物のみ含む
- 5 10YR4/1 焼灰色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR5/6 明黄褐色土ブロック 1%含む 径1cmの炭化物わずかに含む 礫含まず
- 6 10YR4/1 焼灰色粘土 しまりあり 粘性あり 径1cmの炭化物わずかに含む
- 7 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト しまりあり 粘性あり 10YR5/6 明黄褐色土ブロック 40%含む 径1cm以下の炭化物わずかに含む

SK986



- 1 10YR4/1 焼灰色粘土 しまりあり 粘性あり 径1cm以下の10YR5/6 明黄褐色土ブロックわずかに含む 礫含まず
- 2 10YR4/1 焼灰色粘土 しまりあり 粘性あり 径2cm以下の10YR5/6 明黄褐色土ブロックのみ含む 径1cm以下の炭化物わずかに含む 礫含まず
- 3 10YR3/2 黒褐色粘土 ややしまる 粘性あり 礫含まず
- 4 10YR4/1 焼灰色粘土 しまりあり 粘性あり 礫含まず
- 5 10YR4/1 焼灰色粘土 ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の円炭のみ含む 径3cm以下の炭化物 30%含む
- 6 10YR4/2 灰黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 礫含まず
- 7 10YR4/2 灰黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 礫含まず

図68 SK982・985・986遺構図、SK982遺物実測図

時期 出土遺物から、古代以降と考えられる。

SK1135 (図69)

検出状況 EK 5 グリッド、SD41完掘後の底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 長軸長0.23m、短軸長0.22、深さ0.18mで、平面形は正円形である。壁面はほぼ垂直に掘り込まれ、最深部が西に偏る。

埋土 単層である。亜角礫を含むが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器2点、金属製品1点が埋土中から出土した。

出土遺物 土師器は甕の胴部である。小片のため図示しなかった。金属製品は鉄製の角釘(80)で、頭部が欠損している。

時期 出土遺物から、古代以降と考えられる。

SK1136 (図70)

検出状況 DJ 4 グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 長軸長0.26m、短軸長0.24m、深さ0.28mで、平面形は円形である。断面形は逆台形で、底面は平坦である。

埋土 3層に分層した。2層と3層に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 山茶碗類1点が、1層と2層の層界付近から逆位で出土した。

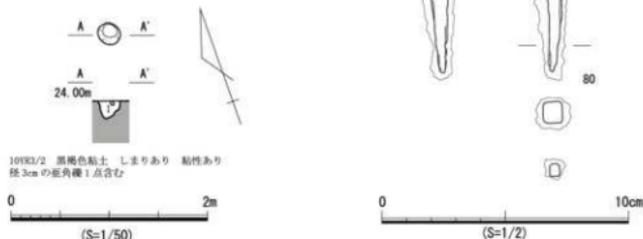
出土遺物 山茶碗類は谷迫間2号窯式に比定した東濃型の碗(81)である。

SK997



- 1 10TR4/1 焼灰色粘土 ややしまる 粘性あり
10TR5/6 黄褐色土ブロックわずかに含む
径2cmの片礫少量含む 全面に散在集積する
- 2 10TR4/1 焼灰色粘土 しまりあり 粘性あり
10TR5/6 黄褐色土ブロック40%含む 礫含まず
- 3 10TR4/1 焼灰色粘土 しまりあり 粘性あり
10TR5/6 黄褐色土ブロック10%含む 礫含まず

SK1135



- 1 10TR2/2 黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり
径3cmの亜角礫1点含む

図69 SK997・1135遺構図、遺物実測図

時期 出土遺物から、12世紀後半以降と考えられる。

SK1139 (図70)

検出状況 EK 7 グリッド、I 層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK895より新しい。

規模・形状 長軸長0.23m、短軸長0.21m、深さ0.39mで、平面形は不整形である。壁面はほぼ垂直で、底面は半円形である。

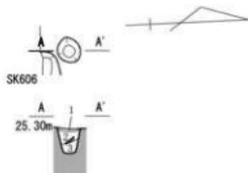
埋土 単層である。礫やブロック土を含まず、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器1点、石器1点が埋土中から出土した。

出土遺物 土師器は甕の胴部である。小片のため図示しなかった。石器は砂岩製の敲石(82)で、一面にのみ敲打痕が確認できる。全体が被熱し、赤褐色に変色している。

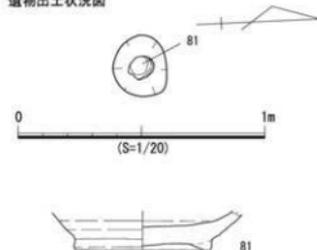
時期 出土遺物から、古代以降と考えられる。

SK1136

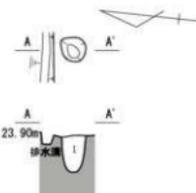


- 1 10YR4/1 黄灰色粘土 しまりあり 粘性あり
径1~3cmの磁石礫1%含む
- 2 10YR4/1 黄灰色粘土 しまりあり 粘性あり
- 3 10YR5/6 黄褐色土ブロック10%含む
10YR4/1 黄灰色粘土 ややしまる 粘性あり
10YR5/6 黄褐色土ブロック5%含む

遺物出土状況図



SK1139



- 1 10YR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 礫含まず

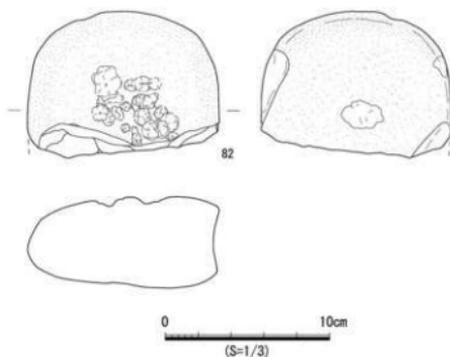


図70 SK1136・1139遺構図、遺物実測図

第3節 中世の遺構と遺物

1 柵

SA5 (図71)

検出状況 DJ3・DJ4グリッド、I層基底面でP1～P6を検出した。いずれも平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP92・SK583より新しく、SP83・SK1142より古い。

規模・形状 東西方向に6基の柱穴が直線上に並ぶことから柵とした。方位がN-65°-W、柱間は1.0m～1.9m、東西長5.9mである。東側、西側ともに、発掘区外へ広がる可能性がある。

柱穴 柱穴の平面形は円形若しくは不整形円で、径は0.2～0.5m、深さは0.04～0.54mである。P3、P6では柱痕跡を確認した。

遺物出土状況 P3から土師器1点と山茶碗類3点、P6から土師器9点、須恵器1点、山茶碗類4点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 土師器と須恵器は小片のため分類不能である。山茶碗類では分類可能なものとして、P3出土の尾張型第3型式の碗、谷迫間2号窯式に比定した小碗(83)、P6出土の尾張型第5型式の碗がある。

時期 出土遺物から、中世前期と考えられる。

SA6 (図72)

検出状況 DJ4・DJ5グリッド、I層基底面でP1～P7を検出した。いずれも平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP100・SP102より新しく、SP111・SK627・SK636等より古い。

規模・形状 東西方向に7基の柱穴が直線上に並ぶことから柵とした。方位がN-73°-E、柱間は1.1m～1.9m、東西長7.9mである。東側、西側ともに、発掘区外へ広がる可能性がある。

柱穴 柱穴の平面形は円形若しくは不整形円で、径は0.27～0.68m、深さは0.07～0.57mである。P5では柱痕跡、P4では柱あたりを確認した。

遺物出土状況 P2から山茶碗類3点、P3から山茶碗類2点、P4から土師器7点、山茶碗類4点、P6から山茶碗類1点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 土師器は甕である。小片のため図示しなかった。山茶碗類では分類可能なものとして、P2出土の尾張型第4型式の小碗(84)、P6出土の尾張型第4型式又は第5型式の碗がある。

時期 出土遺物から、中世前期と考えられる。

2 溝状遺構

SD2 (図73・74)

検出状況 BF5～BF7グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK35より古い。本遺構の南側に、SD3が並行する。

規模・形状 発掘区内でほぼ直角に屈曲し、遺構の両端は発掘区外に延びる。方位は、南北方向の直線部分はN-1°-E、屈曲部分から東端までの直線部分はN-77°-Eである。幅0.98m、深さ0.20mで、内側の壁面は外側に比べて緩やかで、底面は丸みを帯びる。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土 3層に分層した。1・2層埋土中に長さ0.5cm～10cmの多量の礫とIV層(基盤層)ブロックを含む

SA5

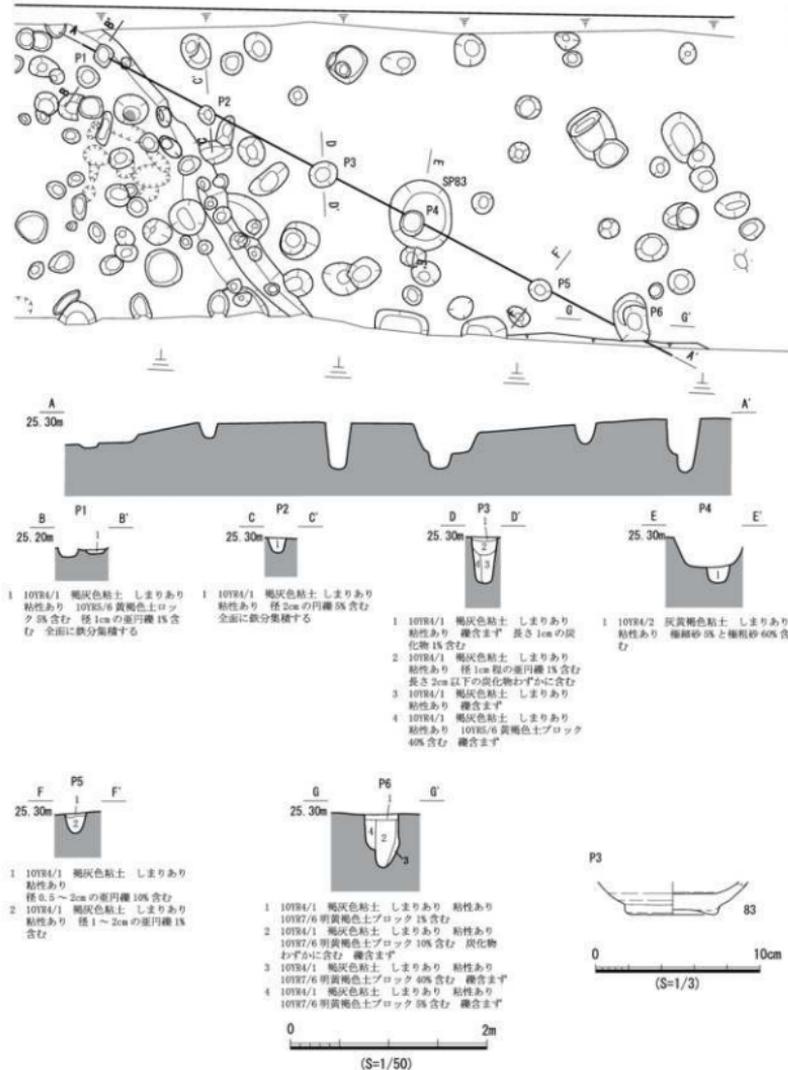
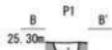
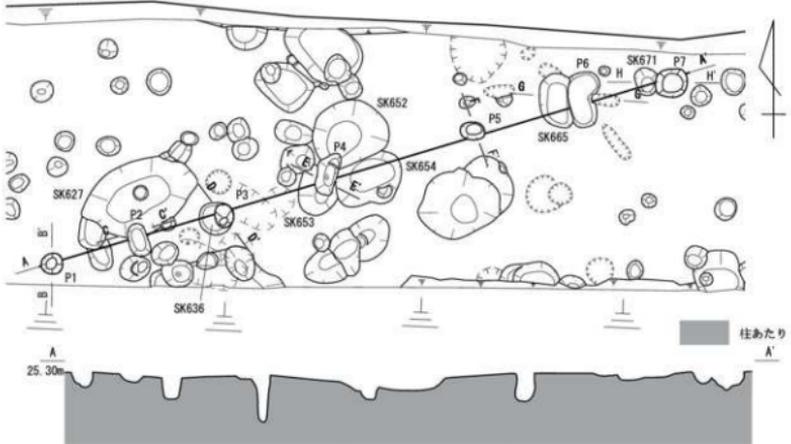
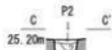


図71 SA5 遺構図、遺物実測図

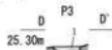
SA 6



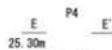
- 1 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 礫含まず



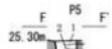
- 1 10YR5/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 5% 含む 長さ 0.5 ~ 1cm の炭化物わずかに含む 径 1cm の黒円礫わずかに含む
- 2 10YR1/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR7/6 明黄褐色土ブロック わずかに含む 長さ 0.5 ~ 1cm の炭化物わずかに含む 礫含まず
- 3 10YR1/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 3% 含む 礫含まず



- 1 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 7.5YR5/6 明黄褐色土ブロック 1% 含む 長さ 0.5 ~ 1cm の炭化物わずかに含む 礫含まず
- 2 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR5/6 黄褐色土ブロック 5% 含む 礫含まず
- 3 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR5/6 黄褐色土ブロック わずかに含む 長さ 0.5cm の炭化物わずかに含む



- 1 10YR5/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり SK65/6 明黄褐色土ブロック わずかに含む 10YR7/6 明黄褐色土ブロック わずかに含む 長さ 0.5cm の炭化物わずかに含む 径 4cm の円礫 5% 含む
- 2 10YR6/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 礫含まず



- 1 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径 0.5 ~ 3cm の黒角礫 5% 含む
- 2 10YR7/6 明黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR4/1 褐色粘土ブロック 20% 含む 礫含まず
- 3 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 礫含まず
- 4 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 50% 含む 礫含まず



- 1 10YR4/2 灰黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 10% 含む 長さ 1cm 以下の炭化物と黒角礫わずかに含む 径 0.5 ~ 5cm の黒角礫 5% 含む



- 1 10YR4/2 灰黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 5% 含む 径 0.5 ~ 7cm の黒角礫 5% 含む
- 2 10YR7/6 明黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR4/2 灰黄褐色土ブロック 20% 含む 径 3cm の黒角礫 5% 含む

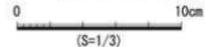
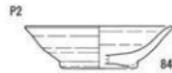


図72 SA 6 遺構図、遺物実測図

む。流水を示す堆積は確認できなかった。1層・2層埋土中の礫は円礫と垂角礫で、被熱したものが混じり、場所によって密度が異なる。1層・2層は、3層堆積後の人為的な堆積と考えられる。

遺物出土状況 1・2層埋土中から、土師器6点、須恵器9点、山茶碗類6点、常滑産陶器2点、渥美産陶器1点、石製品3点が散在して出土した。

遺物 土師器は大半が甕の胴部、須恵器は瓶類と甕の胴部で、いずれも小片である。山茶碗類は、美濃須衝産では尾張型第4型式併行に比定した碗(85)、尾張型第5型式併行に比定した碗(86)、尾張型では第4型式の碗と小碗がある。常滑産陶器は6型式又は7型式の甕である。渥美産陶器は火舎香炉の蓋(87)である。蓮弁文と心葉形の煙出しを施し、摘みをもつと考えられる。石製品は砂岩製の凹石(88)と砥石(89・90)である。88は敲打による凹みが4箇所に確認できる。全体が被熱し、破砕している。89と90はいずれも隣合う2面に砥面をもつ。

時期 出土遺物から、14世紀後葉以降と考えられる。

SD3 (図73・74)

検出状況 BF6・BF7グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK37より新しい。本遺構の北側に、SD2が並行する。

規模・形状 遺構の南端は発掘区外に延びる。主軸方位はN-80°-Eで、幅0.47m、深さ0.07mであり、断面形状は浅い皿状で、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土 単層である。礫とIV層(基盤層)ブロックが混じる。流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 SD2と隣接して並行することから、14世紀後葉以降と考えられる。

SD9 (図75)

検出状況 BH17グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD12より新しい。当遺構の南側に隣接するSD10は、同一遺構の可能性はあるが、遺構埋土と掘方の形状が異なるため、別遺構と判断した。

規模・形状 主軸方位はN-4°-Wで、遺構の北端は発掘区外に延びる。幅0.43m、深さ0.20mである。壁面の傾斜は東西で異なり、東側は緩やかだが、西側は急である。底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土 3層に分層した。埋土全体にIV層(基盤層)ブロックが混じり、人為堆積と考えられる。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

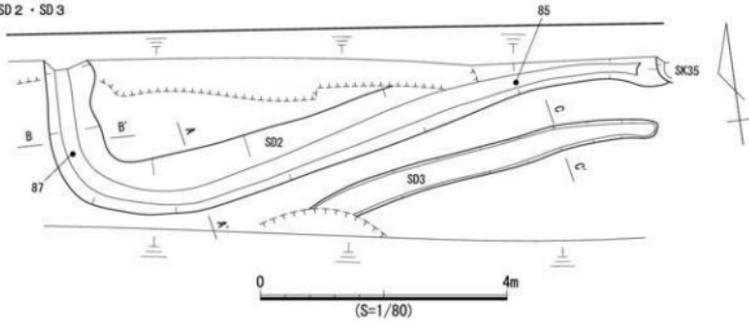
時期 当遺構より古いSD12から尾張型第5型式の山茶碗が出土したことから、12世紀後葉以降と考えられる。

SD12 (図75)

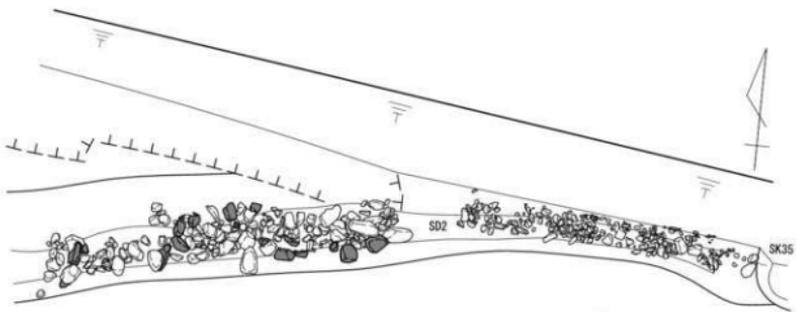
検出状況 BG17・BH17グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD9・SK114より古い。SD9とは位置関係から同一遺構の可能性が考えられるが、掘方の形状と遺構埋土が異なることから、別遺構と判断した。

規模・形状 主軸方位はN-2°-Wで、遺構の北端は発掘区外に延びる。幅0.75m、深さ0.39mで

SD 2・SD 3



SD 2 掘出土状況図 1



SD 2 掘出土状況図 2



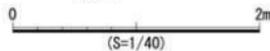
SD 2



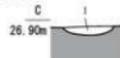
- 1 10Y4/1 瓶灰色粘土 しまりあり
粘性あり 径0.5~1cmの10YR5/6
黄褐色土ブロック10%含む 径0.5
~10cmの亜角礫30%含む
- 2 10YR4/1 瓶灰色粘土 しまりあり
粘性あり 10YR5/6黄褐色土ブロッ
ク20%含む 径0.5~10cmの亜角礫
30%含む
- 3 10YR4/2 灰黄褐色粘土 しまりあり
粘性あり 径0.5cmの円礫わず
かに含む



- 1 10YR4/1 瓶灰色粘土 しまりあり
粘性あり 10YR5/6黄褐色土ブロッ
ク5%含む 径0.5~10cmの亜角礫30
%含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粘土 しまりあり
粘性あり 径0.5cmの円礫わず
かに含む



SD 3



- 1 10YR4/1 瓶灰色粘土 ややしまる
10YR5/6黄褐色土ブロック20%含む
径2cmの亜角礫20%含む

図73 SD 2・3 遺構図 (1)

ある。壁面の立ち上がりは急で、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土 4層に分層した。埋土全体にIV層（基盤層）ブロックが混じるが、礫は含まない。流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 須恵器1点、山茶碗類2点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 須恵器は瓶類の頸部の小片で、山茶碗類は尾張型第5型式の碗である。

時期 出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SD14 (図75)

検出状況 BH20～CI1グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SI1・SD16より新しい。

規模・形状 主軸方位はN-5°-Eで、遺構の北端は発掘区外に延びる。幅0.99m、深さ0.10mである。断面形状は浅い皿状で、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土 単層である。少量の礫を含むが、堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

SD2

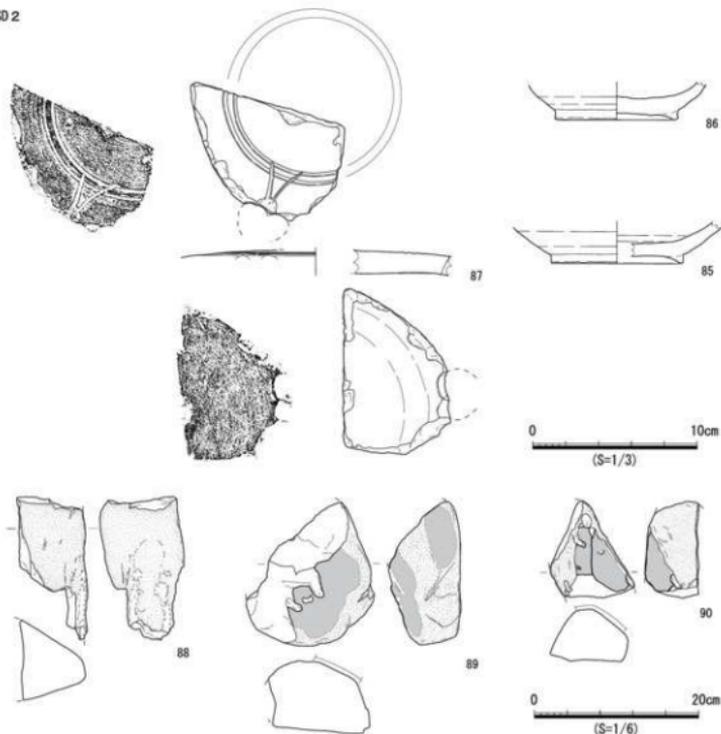


図74 SD2・3遺構図(2)、SD2遺物実測図

遺物出土状況 土師器3点、灰軸陶器2点、山茶碗類2点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 土師器は小片のため器種不明である。灰軸陶器と山茶碗類はいずれも碗の小片である。

時期 出土遺物から、中世と考えられる。

SD19 (図76)

検出状況 BK15グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD20より新しい。

規模・形状 主軸方位はN-7°-Wで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅0.63m、深さ0.14mである。壁面の傾斜が東西で異なり、西側が緩やかで東側が急である。両端部の底面標高に大きな差はない。重複するSD20と、約4m東に位置するSD21と主軸方位が類似する。

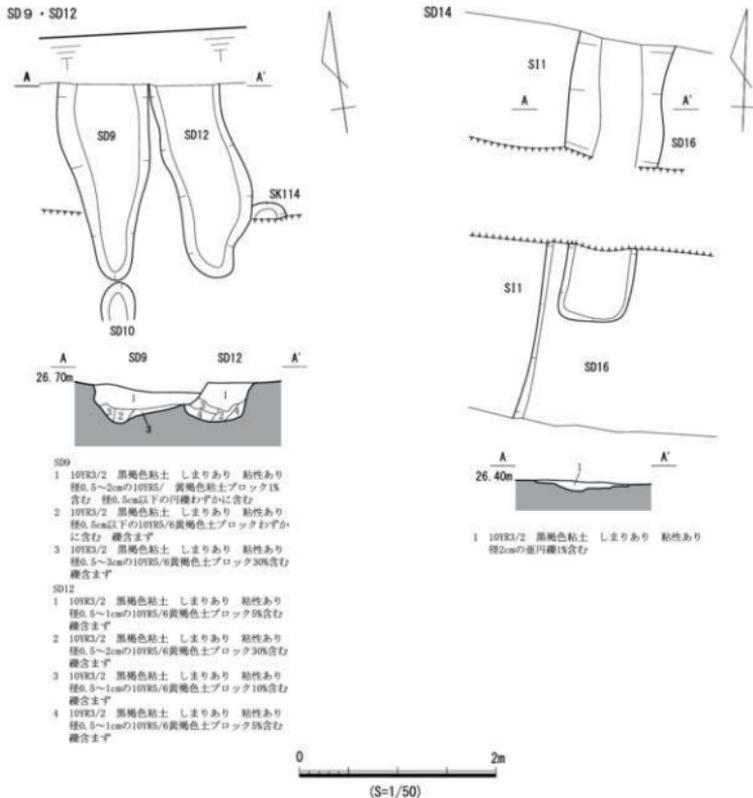


図75 SD9・12・14遺構図

埋土 2層に分層した。遺構の北部では、1層埋土内に少量の礫を含むが、堆積状況は不明である。範囲流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 土師器1点、須恵器5点、灰釉陶器3点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 土師器は甕の胴部の小片である。須恵器は美濃須衛産の平瓶(91)で、把手を有する。8世紀前半のものである。灰釉陶器は碗と段皿の胴部で、いずれも小片である。

時期 当遺構より古いSD20から、尾張型5型式併行に比定した美濃須衛産山茶碗が出土することから、13世紀前半以降と考えられる。

SD20 (図76)

検出状況 BK15グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD19より古い。

規模・形状 主軸方位はN-9°-Eで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅1.93m、深さ0.32mである。壁面の傾斜は東西ともに緩やかである。底面の東側は幅約0.4mの平坦部分が帯状に広がり、西側に向かって一段低くなる。重複するSD19と、約4m東に位置するSD21と主軸方位が類似する。

埋土 2層に分層した。1層・2層ともにIV層(基盤層)ブロックと少量の礫を含むが、堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 土師器8点、須恵器5点、灰釉陶器3点、山茶碗類1点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 土師器は甕の胴部の小片である。須恵器は坏身と壺と甕の小片である。灰釉陶器は碗と皿の胴部で、いずれも小片である。山茶碗類は尾張型5型式併行に比定した美濃須衛産の碗(92)である。

時期 出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SD21 (図77)

検出状況 BK16グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK206・SK207・SK208・SK209・SK210より新しい。約4m西に位置するSD19・SD20と主軸方位が類似する。

規模・形状 主軸方位はN-5°-Eで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅0.73m、深さ0.15mである。断面形状は逆台形で、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土 2層に分層した。少量の礫を含むが、堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 土師器13点、灰釉陶器1点、山茶碗類7点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 土師器は、ロクロ土師器の皿と甕の胴部の小片である。灰釉陶器は碗の小片である。山茶碗類は、美濃須恵産の尾張型第4型式併行に比定した碗(93)、尾張型第5型式の碗、谷迫間2号窯式に比定した東濃型山茶碗の小碗(94)である。93の底部外面には「万口(葉か)」の墨書がある。

時期 出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SD24 (図77)

検出状況 CL3・CM3グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明

瞭であった。他遺構との重複関係は、SK268より新しい。当遺構の東側に隣接するSD23とは主軸方位が異なり、発掘区北側で重複する可能性がある。

規模・形状 主軸方位はN-7°-Wで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅2.46m、深さ0.28mである。断面形状はV字状で壁面は緩やかに立ち上がるが、部分的にテラス状の平坦面が存在する。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平堆積で、1層埋土にIV層（基盤層）ブロックを含むが、堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 土師器22点、須恵器7点、灰釉陶器12点、山茶碗類6点、常滑産陶器1点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

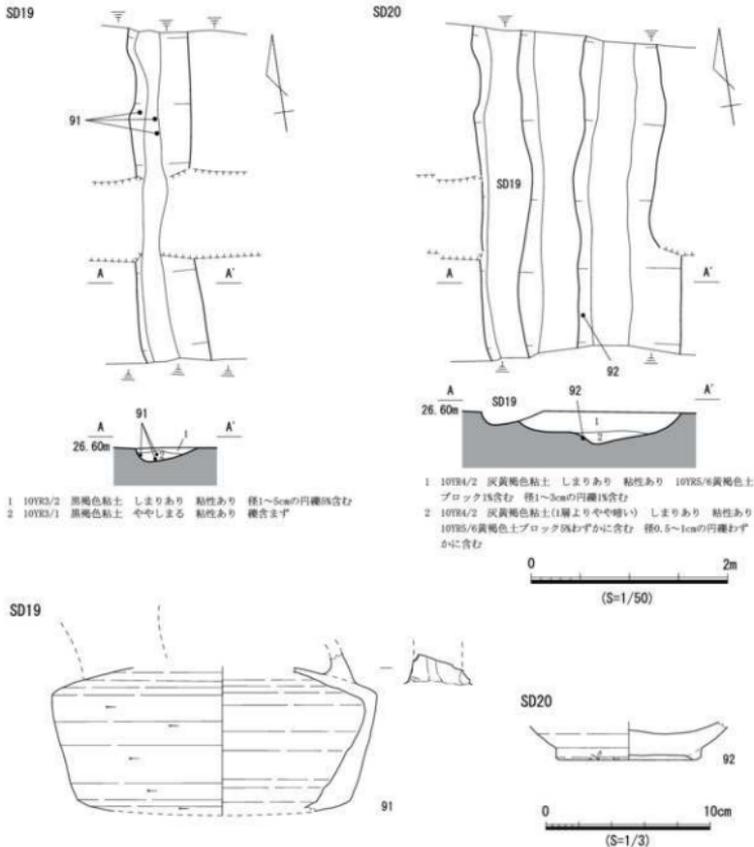
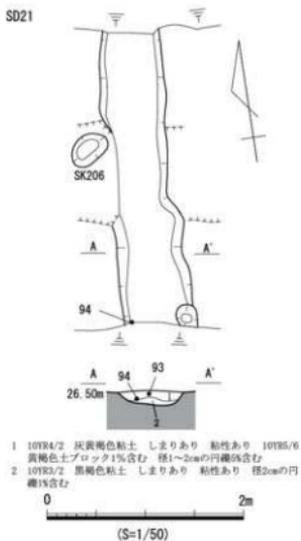


図76 SD19・20遺構図、遺物実測図



SD21遺物出土状況図

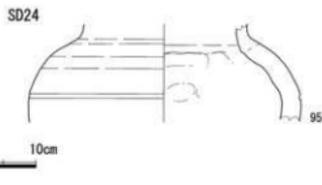
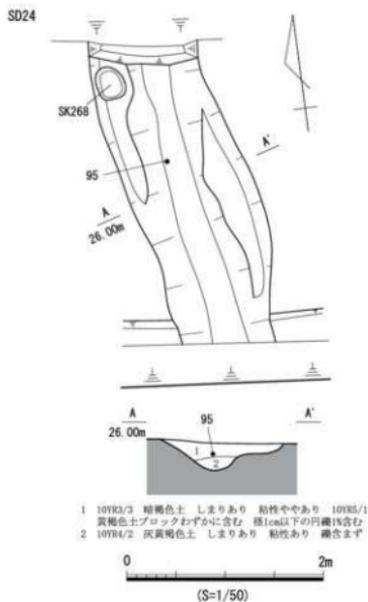
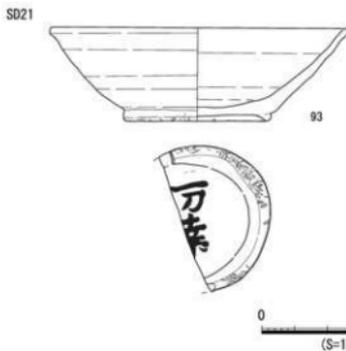
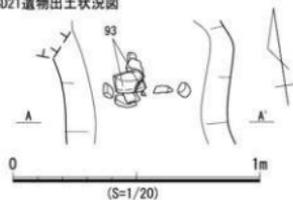


図77 SD21・24遺構図、遺物実測図

遺物 土師器は甕の胴部の小片である。須恵器は壺又は甕、瓶類、坏蓋A、坏身で、いずれも小片である。山茶碗類の分類可能なものとして、尾張型の第3型式又は第4型式の碗と第6型式の碗がある。常滑産陶器は3型式又は4型式の三筋壺(95)である。

時期 出土遺物から、13世紀前半以降と考えられる。

SD33 (図78)

検出状況 DN1グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK971・SK972より新しく、SK970・SK974より古い。

規模・形状 主軸方位はN-56°-Eで、遺構の北部から西部にかけての部分は攪乱により消失し、遺構の北端は発掘区外に延びる。幅0.83m以上、深さ0.31mである。断面形状は、概ね逆台形で、遺構北部では底部が一段深く掘り込まれる。両端部の底面標高に大きな差はない。当遺構の南側に位置するSD34・SD35・SD36と主軸方位が類似する。

埋土 5層に分層した。1層～4層にIV層(基盤層)ブロックを含む。また、A-A'断面の2層とB-B'断面の5層に多量の亜角礫を含み、人為堆積と考えられる。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 土師器2点、須恵器3点、山茶碗類14点、土製品2点が、1層・2層から散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 土師器は甕の胴部の小片である。須恵器の分類可能なものとして、美濃須衛産のⅢ期又はⅣ期に比定した坏蓋C類がある。山茶碗類の分類可能なものとして、尾張型第5型式の碗、東濃型丸石3

SD33

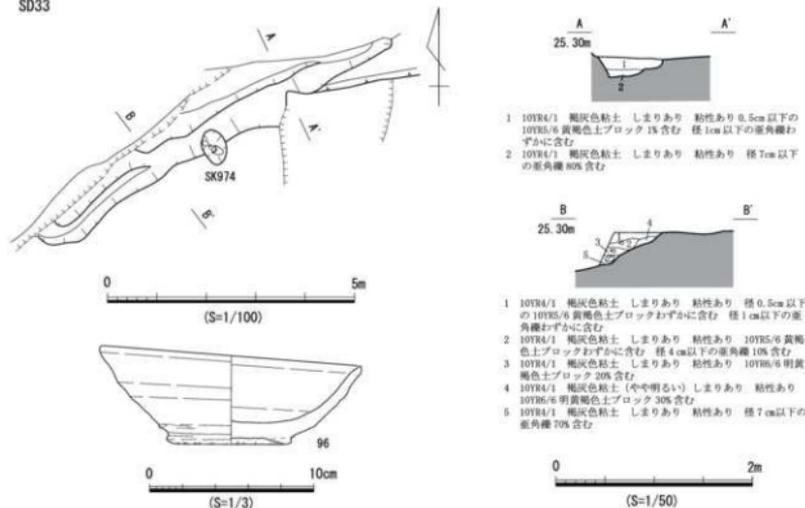


図78 SD33遺構図、遺物実測図

号窯式に比定した碗(96)がある。土製品は分類不能である。

時期 出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SD34 (図79)

検出状況 DN1～DM2グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD36より新しく、SK974・SK978より古い。当遺構の東側に隣接するSD23とは主軸方位が異なり、発掘区北側で重複する可能性がある。

規模・形状 東西方向の直線部分の主軸方位はN-75°-Eで、遺構東端で北に向かって屈曲する。遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅0.70m、深さ0.22mである。断面形状は半円形である。両端部の底面標高は、西から東に向かって緩やかに深くなる。当遺構の周辺に位置するSD33・SD35・SD36と主軸方位が類似する。

埋土 3層に分層した。2層にIV層(基盤層)ブロックを含むが、堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 土師器15点、須恵器9点、灰釉陶器5点、山茶碗類31点、常滑産陶器2点、金属製品2点が、1層～3層から散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 土師器は大半が甕の胴部の小片である。須恵器の分類可能なものとして、美濃須衛産IV期に比定した坏身C類がある。灰釉陶器の分類可能なものとして、東濃産では明和27号窯式に比定した碗(97)と11世紀代の壺又は瓶、猿投産では黒笹90号窯式に比定した碗がある。山茶碗類の分類可能なものとして、尾張型では第3型式の小碗、第3又は第4型式の小碗(98)、第5型式の碗(99・100)、東濃型では丸石3号窯式に比定した碗、浅間窯下1号窯式又は丸石3号窯式に比定した碗(101)、窯洞1号窯式に比定した碗、美濃須衛産では、尾張型第5型式併行に比定した碗と小皿がある。常滑産陶器は甕の胴部と底部の小片である。金属製品は鉄製の鑿根鎌(102)である。

時期 出土遺物から、12世紀後半以降と考えられる。

SD41 (図80)

検出状況 DN8～DM9グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK1069・SK1070・SK1073等より新しく、SK1056・SK1066・SK1067等より古い。

規模・形状 主軸方位はN-34°-Wで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅1.65m、深さ0.25mである。東側壁面にテラス状の平坦面が存在し、底面に土坑状の窪みがある。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土 8層に分層した。6層・7層にIV層(基盤層)ブロックを含み、2層・4層・8層埋土には多量の礫を含む。堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 縄文土器3点、土師器8点、須恵器16点、灰釉陶器7点、山茶碗類21点、瓦1点が、1層～6層から散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 縄文土器の分類可能なものとして、晩期の深鉢(103)がある。内外面ともに摩滅が著しく、調整は不明である。土師器は甕と壺の小片である。須恵器の分類可能なものとして、美濃須衛産IV期第1小期に比定した坏蓋C類(104)がある。灰釉陶器の分類可能なものとして、光ヶ丘1号窯式又は大原2号窯式に比定した広口瓶(105)がある。山茶碗類の分類可能なものとして、尾張型第3型式の

碗 (106・107)、第4型式の碗 (108)、第5型式の碗 (109) がある。107は底部内面に焼成後に刻まれた複数の削痕が確認できる。瓦は平瓦の小片で、摩擦が著しい。

時期 出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SD42 (図81)

検出状況 DM10～DN11グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK1111・SK1112・SK1119より古い。

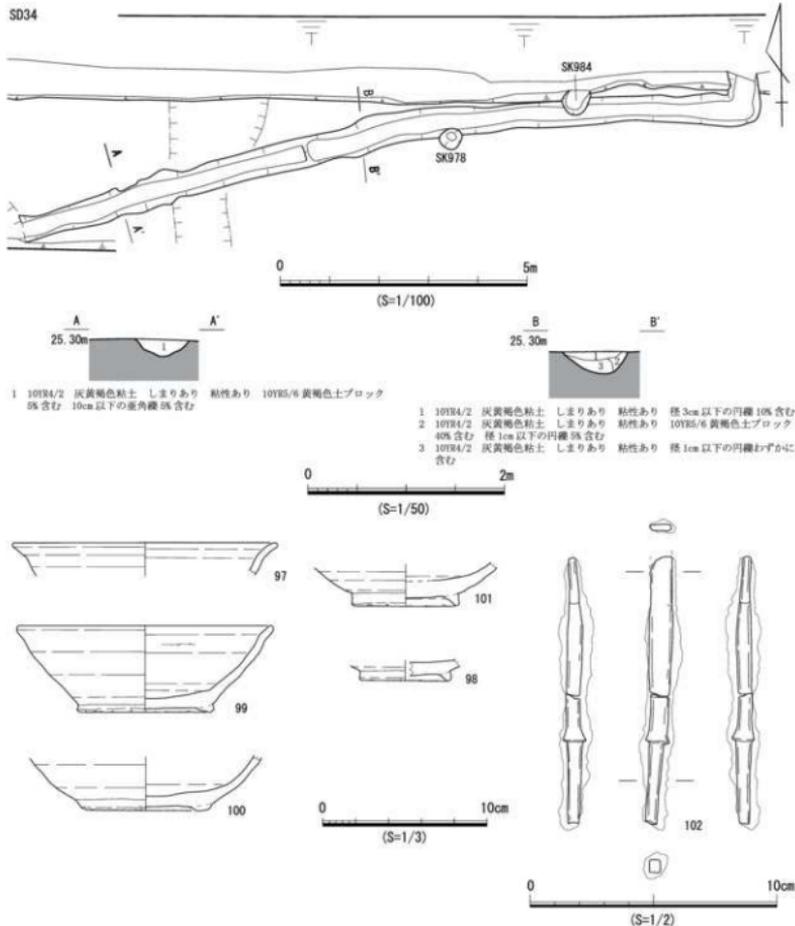


図79 SD34遺構図、遺物実測図

規模・形状 主軸方位はN-41°-Wで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅1.56m、深さ0.34mである。東側壁面は緩やかに立ち上がり、西側壁面は傾斜が急である。底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。

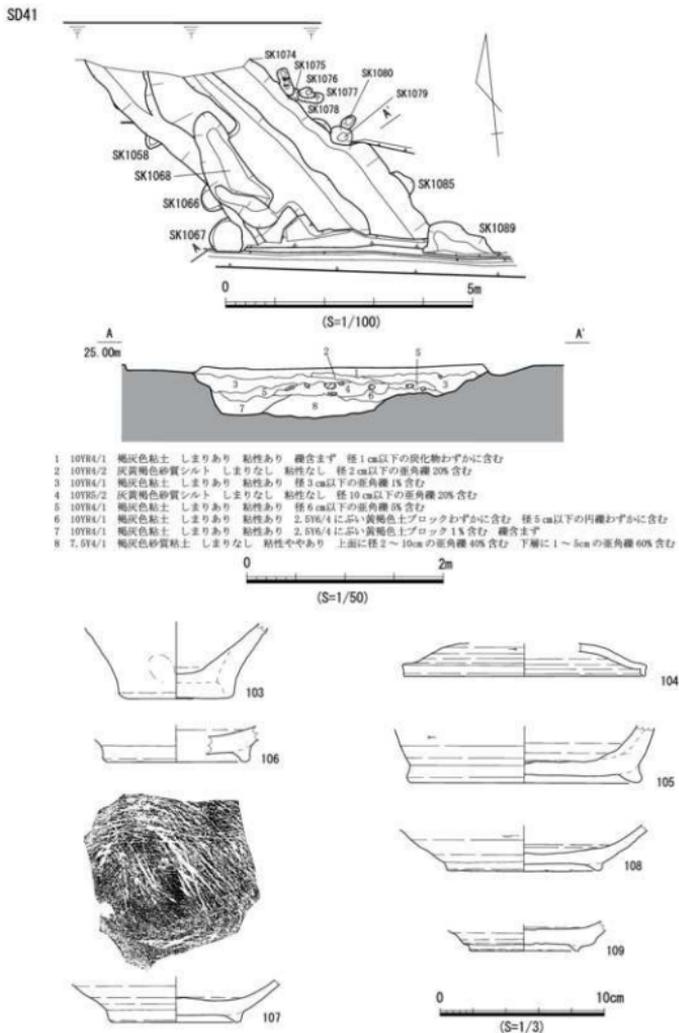


図80 SD41遺構図、遺物実測図

埋土 6層に分層した。3層に多量の礫を含む。堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 須恵器5点、山茶碗類4点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 須恵器の分類可能なものとして、美濃須恵産のⅢ期又はⅣ期に比定した甕がある。山茶碗類の分類可能なものとして、尾張型第5型式の碗(110)と小皿がある。

時期 出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

3 土坑

SK141 (図82)

検出状況 CH2グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 長軸長0.89m、短軸長0.43m以上、深さ0.07mであり、遺構北部が発掘区外に広がるため、平面形の全容は不明である。断面形は浅い皿状で、半円形で、底面は概ね平坦である。

埋土 単層である。少量の礫が混じるが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器4点、山茶碗類2点が埋土中から出土した。土師器は同一個体の皿で、破片は全て遺構底部から出土した。

出土遺物 土師器は、美濃中世前期土師器皿A2a類(111)である。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第5型式の碗がある。

時期 出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

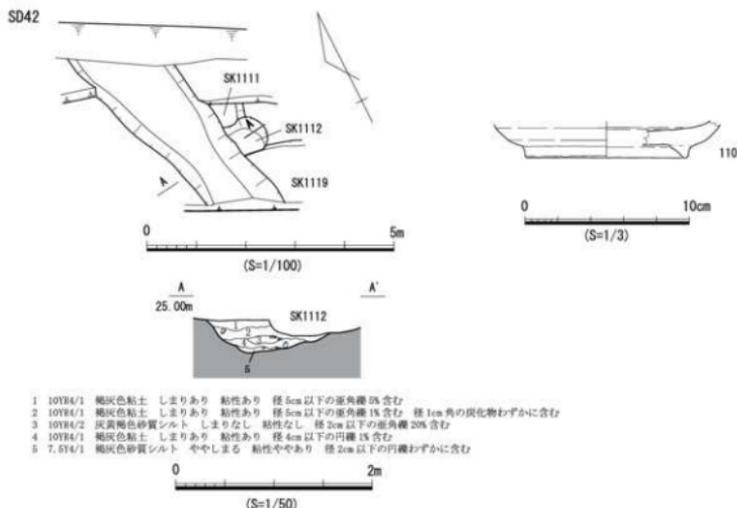


図81 SD42遺構図、遺物実測図

SK343 (図82)

検出状況 CL3グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似し、また重複するSK341との境界が不明瞭だったため、B-B'断面でトレンチ状に掘削し、遺構埋土を確認した。埋土と他遺構との重複関係は、SK341・SK344より古い。

規模・形状 長軸長1.94m、短軸長1.19m、深さ0.36mで、遺構南部が発掘区外に広がるが、平面形は概ね楕円形と考えられる。遺構北部では底面が平坦だが、南部では半円状に一段深く掘り込まれる。

埋土 8層に分層した。2層と3層に焼土ブロック、1層～5層・7層に炭化物を含む。概ね水平な堆積で、基盤層ブロックと礫が少量混じり、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 縄文土器2点、土師器66点、須恵器6点、灰釉陶器2点、山茶碗類18点、中国産陶磁器1点、石製品1点が埋土全体から散在して出土し、層位による偏りは確認できなかった。土師器は皿と甕の小片で、埋土全体から散在して出土したが、灰釉陶器は5層から出土した。山茶碗は2層から、内面を遺構中央に向けた立位で出土した。

出土遺物 縄文土器は深鉢の胴部である。小片のため図示しなかった。土師器は大半が甕の小片で、分類可能なものとして、ロクロ成形の皿(112)がある。須恵器は分類可能なものとして、美濃須衛産IV期に比定した坏身C類がある。灰釉陶器は碗である。いずれも小片のため図示しなかった。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型3型式の碗、尾張型4型式又は5型式の碗、尾張型5型式の碗(113)、谷迫間2号窯式に比定した東濃型山茶碗の碗(114)がある。中国産陶磁器はV類の白磁碗(115)で、11世紀後半から12世紀初頭にかけたものである。石製品は砂岩製の砥石(116)である。

時期 出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SK519 (図83)

検出状況 DJ3グリッド、SK623完掘後の底面で検出した。埋土が基盤層と類似するため、平面形は不明瞭であったが、検出時に複数の円礫が表出していた。他遺構との重複関係は、SK517・SK623より古い。

規模・形状 長軸長0.41m、短軸長0.29m、深さ0.05mで、平面形は不整形である。断面形は浅い皿状で、底面は平坦である。

埋土 単層である。径1cm～8cmの円礫を多量に含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 山茶碗類1点、石製品1点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物 山茶碗類は碗の胴部である。小片のため図示しなかった。石製品は砂岩製の砥石(117)で、一面のみに敲打痕が確認できる。裏面は大きく欠損し、表面の風化が顕著である。

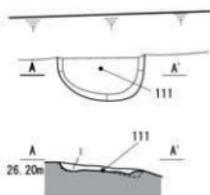
時期 出土遺物から、中世以降と考えられる。

SK623 (図84)

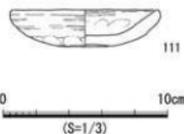
検出状況 DJ2・DJ3グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似するため、平面形は不明瞭であった。完掘後の底面で90基の土坑を検出した。他遺構との重複関係は、SK504・SK505・SK506等より新しく、SK498・SK583・SK586等より古い。

規模・形状 長軸長3.41m以上、短軸長3.26m、深さ0.16mである。遺構の北東部と南部が発掘外に広がるため、平面形は不明である。壁面の傾斜は緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦であるが、遺構東部が若干深く掘り込まれる。

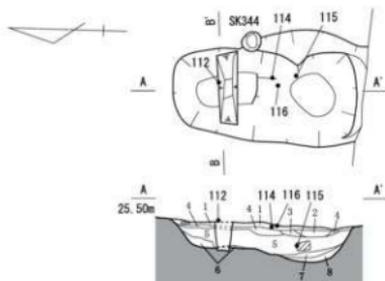
SK141



- 1 10YR2/2 黒褐色土 しまりあり 粘性ややあり 5YR5/6明赤褐色粒子をわずかに含む 径0.5~8cmの歪角礫10%含む



SK343



- 1 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 5YR5/8 褐色粘土ブロック 5%含む 径2cm以下の炭化物 1%含む 径8cmの歪角礫1点含む
 2 10YR2/1 黒褐色粘土 ややしまる 粘性あり 10YR5/6 黄褐色土ブロック 1%含む 5YR5/6 明赤褐色土ブロック (焼土) 5%含む 長さ0.5~2cmの炭化物 1%含む 礫含まず
 3 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR5/6 黄褐色土ブロック 1%含む 5YR5/6 明赤褐色土ブロック (焼土) 5%含む 長さ0.5~1cmの炭化物わずかに含む 礫含まず
 4 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR5/6 黄褐色土ブロック 10%含む 5YR5/8 褐色粘土ブロック 1%含む 長さ0.5~5cmの炭化物 5%含む 礫含まず
 5 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR5/6 黄褐色土ブロック 1%含む 径2cm以下の炭化物わずかに含む
 6 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR5/6 黄褐色土ブロック 30%含む
 7 10YR2/1 黒褐色粘土 ややしまる 粘性あり 10YR5/6 黄褐色土ブロック 5%含む 10YR4/1 褐色粘土ブロック 10%含む 5YR5/8 褐色粘土ブロック 1%含む 長さ2cm以下の炭化物わずかに含む 礫含まず
 8 10YR5/6 黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR2/1 黒褐色土ブロック 30%含む 礫含まず

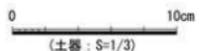
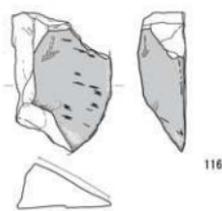
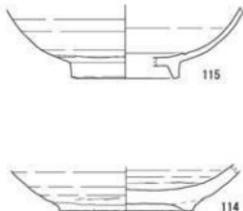
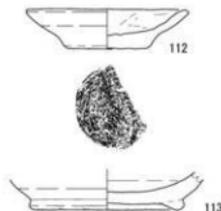


図82 SK141・343遺構図、遺物実測図

埋土 2層に分層した。ほぼ水平な堆積で、亜角礫とブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 縄文土器1点、土師器57点、須恵器33点、灰軸陶器10点、山茶碗類9点、瓦3点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物 縄文土器は深鉢の胴部である。小片のため図示しなかった。土師器は大半が甕の胴部の小片で、分類可能なものとして、7世紀代と考えられる長胴甕(118)とロクロ成形の皿(119)がある。119は内外面の口縁部周辺にタール状の炭化物が付着し、灯明皿として用いられたと考えられる。須恵器は分類可能なものとして、美濃須恵産ではⅢ期後半からⅣ期第2小期に比定した坏身B類、Ⅳ期第2小期又はⅣ期第3小期に比定した甕、Ⅳ期に比定した盤(120)、猿投産では鳴海32号窯式又は折戸10号窯式に比定した坏蓋C類と坏身C類がある。灰軸陶器は分類可能なものとして、明和27号窯式に比定した東濃産の碗がある。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第6型式の碗、谷迫間2号窯式に比定した東濃型山茶碗の碗(121)がある。瓦は残存状況が良好な丸瓦1点(122)を図示した。122は凸面に布目痕、凹面に縄目痕が確認でき、古代の瓦と考えられる。

時期 出土遺物から、13世紀前半以降と考えられる。

SK627 (図85)

検出状況 DJ4・DJ5グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似するため、埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK628より新しく、SK629・SK631・SK634より古い。

規模・形状 長軸長1.45m以上、短軸長0.90m、深さ0.24mで、平面形は不定形である。断面形は概ね逆台形不明で、底面は平坦である。

埋土 6層に分層した。1層～4層はほぼ水平な堆積で、2層～5層に亜角礫と基盤層ブロックを含むことから、人為堆積と考えられる。

SK519

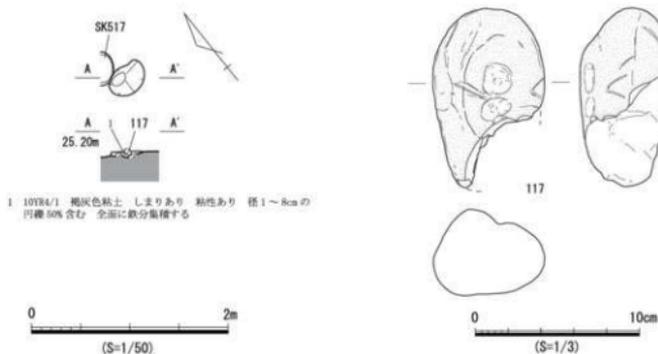
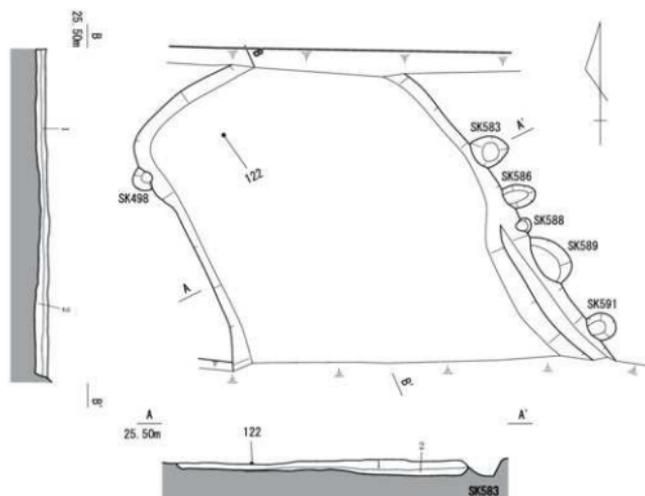


図83 SK519遺構図、遺物実測図

SK623



- 1 10YR4/1 黒灰色粘土 しまりあり 粘性あり 径0.5～10cmの亜角礫 15含む
 2 10YR4/1 黒灰色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 15含む
 長さ1cm以下の炭化物わずかに含む 径0.5～1cmの亜角礫 15含む

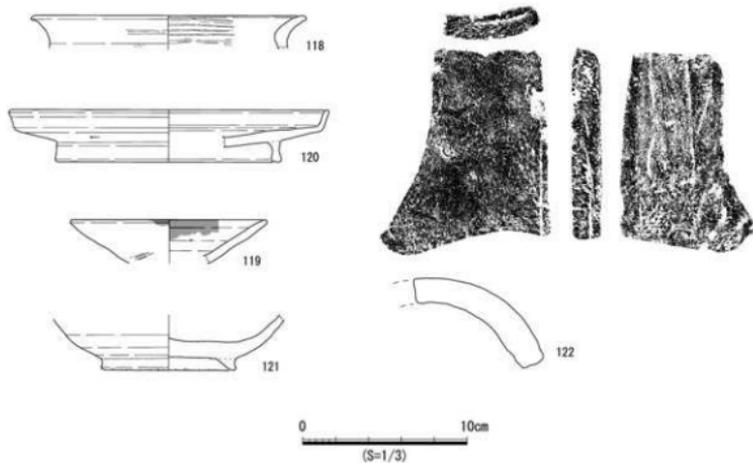
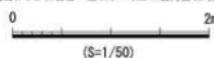


図84 SK623遺構図、遺物実測図

遺物出土状況 土師器74点、須恵器1点、灰釉陶器6点、山茶碗類35点、中国産陶磁器4点、石製品1点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物 土師器は大半が甕の胴部で、分類可能なものとして、ロクロ成形の皿と伊勢鍋があるが、いずれも小片のため図示しなかった。須恵器は坏身の胴部の小片、灰釉陶器は碗の小片である。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第3型式の小碗(123)、第4型式又は第5型式の碗、東濃型では尾張型第3型式併行に比定した碗(124)、谷迫間2号窯式に比定した碗、美濃須衝産では尾張型第5型式併行に比定した碗(125)がある。123は内面底部に墨痕が付着し、摩滅が著しいことから、転用碗と考えられる。中国産陶磁器は白磁の碗と皿で、分類可能なものとして白磁碗IV-1類(126)がある。石製品は泥岩製の砥石(127)である。

時期 出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SK637 (図86)

検出状況 DJ4・DJ5グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP103・SK638・SK639等より古い。

規模・形状 長軸長1.47m、短軸長0.42m以上、深さ0.11mである。遺構南部が発掘区外に広がるため、平面形は不明である。断面形は浅い皿状で、底面は若干の凹凸がある。

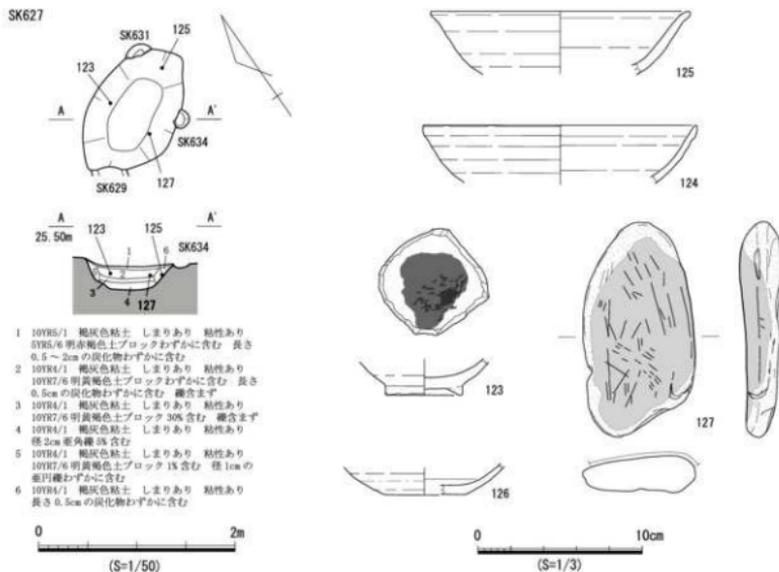


図85 SK627遺構図、遺物実測図

埋土 単層である。埋土中に基盤層ブロックと角礫を含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器7点、灰釉陶器1点、山茶碗類4点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物 土師器は甕の胴部である。小片のため図示しなかった。灰釉陶器は虎溪山1号窯式に比定した東濃産の深碗(128)である。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第5型式の碗(129)がある。

時期 出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SK652 (図86)

検出状況 DJ5グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SA6より新しく、SP107・SK654より古い。

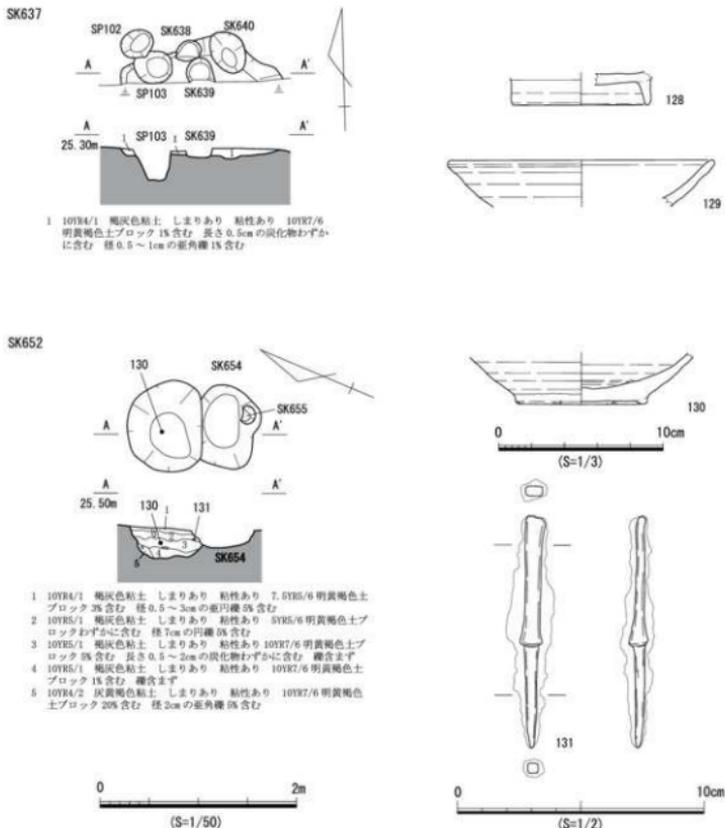


図86 SK637・652遺構図、遺物実測図

規模・形状 長軸長0.94m、短軸長0.76m以上、深さ0.31mで、平面形は不整形である。断面形は逆台形で、底面は若干の起伏がある。

埋土 5層に分層した。1層～4層は概ね水平な堆積で、埋土全体に基盤層ブロックと角礫を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器7点、須恵器3点、灰釉陶器5点、山茶碗類17点、金属製品1点が、埋土中から散在して出土した。

出土遺物 土師器は甕と坏である。須恵器は分類可能なものとして、美濃須衛産V期に比定した広口瓶がある。灰釉陶器は碗である。いずれも小片のため図示しなかった。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第4型式と第5型式に比定した碗、丸石3号窯式に比定した東濃型山茶碗の碗(130)がある。金属製品は鉄製の整根鎌(131)である。131は刃部が欠損している。

時期 出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SK654 (図87)

検出状況 DJ5グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK652より新しく、SK655より古い。

規模・形状 0.84m、短軸長0.69m、深さ0.19mで、平面形は不整形である。断面形は逆台形で、底面は平坦である。

埋土 3層に分層した。埋土全体に基盤層ブロック、1層と3層に亜円礫を含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器5点、灰釉陶器1点、山茶碗類13点、石製品1点が埋土中から出土した。遺物は全て1層からの出土である。

出土遺物 土師器は器種不明、灰釉陶器は碗の胴部である。いずれも小片のため図示しなかった。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第3型式又は第4型式の碗、美濃須衛産では尾張型第3型式併行に比定した碗と第5型式併行に比定した碗(132)がある。石製品は砂岩製の砥石(133)である。

時期 当遺構より古いSK652との重複関係から、13世紀以降と考えられる。

SK658 (図87)

検出状況 DJ5グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK657より新しい。

規模・形状 長軸長0.63m、短軸長0.49m以上、深さ0.19mで、平面形は楕円形である。壁面の傾斜は東側が緩やかに掘り込まれ、底面の西部が一段深く円形に掘り込まれる。

埋土 5層に分層した。埋土全体に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器7点、灰釉陶器3点、山茶碗類9点、瓦1点、金属製品1点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物 土師器は大半が甕の胴部で、分類可能なものとして13世紀のものと考えられる伊勢鍋がある。灰釉陶器は碗の胴部である。いずれも小片のため図示しなかった。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第5型式の小皿(134)と、尾張型第5型式併行に比定した美濃須衛産の碗がある。瓦は布目痕が微かに確認でき、古代のものと考えられる。金属製品は鉄製の刀子(135)で、刃部の中程が欠損する。

時期 出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

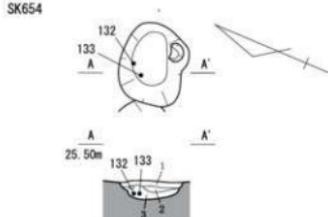
SK660 (図88)

検出状況 DJ 5 グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK661より古い。

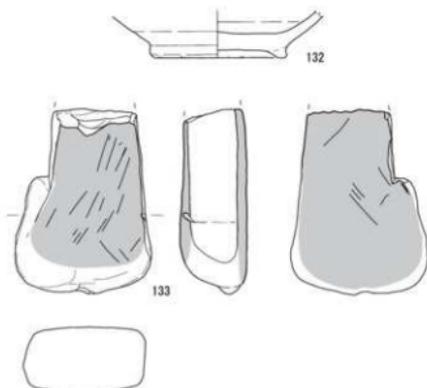
規模・形状 長軸長0.97m、短軸長0.82m、深さ0.21mで、平面形は不定形である。断面形は緩やかな半円形で、底面は平坦である。

埋土 3層に分層した。概ね水平な堆積で、埋土全体に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。1層と2層に焼土粒と炭化物を含む。

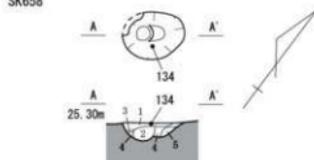
SK654



- 1 10TR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10TR7/6 明黄褐色土ブロック 1%含む 径0.5~2cmの磁片礫わずかに含む
- 2 10TR4/1 褐色粘土 (やや明るい) しまりあり 粘性あり 10TR7/6 明黄褐色土ブロック 10%含む 礫含まず
- 3 10TR4/1 褐色粘土 (やや明るい) しまりあり 粘性あり 10TR7/6 明黄褐色土ブロック 1%含む 径2~4cmの磁片礫 10%含む



SK658



- 1 10TR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10TR7/6 明黄褐色土ブロック 5%含む 長さ0.5~2cmの炭化物 1%と径2~3cmの磁片礫 3%含む
- 2 10TR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10TR7/6 明黄褐色土ブロック 1%含む
- 3 10TR7/6 明黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10TR4/1 褐色粘土ブロック 1%含む 径0.5cmの小礫 5%含む
- 4 10TR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10TR7/6 明黄褐色土ブロック 3%含む
- 5 10TR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10TR7/6 明黄褐色土ブロック 10%含む 礫含まず

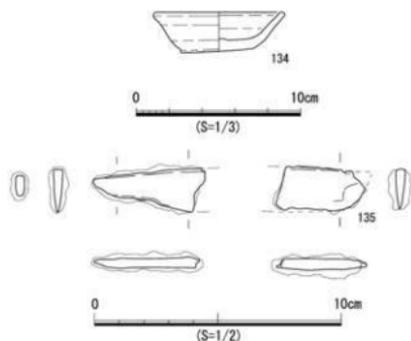
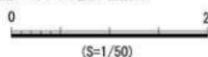


図87 SK654・658遺構図、遺物実測図

遺物出土状況 土師器8点、灰軸陶器1点、山茶碗類13点、石製品1点、鉄滓1点が埋土中から出土した。遺構の底部近くから扁平な砥石(136)が出土し、これの周辺から土師器(137)と山茶碗類(139・138)が出土したが、意図的に置かれたものかは不明である。

出土遺物 土師器は分類可能なものとして、ロクロ成形の皿(137)がある。灰軸陶器は碗の胴部である。小片のため図示しなかった。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第3型式又は第4型式の碗と小碗、第4型式の碗(140)と小碗(138)、第6型式又は第7型式の小皿、尾張型第5型式併行に比定した美濃須衛産の碗(139)がある。139は底部内面全体に墨痕が付着し、底部内面の摩滅が著しいことから、転用碗と考えられる。石製品は砂岩製の砥石(136)で、扁平な一面のみに砥面が確認できる。鉄滓は成分分析を行った。分析結果の詳細は第6章で述べる。

時期 出土遺物から、13世紀後半以降と考えられる。

SK660

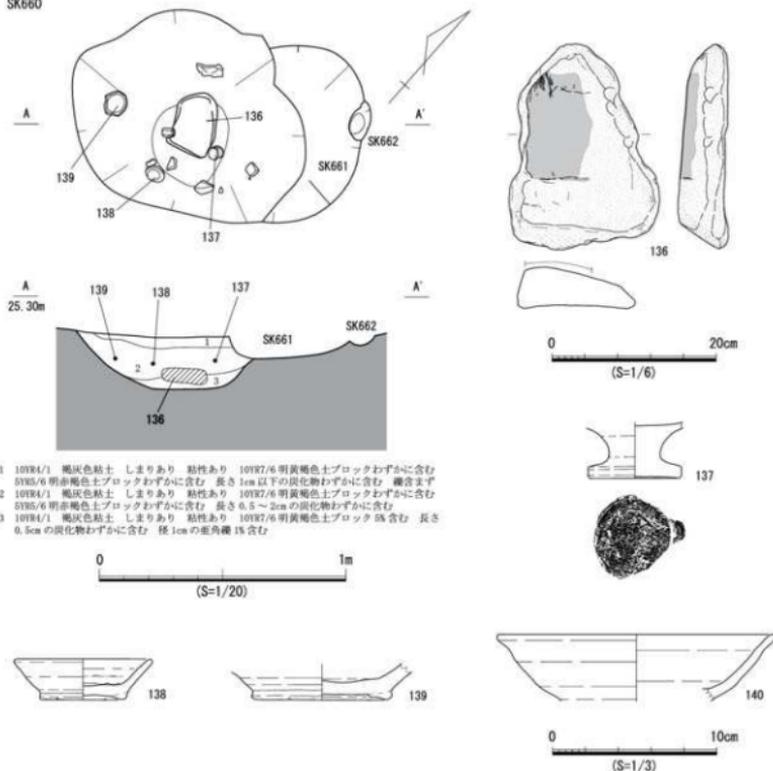


図88 SK660遺構図、遺物実測図

SK661 (図89)

検出状況 DJ5グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK660より新しく、SK662より古い。

規模・形状 長軸長0.72m以上、短軸長0.55m、深さ0.09mで、平面形は不整形である。断面形は浅い皿状で、底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。1層に基盤層ブロックと亜角礫を含み、人為堆積と考えられる。また、1層には焼土粒と炭化物を含む。

遺物出土状況 縄文土器1点、土師器4点、灰釉陶器1点、山茶碗類3点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物 縄文土器は深鉢の胴部、土師器は器種不明、灰釉陶器は碗の口縁部である。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第4型式又は第5型式の碗がある。いずれも小片のため図示しなかった。

時期 当遺構より古いSK660との重複関係から、13世紀後葉以降と考えられる。

SK766 (図89)

検出状況 DJ12グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK767より古い。

規模・形状 長軸長0.28m以上、短軸長0.26m、深さ0.23mで、平面形は概ね楕円形と考えられる。西側壁面はほぼ垂直に立ち上がり、東側壁面の傾斜はやや緩やかである。

埋土 単層である。埋土中に基盤層ブロックと礫を含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器4点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物 土師器は全て皿で、分類可能なものとして、美濃中世前期土師器皿のA2b類(141)がある。

時期 出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SK777 (図89)

検出状況 DJ13グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 長軸長0.63m以上、短軸長0.58m、深さ0.11mで、平面形は不整形である。断面形は逆台形で、底面は平坦である。

埋土 単層である。埋土中に基盤層ブロックと亜角礫を含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器1点、山茶碗類3点、中国産陶磁器1点が埋土中から散在して出土した。

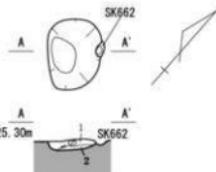
出土遺物 土師器は器種不明である。小片のため図示しなかった。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第5型式又は第6型式の小皿(142)がある。中国産陶磁器は器種不明の白磁である。小片のため図示しなかった。

時期 出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SK826 (図89)

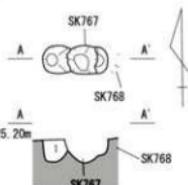
検出状況 EK9・EK10グリッド、II層基底面で検出した。埋土がII層と類似し、表土掘削時に当遺構の埋土の一部を表土として誤って掘削したため、発掘区壁面の観察時に遺構の範囲を確認した。他遺構との重複関係はSK942より古い。

SK661



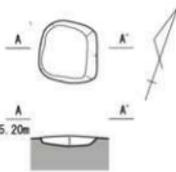
- 1 10YR5/1 褐灰色粘土 しまりあり 粘性あり
10YR7/6 明黄褐色土ブロック 1% 含む YR5/6 明
赤褐色土ブロックわずかに含む 長さ0.5cmの
炭化物わずかに含む 径1~7cmの亜角礫 3%
含む
- 2 10YR4/1 褐灰色粘土 しまりあり 粘性あり
径4cmの角礫 1% 含む

SK766



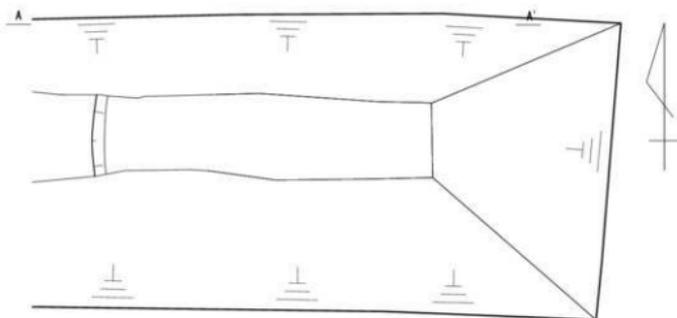
- 1 10YR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり
10YR7/6 明黄褐色土ブロック 3% 含む 径0.5
~1cmの円礫 1% 含む

SK777

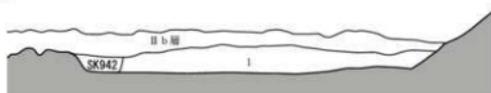


- 1 10YR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり
10YR5/6 黄褐色土粒 3% 含む 径3~7cmの亜
角礫 5% 含む

SK826



A
24.00m



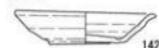
- 1 10YR4/1 褐灰色粘土 しまりあり 粘性あり



SK766



SK777



SK826

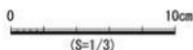


図89 SK661・766・777・826遺構図、SK766・777・826遺物実測図

規模・形状 長軸長3.60m以上、短軸長0.88m以上、深さ0.29mである。南北方向の溝状遺構である可能性があるが、遺構の大部分が発掘外に広がり、正確な規模や形状が不明であるため、土坑として扱った。底面は平坦で、西側壁面は外に向かって立ち上がる。

埋土 単層である。埋土の含有物が確認できず、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器7点、須恵器1点、灰軸陶器1点、山茶碗類3点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物 土師器は大半が甕の胴部で、分類可能なものとしてロクロ成形の皿(143)がある。須恵器は甕の胴部、灰軸陶器は甕の胴部である。いずれも小片のため図示しなかった。山茶碗類は尾張型第5型式併行に比定した渥美産の碗(144)である。

時期 出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SK879 (図90)

検出状況 EK6・EK7グリッド、I層基底部で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP190より新しい。

規模・形状 長軸長0.24m、短軸長0.19m、深さm0.23で、平面形は楕円形である。東部壁面の傾斜は緩やかだが、西部は一段深く掘り込まれ、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土 4層に分層した。ほぼ水平の堆積で、2層～4層に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器14点、灰軸陶器1点、山茶碗類3点、石製品1点が埋土中から出土した。山茶碗類の破片と砥石(145)は1層上部から、伊勢鍋(146)の破片は2層底部からまとめて出土した。

出土遺物 土師器は大半が甕の胴部で、分類可能なものに11世紀代と考えられる伊勢鍋(146)がある。灰軸陶器は皿の小片である。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第5型式の碗がある。石製品は砂岩製の砥石(145)である。

時期 出土遺物と、当遺構より古いSP190から尾張型第4型式又は第5型式の山茶碗が出土していることから、12世紀後葉以降と考えられる。

SK888 (図90)

検出状況 EK6グリッド、SK68完掘後の底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。検出時に複数の礫が表出していた。他遺構との重複関係は、SP186・SK68・SK889より古い。

規模・形状 長軸長0.20m以上、短軸長0.17m以上、深さm0.14である。他遺構と重複が激しく、平面形は不明である。わずかに残る底面は平坦で、壁面は丸く立ち上がる。

埋土 単層である。基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器1点が埋土中から出土した。

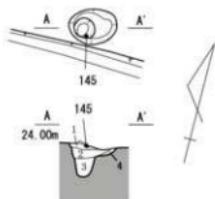
出土遺物 147は中世前期土師器皿である。器壁は6mmと厚く、推定口径は約11cmである。

時期 出土遺物から、12世紀以降と考えられる。

SK984 (図90)

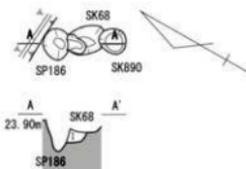
検出状況 EK8グリッド、I層基底部で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD34より古い。

SK879



- 1 10YR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 礫含まず
- 2 10YR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 礫含まず 10
- 3 10YR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR5/6 黄褐色土ブロック 1%含む 径3cmの礫1点含む
- 4 10YR5/6 黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR3/2 黒褐色土ブロック 5%含む

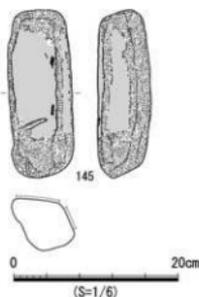
SK888



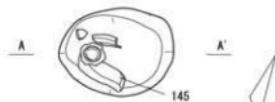
- 1 10YR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR5/6 黄褐色土ブロック 5%含む 礫含まず



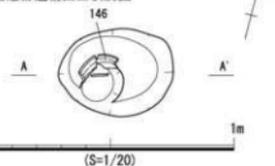
SK879



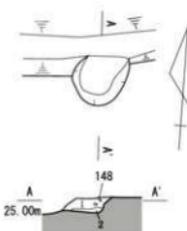
1層上部遺物出土状況図



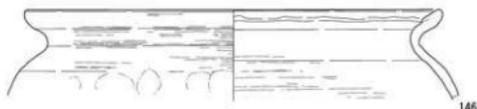
2層底部遺物出土状況図



SK984



- 1 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR5/6 黄褐色土ブロック 1%含む 径3cmの礫わずかに含む 長さ1cm以下の炭化物わずかに含む
- 2 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR5/6 黄褐色土ブロック 10%含む 礫含まず



SK888



SK984

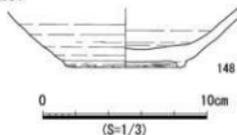


図90 SK879・888・984遺構図、遺物実測図

規模・形状 長軸長0.54m以上、短軸長0.52m、深さ0.15mである。遺構北部がSD34と重複するが、平面形は概ね楕円形と考えられる。壁面は底面から急に立ち上がり、外に向かって開く。底面は平坦である。

埋土 2層に分層した。ほぼ水平な堆積で、埋土全体に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 灰釉陶器1点、山茶碗類1点が1層から出土した。

出土遺物 灰釉陶器は壺類の胴部である。小片のため図示しなかった。山茶碗類は尾張型第5型式の碗(148)である。

時期 出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SK988 (図91)

検出状況 EK8グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK1138より新しく、SD34より古い。

規模・形状 長軸長0.77m以上、短軸長0.63以上、深さ0.17mである。遺構北部がSD34と重複するが、平面形は概ね円形と考えられる。断面形は半円形である。

埋土 3層に分層した。1層と3層に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 山茶碗類1点が1層から出土した。

出土遺物 山茶碗類は尾張型第5型式の碗である。小片のため図示しなかった。

時期 出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SK1119 (図91)

検出状況 DN11グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD42・SK1117・SK1118等より新しい。

規模・形状 長軸長4.60m、短軸長1.33m以上、深さ0.10mである。遺構南部が発掘外に広がるが、概ね隅丸方形と考えられる。東部壁面の傾斜は緩やかだが、遺構西部壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底部は平坦である。

埋土 単層である。少量の垂角礫を含むが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器5点、須恵器1点、灰釉陶器3点、山茶碗類6点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物 土師器は甕の胴部、灰釉陶器は器種不明、山茶碗類は碗である。いずれも小片のため図示しなかった。須恵器は美濃須衛産IV期に比定した小型の脚付壺(149)で、ミニチュア土器と考えられる。

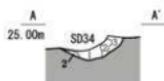
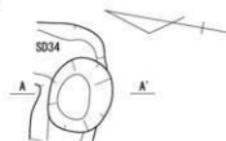
時期 当遺構より古いSD42から尾張型第5型式の山茶碗類が出土していることから、13世紀以降と考えられる。

SK1137 (図91)

検出状況 DJ4グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SA5より古い。

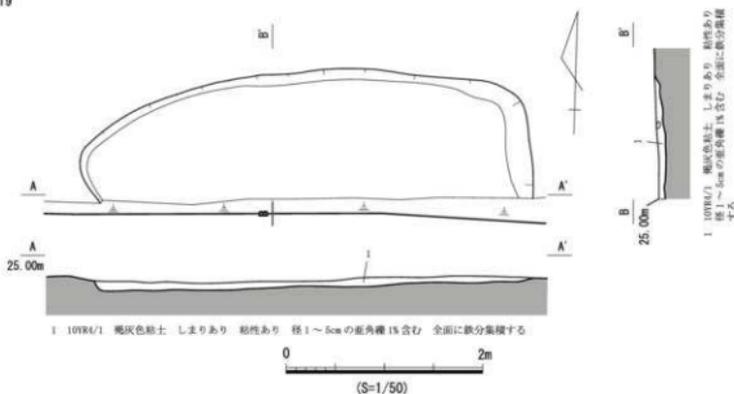
規模・形状 長軸長0.31m、短軸長0.30m、深さ0.12mである。遺構南部が発掘外に広がるため、平面形は不明である。断面形は浅い皿状で、底部は平坦である。

SK988

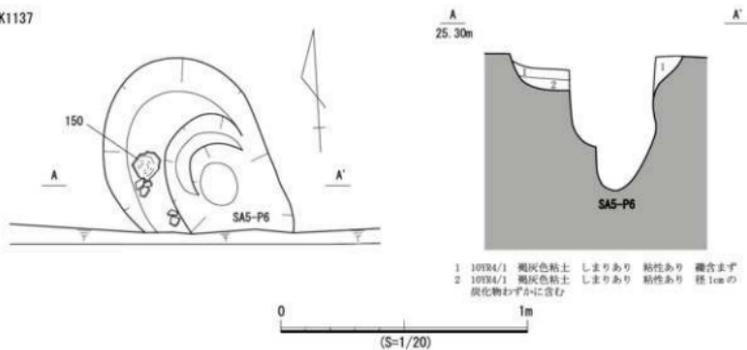


- 1 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径1cm以下の10YR5/6黄褐色土ブロック5%含む 礫含まず
- 2 10YR5/6 黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR4/1 褐色粘土ブロック30%含む 礫含まず
- 3 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径1cm以下の10YR5/6黄褐色土ブロックわずかに含む 礫含まず

SK1119



SK1137



SK1119



SK1137



図91 SK988・1119・1137遺構図、SK1119・1137遺物実測図

埋土 2層に分層した。堆積状況は不明である。

遺物出土状況 土師器6点、須恵器1点、灰釉陶器1点、山茶碗類2点が埋土中から出土した。山茶碗類の底部(150)が、遺構底部付近から逆位で出土した。

出土遺物 土師器は甕の胴部、須恵器は坏身の胴部、灰釉陶器は碗の口縁部である。いずれも小片のため図示しなかった。山茶碗は尾張型5型式の碗(150)である。

時期 出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SK1138 (図92)

検出状況 DN4～DM5グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD38・SK993・SK994等より新しく、SD34より古い。

規模・形状 長軸長4.10m以上、短軸長2.47m以上、深さ0.43mである。遺構北部が発掘外に広がる

SK1138

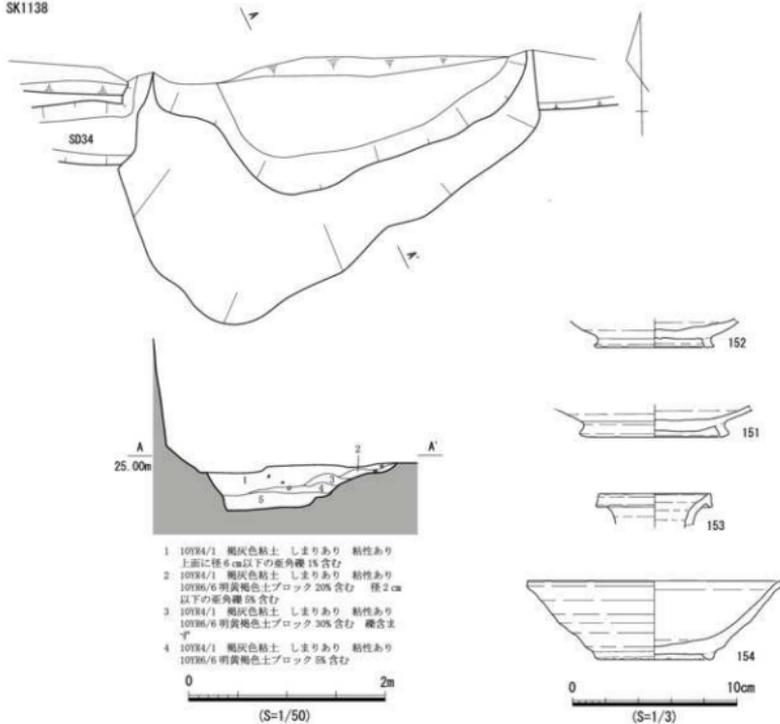


図92 SK1138遺構図、遺物実測図

ため、平面形の全容は不明である。南側壁面は緩やかに傾斜し、底面付近で一段深く掘り込まれる。底面は平坦で、基盤層の砂礫が露出する。

埋土 2層～4層に基盤層ブロック、5層に多量の垂角礫を含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 縄文土器1点、土師器12点、須恵器16点、灰釉陶器1点、山茶碗類16点、常滑産陶器1点、瓦11点が埋土中から出土した。

出土遺物 縄文土器は深鉢の胴部、土師器は甕の胴部である。いずれも小片のため図示しなかった。須恵器は分類可能なものとして、美濃須衛産IV期又はV期に比定した坏身C類、V期第1小期に比定した碗(151)と台付皿(152)、黒笹14号窯式又は黒笹90号窯式に比定した猿投産の小型の長頸瓶(153)がある。小型の長頸瓶はミニチュア土器と考えられる。灰釉陶器は長頸瓶の胴部である。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第4型式～第6型式の碗(154)がある。常滑産陶器は甕の底部である。瓦はいずれも小片で表面の摩滅が著しいが、微かに布目痕が確認できるものがあり、古代のものと考えられる。

時期 出土遺物から、13世紀前半以降と考えられる。

第4節 近世以降の遺構と遺物

1 溝状遺構

SD 1 (図93)

検出状況 BE1グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 主軸方位はN-7°-Wで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅1.21m、深さ0.45mである。壁面の傾斜は急だが、西側壁面はテラス状の平坦面が部分的に存在する。底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土 4層に分層した。2層にIV層(基盤層)ブロックを含み、4層に多量の礫を含む。堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 近代磁器1点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 近代磁器は染付小坏の小片である。小片のため図示しなかった。

時期 出土遺物から、近代以降と考えられる。

SD 4 (図93)

検出状況 BH10グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK55・SK56・SK61等より新しい。

規模・形状 遺構は二股に分岐し、北東-南西方向部分の主軸方位はN-50°-E、北西-南東方向部分の主軸方位はN-15°-Wである。遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅0.80m、深さ0.27mである。断面形状は逆台形で、壁面の傾斜は急である。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土 単層である。埋土に少量の礫を含む。堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 瀬戸美濃産陶器4点が、1層から散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物 瀬戸美濃産陶器は、登窯第7小期の折縁輪壳鉢と、登窯第10小期又は第11小期の広東茶碗である。

時期 出土遺物から、19世紀以降と考えられる。

SD 5 (図93)

検出状況 BH10グリッド、SD4完掘後の底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD4・SK59・SK61等より古い。

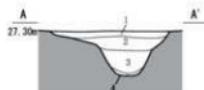
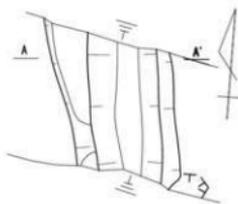
規模・形状 主軸方位はN-50°-Eである。遺構の北端は発掘区外に延び、南部はSK61によって消失している。幅0.78m、深さ0.48mである。西側壁面はテラス状の平坦面が存在し、北部の東側底面がオーバーストック状に掘り込まれる。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土 3層に分層した。3層にIV層(基盤層)ブロックを含む。堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

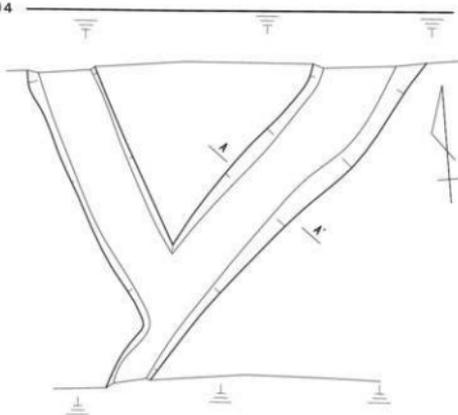
時期 明治20年作成の地籍図では、当遺構の位置に対応する地割が確認できることから、近世末から

SD 1



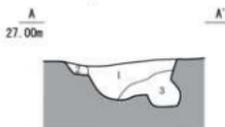
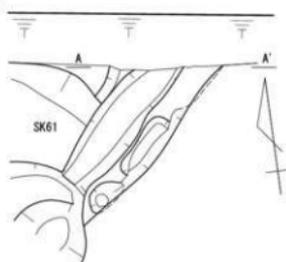
- 1 10YR3/2 黒褐色土 しまりあり 粘性あり 径3cm以下の円礫1%含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径5cm以下の10YR4/4褐色土ブロック10%含む 礫含まず
- 3 10YR4/2 灰黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径3cm以下の円礫5%含む
- 4 10YR4/2 灰黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径3cm以下の円礫5%含む

SD 4



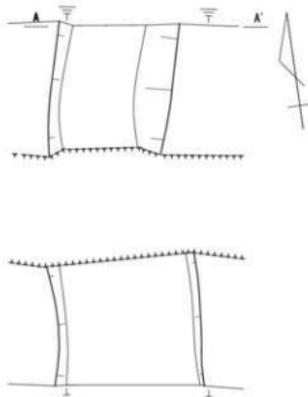
- 1 10YR4/2 灰黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径4cmの硬角礫7%含む

SD 5



- 1 10YR4/2 灰黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径0.5~1cmの円礫5%含む
- 2 10YR4/3 にがい黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり
- 3 10YR4/2 灰黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径0.5~2cmの10YR5/6黄褐色土ブロック5%含む 礫含まず

SD 8



- 1 10YR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径0.5~3cmの円礫20%含む

0 2m

(S=1/50)

図93 SD 1・4・5・8 遺構図

近代にかけての遺構の可能性がある。

SD8 (図93)

検出状況 BG15グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 主軸方位はN-3°-Eで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅1.50m、深さ0.09mである。断面形状は浅い皿状で、底面は平坦である。底面標高は南から北に向かって緩やかに深くなる。

埋土 単層である。埋土に円礫を多量に含む。堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 遺物が出土しておらず、重複する遺構はないが、明治20年作成の地籍図では、当遺構の位置と主軸方位に対応する地割が確認できることから、近世末から近代にかけての遺構の可能性がある。

SD13 (図94)

検出状況 BH18グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP30・SD11・SK119より新しい。

SD13

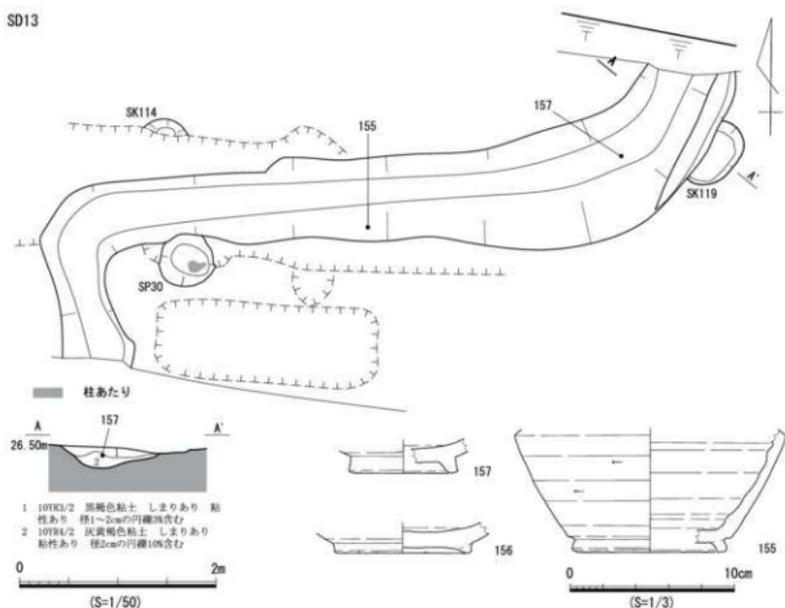


図94 SD13遺構図、遺物実測図

規模・形状 発掘区内でクランク状に屈曲し、遺構の両端は発掘区外に延びる。主軸方位は、東側の屈曲部分から北端までの直線部分はN-20°-E、東西方向の直線部分はN-87°-E、西側の屈曲部分から南端までの直線部分はN-13°-Eである。幅1.24m、深さ0.22mで、東側の壁面は西側に比べて緩やかに傾斜し、底面は丸みを帯びる。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土 2層に分層した。1層と2層に円礫を含むが、堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況 土師器1点、須恵器6点、山茶碗類6点、近世陶器1点が埋土中から散在して出土した。

遺物 土師器は器種不明である。小片のため図示しなかった。須恵器は分類可能なものとして、美濃須衛産IV期に比定した長頸瓶(155)がある。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第5型式併行に比定した美濃須衛産の碗(156)がある。瀬戸美濃産陶器は登窯第3小期又は第4小期の丸碗(157)で、御深井釉が施される。

時期 出土遺物から、17世紀後半以降と考えられる。

2 土坑

SK61 (図95)

検出状況 BF10グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。遺構との重複関係は、SD5・SK55・SK56より新しく、SD4より古い。

規模・形状 長軸長2.76m、短軸長2.09m以上、深さ0.53mであり、平面形は不定形である。壁面の傾斜は全体的に直立気味に立ち上がる。底面の形状は複雑で、南部と北部はほぼ平坦だが、最奥部である東部は丸く掘り込まれる。

埋土 6層に分層した。1層・3層・5層に礫、3層・4層・6層に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器3点、須恵器18点、灰釉陶器1点、山茶碗類2点、瀬戸美濃産陶器3点、常滑産陶器4点が、埋土中から散在して出土した。

出土遺物 土師器は甕の胴部である。小片のため図示しなかった。須恵器は分類可能なものとして、美濃須衛産IV期に比定した広口瓶(158)と甕がある。灰釉陶器は碗の胴部である。小片のため図示しなかった。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第5型式の碗がある。瀬戸美濃産陶器は分類可能なものとして、大窯の徳利と搦鉢、登窯第4小期又は第5小期の尾呂茶碗(159)がある。常滑産陶器は分類可能なものとして、18世紀前半の甕(160)と、詳細な時期は不明だが赤物の甕がある。

時期 出土遺物から、18世紀前半以降と考えられる。

SK134 (図95)

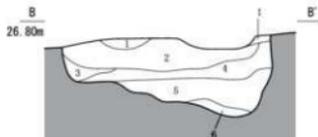
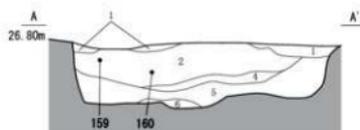
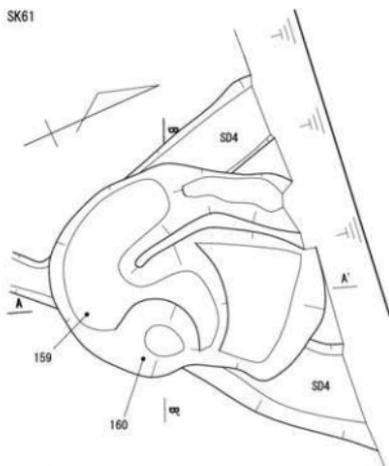
検出状況 BH20グリッド、III層上面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 長軸長0.21m、短軸長0.20m、深さ0.17mであり、平面形は不整形である。断面形は半円形だが、西側の壁面が垂直に立ち上がる。底面は丸くなる。

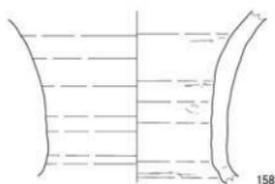
埋土 2層に分層した。2層に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器6点、常滑産陶器の甕1点が埋土中から散在して出土した。

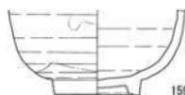
SK61



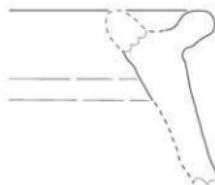
- 1 10YR4/2 灰黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径4cmの垂直罐7%含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 確含まず
- 3 10YR4/2 灰黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR5/6黄褐色土ブロック10%含む 径2-5cmの円罐50%含む
- 4 10YR4/2 灰黄褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR5/6黄褐色土ブロック3%含む 確含まず
- 5 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 径2-5cmの円罐50%含む
- 6 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR5/6黄褐色土ブロック30%含む 確含まず



158



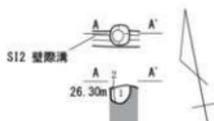
159



160



SK134



- 1 10YR3/2 赤褐色粘土 ややしまる 粘性あり 確含まず
- 2 10YR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR5/6黄褐色土ブロック3%含む 確含まず



(S=1/50)

図95 SK61・134遺構図、SK61遺物実測図

出土遺物 土師器は甕の胴部、常滑産陶器は甕の胴部である。いずれも小片のため図示しなかった。常滑産の甕は残存状況が悪く詳細な時期は不明だが、近世のものと考えられる。

時期 出土遺物から、近世以降と考えられる。

SK673 (図96)

検出状況 DJ9グリッド、1層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。遺構との重複関係は、SK711・SK750より新しい。当遺構の北側には堅田古墳が隣接する。

規模・形状 長軸長1.76m、短軸長1.22m以上、深さ2.50mである。遺構北部は発掘区外に広がるが、平面形は概ね正円形と考えられる。開口部は若干外向きに開くが、概ね円筒状に掘り込まれており、壁面が外に向けて膨らむ部分がある。底部は中央に向けて窪んでいる。

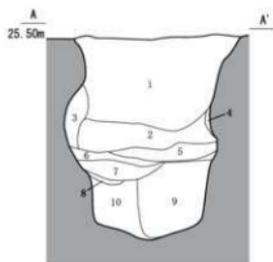
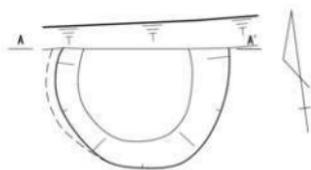
埋土 10層に分層した。1層・2層と3層・4層、7層・8層と下層、9層と10層はそれぞれの層界の様子から、埋め戻した後に再掘削された可能性がある。また、基盤層ブロックと礫を含み、詳細な堆積状況は不明だが、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 常滑産陶器1点が、検出面から約1.6mの深さで出土した。

出土遺物 常滑産陶器は甕の胴部である。胎土の特徴から近世以降のものと考えられる。小片のため図示しなかった。

時期 出土遺物から、近世以降と考えられる。

SK673



- 1 10YR5/1 褐色灰色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR7/6 明黄褐色土ブロック わずかに含む 径0.5～1cmの角礫1%含む
- 2 10YR5/1 褐色灰色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR7/6 明黄褐色土ブロック10%含む 径0.5～2cmの円礫わずかに含む
- 3 10YR5/1 褐色灰色粘土(やや硬い) しまりあり 粘性あり 10YR7/6 明黄褐色土ブロックわずかに含む 細礫混状に20%含む
- 4 10YR5/1 褐色灰色粘土 しまりあり 粘性あり 礫含まず
- 5 10YR5/1 褐色灰色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR7/6 明黄褐色土ブロックわずかに含む 径1cmの円礫わずかに含む
- 6 2.5Y5/2 緑灰色砂質シルト ややしまる 粘性なし 10YR7/6 明黄褐色土ブロックわずかに含む 礫含まず
- 7 10YR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 10YR8/6 黄褐色土ブロック1%含む 径5～7cmの円礫5%含む
- 8 2.5Y5/2 緑灰色砂質シルト ややしまる 粘性なし 礫含まず
- 9 2.5Y4/2 暗灰色粘土 ややしまる 粘性あり 径0.5～1cmの角礫30%含む
- 10 10YR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり 0.5～1cmの円礫わずかに含む



図96 SK673遺構図

第5節 その他の遺構と遺物

1 柵

SA7 (図97)

検出状況 DK20・EK1グリッド、IIb層基底面でP1～P5を検出した。いずれも平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP157より古い。

規模・形状 東西方向に5基の柱穴が直線上に並ぶことから柵とした。主軸方位がN-82°-W、柱間は1.1m～2.5m、東西長6.9mである。東側は発掘区外へ広がる可能性がある。

柱穴 柱穴の平面形は円形及び不整形円で、径は0.35m～0.41m、深さは0.11m～0.26mである。P1とP2では柱痕跡と柱あたり、P3、P4では柱あたりを確認した。

遺物出土状況 P1の柱掘方埋土から輪の羽口1点(161)が出土した。

遺物 15は先端部と基部が欠損するが、先端部に向かって細くなる形状と考えられる。外面にガラス状の硬化物が付着する。

時期 重複する遺構からも時期が分かる遺物が出土しておらず、主軸方位が類似する遺構も存在しないことから、時期は不明である。

2 土坑

SK148 (図98)

検出状況 CI3グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状 長軸長1.19m、短軸長0.55m以上、深さ0.13mである。遺構南部が発掘区外に広がるため、平面形の全容は不明である。掘削中に底面付近で炭化物和焼土を含む堆積を確認し、カマドや炉等の存在を想定した。このため、炭化物・焼土堆積範囲をB-B'断面で分割して掘り下げたが、カマドや炉と考えられる焼土堆積や構造物、埋土が面的に被熱・変色している状況は確認できなかった。

埋土 2層に分層した。水平な堆積で1層と2層に少量の炭化物和礫を含み、遺構底部付近に焼土ブロックが集中することから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 遺物が出土せず、他遺構と重複しないことから、時期は不明である。

SK618 (図98)

検出状況 DJ4グリッド、I層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK760より新しい。

規模・形状 長軸長0.28m、短軸長0.26m、深さ0.17mで、平面形は不整形円形である。断面形は半円形である。

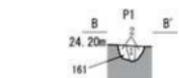
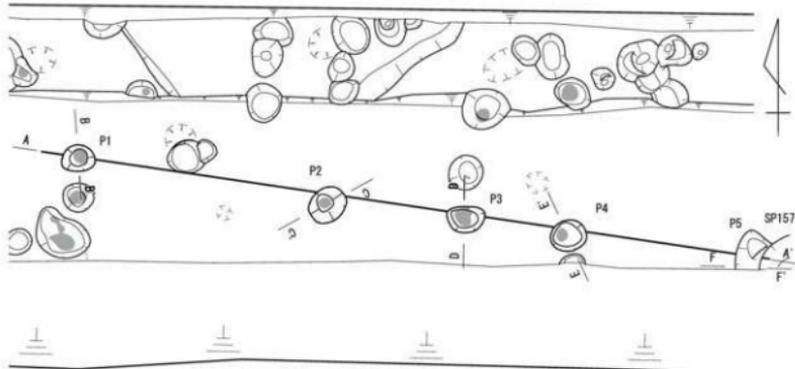
埋土 単層である。基盤層ブロックと直角礫を含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況 金属製品2点が埋土上部から出土した。

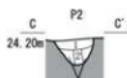
出土遺物 金属製品はいずれも棒状の鉄製品(162、163)で、鉄織の軸部又は刀子の茎部の可能性がある。

時期 時期判別可能な遺物が出土せず、他遺構と重複しないことから、時期は不明である。

SA7



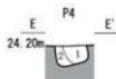
- 1 10YK2/3 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり
10YR5/4 にぶい黄褐色土ブロック 10% 含む 雑
含まず
- 2 10YK2/3 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり
雑含まず



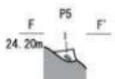
- 1 10YK3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり
10YK5/4 にぶい黄褐色土ブロック 5% 含む 上
面に炭化物わずかに含む
- 2 10YK2/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり
雑含まず 底面に柱痕あり
- 3 10YK3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり
10YK5/4 にぶい黄褐色土ブロック 5% 含む 雑
含まず



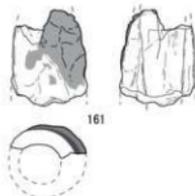
- 1 10YR4/2 褐色粘土 しまりあり 粘性あり



- 1 10YK2/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり
10YK5/4 にぶい黄褐色土ブロック 5% 含む
雑含まず
- 2 10YK3/1 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり
10YK5/4 にぶい黄褐色土ブロック 30% 含む
雑含まず



- 1 10YR4/1 褐色粘土 しまりあり 粘性あり
10YK2/1 黒褐色土ブロック 1% 含む 10YK5/6 黄褐
色土ブロック 5% 含む 雑含まず



(S=1/50)



(S=1/3)

図97 SA7 遺構図、遺物実測図

SK1072 (図99)

検出状況 DM9グリッド、SD41完掘後の底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD41より古い。

規模・形状 長軸長0.46m以上、短軸長0.34m以上、深さ0.14mである。遺構上部がSD34と重複するが、平面形は不整形である。断面形は概ね半円形で、底部中央が周辺より若干深く掘り込まれる。

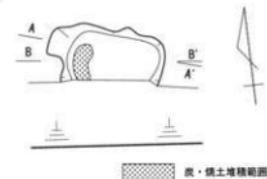
埋土 単層である。多量の亜角礫を含むが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況 石製品1点が埋土上部から出土した。

出土遺物 石製品は砂岩製の敲石(164)で、全ての面に敲打痕が確認できる。

時期 当遺構より新しいSD41から尾張型第5型式の山茶碗類が出土しているが、詳細な時期は不明である。

SK148



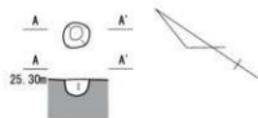
- 10YR4/1 褐灰色粘土 しまりあり 粘性あり
径0.5~2cmの炭化物を含む 径4cmの円礫15含む
- 10YR3/2 黒褐色粘土 しまりあり 粘性あり
径0.5cmの炭化物わずかに含む 径2~3cmの円礫15含む



- 5YR4/8 赤褐色土 しまりあり 粘性あり
長さ0.5cmの炭化物を含む 礫含まず



SK618



- 10YR4/1 褐灰色粘土 しまりあり 粘性あり
径1cmの10YR7/6 明黄褐色土ブロック15含む
上面に径2~3cmの亜角礫15含む

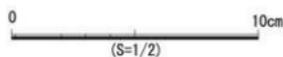
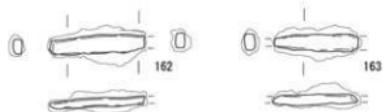


図98 SK148・618遺構図、SK618遺物実測図

SK1072

遺物出土状況図

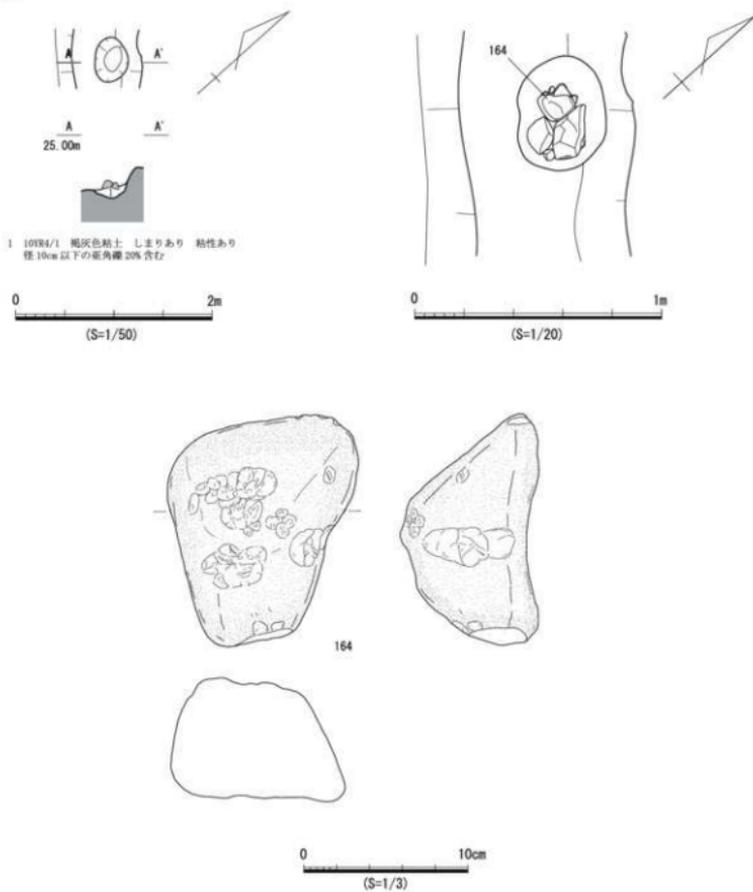


図99 SK1072遺構図、遺物実測図

第6節 攪乱坑・遺物包含層出土遺物

比較的残存状態が良好な遺物を18点図示した(図100・101)。

165と166は縄文土器である。165は波状口縁となる縄文時代中期後葉の深鉢である。口縁部に隆帯による文様を施す。166は変容壺の肩部付近で、縄文時代晩期末から弥生時代初頭にかけてのものである。横方向の条痕の下に幅1cmほどの突帯を貼り付け、その上を押圧する。

167は清郷型鍋である。10世紀後半のもので、内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。

168～174は須恵器である。168は産地不明の畿内系の坏身A類で、美濃須恵産のもの比べて胎土が暗い。美濃須恵産IV期第2小期又は第3小期併行に比定した。169は美濃須恵産IV期第2小期又は第3小期に比定した坏身B類で、外面底部が段状に突出する。170は美濃須恵産IV期第1小期又は第2小期に比定した長頸瓶の頸部である。171は産地不明の畿内系の壺で、器壁が厚く、美濃須恵産のもの比べて胎土が暗い。美濃須恵産II期併行に比定した。172は産地不明の平瓶で、美濃須恵産IV期第1小期又は第2小期併行に比定した。173は美濃須恵産IV期第2小期又は第3小期に比定した甕である。焼成不良のため色調が全体的に灰白色である。摩滅が著しく、内外面ともに調整は不明瞭である。174は美濃須恵産の甕の胴部で、内面には青海波状の当て具痕、外面には格子目状の叩き目が残る。時期は不明である。

175は山茶碗で、尾張型第4型式である。

176～179は中国陶磁器である。176は白磁碗IV-1b類で、厚めの玉縁状の口縁を有する。177は白磁碗IV-2類又はV類で、底部内面の外縁部が露胎する。玉縁状の口縁を有する。178は白磁皿II類で、高台が露胎する。179は龍泉窯系の青磁碗I-5類で、片切り彫りによる竊蓮弁文が施される。

180・181は石製品である。180は軟質の粘板岩製の打製石斧である。表面の摩滅が顕著で、剥離面が不明瞭である。181は下呂石製の打製石鏃である。

182は鉛玉である。

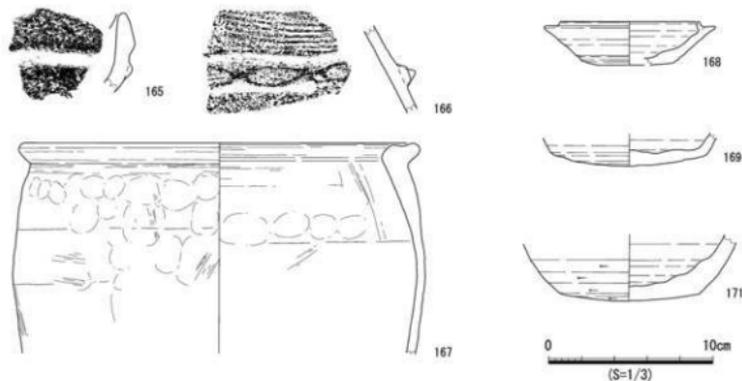


図100 攪乱坑・遺物包含層出土遺物実測図(1)

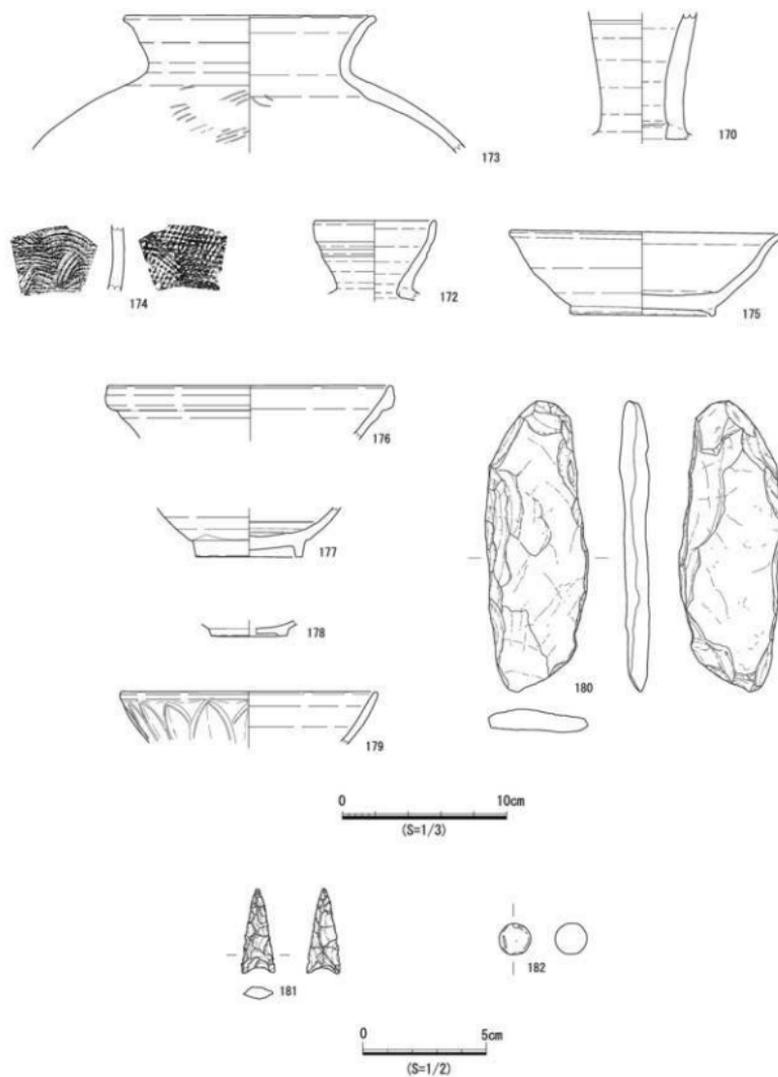


図101 攪乱坑・遺物包含層出土遺物実測図(2)